

吸血鬼Vtuberになる直
前に自分のアバターに
襲われて本物の吸血鬼
になった

稲光結音

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

企業配信者集団アバターモエクス。その五期生としてやっていく女性はスマホの中の吸血鬼に嘯まれ、配信で使う予定だった立ち絵そっくりの吸血鬼へと変貌させられてしまう。

男の演者が嫌われる女の園で、美少女電脳吸血鬼ブラッディ・メアリーとして活動していく彼女は人間達に素晴らしい配信を見せる事ができるのか!?

それはそれとしてあまりの美少女ぶりに彼女を狙うガチレズの陰謀が迫る！ 負けるなメアリー！ 肉欲は常に君を狙ってくるぞ！

この物語を考える元になったのは『ヴァンパイアが吸血鬼系Vtuberになってみた!』様(<https://syosetu.org/novel/231591/>)の影響によるものが大きいです

この物語は小説家になろうでも掲載しております。

目次

吸血鬼になって同期のリレー配信を見た

1

祝・初配信というには謎が多すぎて

10

反省会？ してジュース作って一つに

なった

21

眷属と陽の下の吸血鬼と二回目の配信開

始

32

二回目の配信はリスナーに私の誕生につ

いて話そう

42

デス子で相談と彼の炎上と我がふり直せ

52

母との接触と二人の男の話

63

掲示板1

75

マネージャーのお説教とスマプラ

120

スマプラ恩赦とビーベックスコラボ

130

降臨・倉瀬アズキ

142

V Sアズキちゃん様

152

掲示板2

162

淫欲のくじらサーバー

211

A S M Rの双子

220

コラボピッチ (コラボだけじゃない)

229

番外「ミス・パンプキンのある日の配信」

239

チャンネル登録者数五万人記念凸待ち企

画（前）

248

チャンネル登録者数五万人記念凸待ち企

画（後）

259

ブラッディパーティー前夜祭

269

薔薇よりも香しく

280

お別れは突然に―永遠なれヴァンパイア

290

吸血鬼になって同期のリレー配信を見た

これから私はアバターモエクスという会社の吸血鬼系Vtuberとしてやっていく。金髪ショートの赤い眼をしたロリっ娘で伸びた犬歯もチャームポイント、そんな見た目に見合うだけのロリボイスを出せるのが私の採用の決め手だろう。傲慢で可愛いツンデレ娘を演じてみせる。それが私に課せられた役割だ。初回配信は明日、同期とのリレーで行う。一人一時間の合計四時間配信。そのトリとなる。

「これからよろしくね、私は貴方よ。ブラッディ・メアリー」

私のスマホ画面に映った私のアバターであるメアリー、その立ち絵に向かって頭を撫でるようにスマホに触れた。

チクリ、と痛みが走る。何事かと指を見るとその手からは血が大量に流れていた。

「え？ なに？ スマホで切った？ なにそれ」

混乱しながら画面を見ると、ブラッディ・メアリーの口元、とくに歯に血が付いていた。それも、画面の向こうで。

零れる血が画面に滴り落ちると、メアリーはそれを嬉しそうに舐めとり、スマホの中に血液が吸い込まれていく。

「立ち絵が動いてる……!」

スマホの中のメアリーは私の動きを反映して動く。逆に言えば、それ以外の理由で動いたりほしくない。

それなのに動いた。AIなんかじゃない。画面の中から私を噛んできた。それで私は怪我をしたのだ。なんて非現実的な。

ドクン、と心臓が跳ねた。眩暈がすると同時に高揚感がする。全能感と言ってもいい。今、私は人よりも優れているという絶対的な自信。圧倒的な力を得たという確信。指の先から広がっていく熱が不快ではなく、むしろ愛おしい。

そこで私はふと思いつ出したのだ。吸血鬼に噛まれた人間は吸血鬼になる……そんな言い伝えを。

引く気配の無い体の熱に私は立っていられなくなり、倒れながら意識を失った。

冷えたカーペットの感触を感じながら私は目を覚ました。

起き上がろうとした私の手の甲がいつもより小さい事に気が付いた。それだけじゃない。黒いマントのようなものを身に着けていた。

スリープ状態になっているスマホを手に取り、小さな手でスマホのカメラを起動し、インカメラで自分を見ると、それは金髪で赤眼のロリっ娘だった。つまり、私がVtu

berのブラッディ・メアリーそのままの外見になっていた。

「なにこれ……! じゃあ本物の私はどうなったの!？」

そのままVtuber用アプリを起動すると、彼女は私が頭を動かすとそれに連動して頭を動かす。それだけだ。また血を吸われるかもしれない恐ろしさがあつたがそれでも指をスマホに触れさせてみるが、何も起こらない。

「私とメアリーが入れ替わった訳じゃない。一番ありえそうだったんだけど……じゃあ私の身体はどこに?!」

私は自分の財布を漁って保険証などを確認するが持ち去られたものは一見無い。つまり、私の身体が勝手にどこかにいったとは考えにくい。つまり……

「ブラッディ・メアリーそのものに変化しちやつたのか……? 私は……」

手元を見れば噛まれた指先の怪我也残っていない。この部屋で変化したものは自身だけだ。

「く、くくく……」

なんだか笑いが止まらない。壊れた訳じゃない。ただただ、いい気分だ。人を超えた力を持った事実が嬉しい。

今まで嘗められてきた私が怪物だ。昔在籍していた会社で使えないと馬鹿にされてきた私が、あいつらよりも上位の存在になった。奴らなんて一発殴れば死ぬ。吸血すれ

ば眷属だ。

それは優越感を引き起こし、私の中の演技でしかなかったはずのメアリーが目覚める。

「そうだ、私こそブラッディ・メアリー！ 餌に過ぎない人間どもに興味を持ち、配信を始める変わり者の吸血鬼！ ふ、ふふふ……はあーっはっはっは！」

テンション上がりっぱなしの私を窘めるかのようにスマホのアラームが鳴った。私と同じ五期生の配信直前ミーティングの時間だ。

「もうそんな時間か……なんだ私は一日中寝てた事になるぞ」

そんな愚痴を呟く頃には、もう私は私の事を忘れていた。我ながら薄情なものである。もしかしたら、吸血鬼化の一部に元の自分について考えさせないようにする仕組みでもあるのかもしれないけれど、そんな慎重な思考はない。私は私が吸血鬼であるという現実に急速に馴染み始めていた。

無料ボイスチャットアプリ『デス子』をPCで起動してアバターモエクスサーバーの五期生のボイスチャットのページを開き、同期三人とのチャットを始める。

「私が最後か。待たせたな」

「うつつメアリーさん。余裕ありそうで何よりつつすよ」

この男はサイバ・ワーウルフ。アバターモエクス二人目の男V t u b e rで狼男の設

定となっている。

「サイバはもう駄目なの。男だから叩かれるって今からぶるってるの。何のためにアバターモエクスに応募したのか分からないの〜」

ゴースト・フネ。自称良い霊だが趣味が船を沈める事。悪霊である。

「駄目だったら三期生のダーさんに慰めてもらいな〜。あの人はオネエとはいえアバターモエクス初の男Vって事でもっと大変だったんだからねえ」

ミス・パンプキン。頭にカボチャを被り顔の一切を隠したナイスバディな女性。顔が残念とはこの事だろう。

「実際、我々五期生だけでフォローは難しいからな。伸びていないところをコラボしたところで悪意ある視聴者なら同情でコラボ狙いだとか悪く考えようとすればいくらでも悪く考えられてしまう。女所帯に入る男に厳しい眼があるのは分かかってここに来たんだらう?」

視聴者だった頃から思っていた。女Vというものはガワが可愛ければそれだけで一定の層を取り込める。それに比べて男は面白くないとその時点で失格。厳しい世界だ。

とはいえ、面白くなければ伸びが悪いのは女も同じことなのだが。

「サイバはゲームが得意だと聞いたの。次回以降はゲーム配信で腕前見せて、今回はゲームあるあるとかで一時間持たせるの」

「あとハツシユタグだね。まー、いくらなんでも誰もまともに進行に付き合わないなんてことはないだろうからさ」

「……うつつ。頑張ります」

そんなこんなで他の同期が人狼のサイバを励ましていると、配信開始時間が近づいてきた。最初に切り込むのはゴースト・フネ。幽霊系V t u b e rだ。

「みなさんこんばんはなのー。良い幽霊のゴースト・フネなの。仲良くして欲しいのー」
立ち絵が常にふわふわと浮いて幽霊である事を示している。

『かわいい』

『いい霊……守護霊かな?』

『プリン好きそう』

「守護霊ではないの。趣味は船を沈める事なの。プリンは好きなの。特に低糖質のカスタードプリンと冬限定の低糖質チョコプリンが好きなの」

『こわい』

『悪霊じゃねーか!』

『幽霊が糖質を気にするな』

突っ込まれながらも掴みはオーケー。順調な滑り出しを見せてくれた。

問題は次だった。

「どうも。狼男のサイバ・ワーウルフっす」

『でたよ男粹。五期生の応募で男粹とかいらなと思つてたんだよ』

『はークソ。アバターモエクスは女ばかりだからいいの』

『陰キャ声』

ボロカスである。なぜ人はここまで残酷になれるのか。

「俺、ゲームとか好きでさ。これからそういう粹やつてくから見たいんだよな」

『アズキちゃん見るわ』

『ゲームならユズリハとかコノエでいいんだよなあ』

『モエクスも女視聴者欲しいんだろなあ。こういう男で釣つてさ』

『釣ろうとしてんのはこの男だろ。モエクスの女釣る気だよ。最悪』

一期生や二期生のゲーム配信者の名前まで出されて散々ではあったが、なんとかハツシユタグまで決める事に成功していた。タグ案に出てきたのがサイバの憂鬱だとかサイバの消失だとか悪意のあるものも少なくなかったことを考えると、大成功とはいえない。受け入れてもらうにはまだまだ時間が必要そうだ。そして次。

「どもども、ミス・パンプキンだよー。このカボチャねー、二、三日で臭くなつてくるんだよー」

『ハム☆スター以来のネタ粹』

『お前……今日が十月三十一日だからいいけどそのあと賞味期限切れるネタだろ……』
『ハロウィン限定配信者なのか……?』

視聴者大混乱。ちなみにハム☆スターは四期生で名前とは裏腹にリスの獣人とかいうネタキャラである。四期生は全員獣人なのだ。

『あ、体つきはえつつつだこの人』

『でもかぼちゃだ』

『女体の無駄遣い』

「ミロのヴィーナスみたいなもんでしょー。顔は想像しな。新しい衣装貰っても絶対かぼちゃは外さんぞ」

『そんなー』

『なぜそこで断固たる意志をみせてしまうのか』

『そこをなんとか……』

「んー、分かった。夏までに衣装貰えたら頭スイカにしてやるわ」

『違う、そうじゃない』

『パンプキンとはなんだったのか』

『被り物に逃げるな』

フネが可愛い系だとすればパンプキンは面白いタイプだ。彼女は伸びるだろう。

「さてさて、アバターモエクスは三期生からテーマが決まってるよね。三期生が職業、四期生が獣、じゃあ私達五期生は……？」

『ハロウィン』

『ハロウィンでしょ』

『明らかにハロウィン』

「え、なんでわかったの。こわ……」

『お前じゃい！』

『今日の日付とお前の被ってるもの見りゃ一目瞭然だわ』

『なんで引いとんねん』

V t u b e r の魅力は双方向性のコンテンツである事だ。視聴者との掛け合いが手い人は見ていて楽しい。現に私も彼女の配信を楽しんでいる。じゃあ、私ならば一体どんなコンテンツを提供できるのか……それを考えた時、私には閃くものがあった。

私には、私にしかありえないであろう出来事があったのだから、それを最大限に活かせばいいのだ。

ミス・パンプキンの配信を見ながら自身の配信の準備をして、ほくそ笑んでいた。やっぱり私こそが生物としても配信者としても最強なのだ。

祝・初配信というには謎が多すぎて

ミス・パンプキンの配信は終了。最後は私の番だ。現在時刻は二十一時を回ったところである。背景良し、BGM良し。スマホスタンドにパソコンと接続したスマホを立て掛け、PCで自分の動きと連動しているのを確認して配信を開始した。

「ごきげんよう。人間諸君。私が吸血鬼Vtuberのブラッディ・メアリー。人間を圧倒する力を持ちながら、人間無しでは生きられない神秘の存在。私は君達人間に興味があつてな。配信という形でお前達と触れ合うことにした」

『やっぱハロウィンがテーマなら吸血鬼はいるよな』

『最後の一人は魔女だと思つてたわ』

『可愛いじゃん』

『ロリが粋がつてて可愛いよ』

『一生懸命低音で雰囲気出そうとしてる頑張つてるロリつて感じしかない』

掴みは悪くない。ここからが私の本領発揮だ。

「さて、偉そうなことを言つたが私は困っている。なぜなら私は昨日今日吸血鬼になつたばかりの新人なのだ。吸血もしたことが無い」

『は?..』

『赤ちゃんじゃん』

『そりゃVとしては新米だろうけどさ……吸血鬼つてもつとこう、年季の入った強キャラでは?』

分かる分かる。そうだよな。悠久の時を経て、吸血鬼としての生に飽きて配信を始めるようなのが吸血鬼の格好良さポイントだ。それを捨て去ったのには理由がある。

「さて、そんな私だが。困ったことがある。血液の代用品をどうするか、だ。なにか案のあるものはないか? 効果的な案が出ない場合、都内で吸血鬼に襲われたという騒動が今後定期的にニュースに載る事になるだろう」

視聴者千人以上。この頭脳を活かして今後の私の生活を考える事にするのだ。

『やばいこと言い出した』

『通報した』

『ロリっ娘に吸われるなら本望。ぜひやってくれ』

変態はいらん。……いや、最終手段としてはありだな。SNSで交流して呼び出して吸血するか。とはいえここでそれを許容した様子を見せると選択肢がそれ一択になってしまう。

「私も昨日までは人間だったのね。血を吸う事に多少なりとも抵抗が無いことも無

い。一回にどれくらいの血液が必要かもわからんからな。代用品で済ませられるならそれに越したことは無い」

『まあベタなのはトマトジュースとか』

『ワインは?』

『ロリに酒飲まそうとするなや……ブドウジュースくらいにしとけ』

早速意見が出てきている。ありがたいことだ。

「案に出てきたものはこの後買わせてもらう。酒はこの見た目だ。買えないだろうがな」

『ロリだもんね』

『母乳……は無理にしても牛乳とか』

『ここでまさかのスポーツドリンク、ユカリスエツトとか。飲む点滴っていうし効果あるんじゃない』

『飲む点滴なら甘酒もあるぞ』

『エナジードリンクキめたら?』

『というか酒買えないの? 店員魅了すればいいだけじゃん。できないの? 吸血鬼なのに? 偽物っぽいな』

『エンタメ分かって無い奴がいるな……サンタはいないって言いふらして喜ぶ中学生

じやあるまいし』

ここに来て私が吸血鬼という事を疑う者が出てきた。しかしなるほど、魅了か。やってみる価値はあるな。

「魅了という発想は無かった。なにせ吸血鬼になったばかりだ。自分にどんな能力が備わっているかあまり分っていないくな。徐々に確かめねば」

『じゃあちよつとどんな能力があるのか確かめてみようよ』

『分かりやすいやつで頼む』

『吸血鬼らしい能力って言ったら結局吸血だしなあ。何かやつてくれるのか？』

やれることならある。吸血鬼の身体能力を利用した一発芸だ。

「ふふ、私の吸血事情を真剣に考えてくれた礼をしなければならぬからな。見せてやるとしよう。今私の手元にビニール袋に入ったパソコンを操作するマウスが入っている。ローラーがダメになったやつだ」

『あそこ壊れると地味に厄介だよな』

『地味にすげー使うんだよな』

『マウス談義はいいんだよ。そんなもんでなにするんだ』

これに力をいれてやれば。バキバキと音を立ててマウスが壊れていく。

『何の音だ？』

『なんか壊してる？』

『やべー音してるわ』

「なんてことはない。吸血鬼は怪力を持っている。人間さえ引き千切れるであろう剛力は、マウス如きあつさりと砕くさ」

とはいえこれ、何かに夢中になってマウス握りつぶす可能性があるわけで。今後はマウスの予備を常備しておきたい。

『やべーわ』

『ゴリラじゃん』

『握力つよつよすぎる……只者じゃないな』

本物の吸血鬼がいるなんて信じていないリスナーからすれば驚くだろうな。こんなロリ声の女がマウス握りつぶしたなんて信じられるはずがない。

「他の能力の調査に関しても血液の代用品探しと並行してやっついていこうと思う。ササヤキで進捗でも報告しようか。配信でまとめて言ってもいいけどな」

ササヤキは一回につき140文字までの文を送ることができるSNSだ。

『ササヤキで頼む』

『ササヤキ見るの面倒くさい』

『速報出すくらいはしてほしい』

「じゃあササヤキで簡単な速報を出して、詳細は配信で語るとしよう……さて、ハツシユタグでも決めようか。まず配信のやつにしよう」

『新米吸血鬼観察記録』

『ブラッディダンス』

『オーマイメアリー』

目についたのはこの辺りだろうか。ゴリラ呼ばわりしてきたやつは全スルーだ。自分がまだまだ吸血鬼の新米であるという事実を噛み締めるためにもここは。

「新米吸血鬼観察記録だな。十年くらい続いたとしても吸血鬼としては新米だろうか。続いてファンアートタグだ」

『新米吸血鬼観察絵日記』

『ヴァンパイアアルカディア』

『ロリ吸血鬼の姿絵』

一つ目のやつは露骨に狙いに来たな。決まったハツシユタグに寄せる事で統一性を持たせ、採用されやすくしようという寸法だ。しかし私はかっこいいのも欲しい。

「ヴァンパイアアルカディアにしよう。センチティブなやつはヴァンパイアシークレッツトアルカディアで」

『センチティブいいの!?!』

『センチティブ公認やったー!』

『ロリコン 歓喜』

「これでも成人しているからな。性欲には理解があるよ」

何気なく呟いた一言は視聴者に混乱をもたらした。

『え？ 成人?』

『まったく見えないんですがそれは』

『そういう絵を描いてもいいように設定盛ったな』

「ん？ そうか、話してなかったか。家でスマホいじってたら吸血鬼に噛まれてこの姿だ。吸血鬼は永遠の命だと聞くし一生この姿のままかもな」

『合法ロリじゃん……』

『永遠の合法ロリ……』

『メアリーちゃんすげえな。初日とは思えない情報量で圧殺しに来てる』

さて、他に話す事と言えば……

「ああ、そうだ。今後の配信について話そうか。とりあえず明日は血液の代用品がどうなったかの結果報告。その後の配信予定日はゆるくゲームでもやろうかと思っている。アバターモエクスは忍転道と一括契約結んでるしスイッチのソフトとかいいかもしれないな」

『お、スウィッチ持つてる勢か』

『スマプラ見たい』

『もつと雑談も欲しいわ』

今後の事はまた今度話せばいいだろう。特定されないように新しく購入し直したメインクラフトだってあるわけだし、雑談枠兼ゲーム配信も問題なく出来る。

「さて、自分でも調べるつもりではあるが。諸君には私の能力について考えてもらいたい。ま、明日の配信までに色々試すからその宿題をくれ、というところか」

『とりあえず吸血はしないでだけで出来るはずだろ？ 吸血鬼なんだし』

『怪力も発揮して見せたな。魅了は挑戦するって言ってた』

『動物変化はどうだ？ 蝙蝠とか狼になれるって聞くぞ』

『眷属作るのはできるのかね。朝とか世話してもらえばいい』

『マイナーどころだと動物と会話できるとか』

すぐ出来そうなのは動物変化くらいか。それなら今試してもいいかもしれない。

「じゃあ最後、動物に変身するの挑戦して枠締めよう」

自分が蝙蝠になるイメージ……湧かないな。自分を無数の蝙蝠にする？

自分をバラバラに……力を拡散させる感覚で……

そんな考えで脱力していくと身体から黒い霧が出てくるのが分かる。

自分という存在が輪郭を失っていく。強張っていた身体がリラックスして、まるで闇と一体化したかのような気分だ。

気付けば肉体はどこにもない。黒い粒子が自分自身だというように自由に動かせる。つまりこれは。

「霧化か……」

存在しない唇から放たれる独り言。黒い霧を一点に集中するようにして力を入れてやると、まるで元からそうであったかのように自分の、ブラッディ・メアリーの身体へと戻っていた。

「人間諸君。動物変化には失敗したが霧化することには成功だ」

『見てたよ』

『どういう仕掛けだ？』

『メアリーちゃんの身体が黒い粉になってぶわーっと広がったと思っただら一点にまとまって元に戻った。何を言ってるか分からないと思うが本当なんだ？』

一体どういうことだろう。私の変身が視聴者達に見られていた？ 画面越しに？

「何を言っているんだ？ スマホでは私の動きなんて身体揺らす程度にしか感じ取れないはずだろう」

『そういうすつとぼけいららない』

『確かに霧になるところ見たよ。戻るところも』

『じゃあそのスマホが凄いだらう。霧になるところもメアリーちゃん動きの一つとして認識したわけだ』

怖気が走った。そうだ。元々はスマホがおかしかったのだ。ブラッディ・メアリーが吸血したのではなく、このスマホが吸血したと言えるのではないか？ なにかオカルトじみたものを感じる。吸血鬼になった我が身を考えれば今更なのだが。

『これなら魔法とか血液を固めて武器にするブラッドウェポンとかも現実的だね』
そんな呑気なコメントを見ながら、スマホをなぞる。

PCの中の配信画面の私が画面を撫でていた。

アバターモエクスで動かせるのは頭だけのはず。

腕なんてものは搭載されていない。

『うおっ、びっくりした』

『疑似3Dなのか？ それにしては絵柄がアニメ調というか。ゆるゆる動くアニメ見た感覚だった』

『さっきマウスぶっ壊した時はそんな事無かっただろ』

高鳴る心臓を押さえつけ、私は冷静を装って言った。

「吸血鬼にはまだまだ秘密が多い。その謎を解き明かしたければまた会おう」

『乙』

『演出凄すぎ。負けたよ』

『また来るわ』

そんなコメントの流れを見ながら配信を切る。格好つけて言ったはいいが、謎を解き明かしたいのはこっちの方だ。

ついブラッディ・メアリーになった事を楽しんでしまったが、本当に良かったのだろうか。何か大いなる危険に飛び込んでしまっていないか。そんな不安が鎌首をもたげる。

「……コンビニいくかあ」

現実から目を背けるかのように一人呟く。小さくなってしまったその背に、のしかかった謎は重すぎた。

反省会？ してジュース作って一つになった

コンビニに行く準備をしているとスマホにも入っているデス子アプリから連絡が入った。ミス・パンプキンからで、用件としては五期生で反省会しない？ みんな集まってるよとの事だった。

家から出ながらスマホで歩きながら通話を開始すると、入ってきた第一声はサイバの泣き言だった。

「いやほんときついっす。俺はただゲーム配信がしたいだけなのに、なんであんな……」

「おー、メアリー入ってきたの。お疲れ様なのー」

「おつすメアリーちゃん。お疲れー。びっくりするような演出仕込んでたねえ。トりに相応しかったよ」

あたしなんかネタキャラだからねえとパンプキンは笑う。トーク力あるとはいえカボチャ頭に黒のラバースーツの変態だからな……

「メアリーさんお疲れっす。初配信上手くいっててよかったっすね。羨ましい限りですよ。俺なんて視聴者の悪意に晒されてたっつていうか」

「ずっとこの調子なの。この愚痴聞きながら二人の配信見たフネを褒めてほしいの」

「声荒げたりはしないんだけどね。とにかくずつと暗い。メアリーちゃんも付き合っておくれよ」

これ私たちの、じゃなくてサイバの反省会じゃないか。コンビニ着くまでは付き合つてやろう。

「コンビニ入って飲み物買う段階になったら切るからな。それまでの短い付き合いだ」「ん？ ああ、血液の代用品探してやつか。あれは考えたね。しかし吸血鬼開始初日とは思いつつた設定だ。しかし本当にやるとは律儀なことだよ」

「メアリーの初期設定とは若干齟齬がでるけど構いやしねーの。フネ達V t u b e rは面白い事が正義なの」

「そういう意味では俺は悪つすね、ははは……」

本当に陰の者だなこいつ。

「サイバよ。殴られ屋を知ってるか」

「え？ 突然なんですか。そんな物騒な仕事知りませんよ」

「金貰って一定時間殴られる……と言っても実際は避けて良いんだ。いちいち直撃したら身体が持たない。殴られますという体で全部避ける。それで金だけ貰ってハッピー、挑戦する側もフルスイングしてストレス発散してハッピーってわけだ」

「はあ……」

突然なんだって感じだな。まあいいか説明してやろう。

「お前は女所帯に入ってきたタンクみたいなものだ。だからといっていちいち殴りかかってきた視聴者からの攻撃に直撃してどうする。身体が持たないぞ。何のためにアバターモエクスに入りたかったか覚えてるか?」

「それは、一期生のアズキさんが飄々とした態度でゲームをこなしていくのが格好良く
て」

「なら、憧れの人と同じく飄々として見せるんだな。視聴者とのプロレスだってエンタ
メの内だぞ」

説教臭くなった。くだらないな。

「コンビニ着いた。切るぞ」

「メアリーさん」

「なんだ?」

落ち込んだ様子のままのサイバが声をかけてくる。

「配信が上手くいった人には俺の気持ちなんて分からないですよ」

本当にくだらないな。これでも心配していたんだが、通じないか。それはそれでいい。それがサイバの選んだ道だ。私は通話を切ってコンビニに入って入ろう……として足が止まった。自動ドアだけが目の前で開いていく。

「いらつしやいませー」

そんな店員の一言になぜか身体が反応し、足が進んで店内に入ることが出来た。

わけわからんが構わない。酒も買えるだろう。なんとなくで霧化した時とは違う。私は本能で魅了の魔眼の使い方が分かる。なぜそうなったのか私には分からないが、便利なので助かる。いやそんなわけあるか。不気味だわ。

牛乳、ワイン、紙パックの甘酒、適当なエナドリ、ブドウジュース、トマトジュース、ユカリスエツトを購入してレジへ。

「ねえ君、まだお酒は駄目だよ」

「いやいや、私は大人だよ。よく見てくれ」

視線を交わすと、店員は黙ってバーコードを読み込み始めた。

『20歳以上ですか?』と表示されたレジ前の機械の承認ボタンを押し、金を払って荷物を持って店から出る。

今は二十三時二十分。まだまだ人が歩いている。帰りは霧化で楽しようと思ったのだが……霧化で楽? あの状態のまま移動できるなんて、しかも荷物を持てるなんて私は知らないはずだ。だが分かる。

なんだか吸血鬼化してからこんな事ばかり起こる。

自分の事についてきちんと色々調べなければならぬ。今日は長い夜になりそうだ。

さて帰宅。しかし靴もこの姿に変化した時に履いててよかった。これからは部屋では履かないで玄関に置いておこう。

身体が飢えを訴えている。仮吸血タイムといこうじゃないか。まず一番効果に期待してない甘酒から。台所からコップを持ってきて入れてみる。白濁とした液体が注がれていく。飲む。

口に合わないな。吸血鬼としての本能が満たされた感じもしない。外れだ。

流石に効果無いだろうけどコメントにあったエナジードリンク。緑と黒の缶のやつを買ってみた。炭酸がキツくて少女の身には合わん。効果も微妙な感じだ。無いことも無い。これが好きな吸血鬼 *V t u b e r* いたからほんのちよつとだけ期待してたが、そう上手くはいかないか。

続いてトマトジュース。真っ赤な液体は血液を連想させ、目の前に置かれると意外と空腹感を煽る。飲んでみるとこれはなかなか。ただ、なんとなく物足りない感じがする。とはいえ、空腹の腹に確かに染みた。

更に牛乳。成分的にはほとんど血液らしいから期待していたが、なぜか違う。プリンと茶碗蒸しくらい違う。没だな。

今度はブドウジュース。衣装が黒マントを身に着けた貴族然としているため、ブドウ

ジュースとかワインは大きなワイングラスに入れて飲んでたら似合うだろうな。鏡見なくても分かる。これは……いかに飲み物って感じだ。人間だった頃に、喉が渴いて麦茶を飲んだのと変わらない感覚。命の水とでも言うべきか。いつの間にか芽生えた吸血鬼のプライドが無ければ、ぶはあーとか言ってるころだ。というかその、心が吸血鬼化してるのが怖いんだよ。

で、ユカリスエツト。これが意外と大当たり感とそうじゃないんだよなあ感の入り混じった感覚だ。今までにない充足感と何かが不足している感覚。焼肉のタレで焼いた肉をおかずにご飯食べてるのに肉に味が無くてちよつとの肉汁とタレとご飯で食べてる感じ。肉が味の抜けたガムみたいになってるんじゃないかと疑う。そんな雰囲気だ。栄養は確かにある。

ワインはブドウジュースと変わらん。成分的にもアルコール入ってるか入ってないかくらいだもんな。これいちいち魅了して買う価値は無いわ。酔わないし。嗜好品にもなりやしねえ。普通の美味しい水。

ここまでやって正解が導き出せた。混ぜりゃいいんだわ。トマトジュースとブドウジュース、ユカリスエツトを組み合わせて、ミックスジュースの完成だ。この飲み物の名前は次の配信で視聴者に決めてもらおう。

「空腹は凌げてる感じあるし、これでいこう。ただ、どうしようもなく我慢できなくなっ

たら吸血することも考えないといけないな……」

夜中に一人でいるような人を狙って吸血して、魅了で記憶操作して。うーん、思考が本当に吸血鬼。吸血鬼ハンターとかいるのかね。そういうのから正体を隠すためにもそういうせせこましい事やってるんだらうけど。

「実際どうなんだ。人襲って暴れまくるパターンだと。警察が来て、睨み合いに……なるのか? 普通に全員蹴散らせるぞ? そこまでするべきじゃないと私の理性が言っている。」

そう、理性といえ。ところどころ吸血鬼化してる私の頭が問題だ。いや、身体もだけど。

とりあえずササヤキで呟いておくか。速報、魅了成功つと。

『魅了したのか……俺以外の男を……』

『もしかして人間襲った?』

『いや、ワイン買う為だろ』

『→本当に未成年な訳ないだろ。ネタだよネタ』

『→巻き込みリプライやめてください』

なんとも楽し気なフォロワー達のやりとりを見ていると混乱していた頭がいい感じに現実逃避してくれる。

吸血鬼になったとして、何か問題があるのだろうか。この優れた能力で配信者として人々を楽しませられるなら、それでいいのではないか。

例え、吸血鬼化が進んで、理性が完全に吸血鬼のものとなっても……そうだったら、私は本当に私と言えるのだろうか。今の私は……誰だ？

人間の頃の私とはもう言えない、かと言って完全にブラッディ・メアリーというわけでもない。半端な存在。それが私だった。

「戻る手段は検討もしていない……ただ初回配信の事だけを考えていた。そして、これからの配信の事もこの姿でやる事を考えていた。私は……もう吸血鬼になりたいんだ」
パソコンに接続したままのスマホに表示されたブラッディ・メアリーの立ち絵に触れた。

「私は貴方になりたい。こんな半端な状態は嫌。元の身体を対価にこれだけ吸血鬼にしてくれたというのなら、私は……他の人間だっていくらでも貴方に捧げてみせる。だからお願い。私を完全な吸血鬼にして」

そう呟いてみるが、何の効果も無かった。ただ無為な時間が流れるだけ。
念じるのを諦めスマホから手を離れた瞬間だった。

一つの能力の使い方が頭に入り込んでくる。電子機器の中に入る方法。

アンデッド故に動いていない心臓が脈打っているような気さえした。それほどまで

にドキドキしている。パソコンの中に入るなんて、吸血鬼とは何の関係も無い能力だ。つまりそれは。

「ブラッディ・メアリーの能力……メアリーがアバターであるが故の、スマホやパソコンの中に存在する手段」

私の願いは叶うのだ。私はメアリーになれる。吸血鬼の少女、メアリーに。

パソコンに手を当て、自身を電脳存在に変換し、中に入っていく。

そこは私が描いたイラストの屋敷の中だった。

そして、そこでは私じゃないもう一人のメアリーが大きなソファに座っていた。

「あ……」

彼女は立ち上がると私の元へと歩いてきて、無理矢理手を握ってきた。

そうして彼女は、徐々に私の中に入ってくる。

データを上書きして貼り付けされた。

彼女のすべてが私に入ってきて、そしてコピー元の彼女は一言も喋ることなく消えていったのだ。

よく考えたらそれもそうだ、ただの立ち絵にすぎないメアリーに言葉を発する手段なんて、無い。

あるのは設定だけ。しかし、その設定を現実に変える力を持っている。

その全てを私は引き継いだ。そして今や私がただ一人のブラッディ・メアリーになった。

人間だった私は指先を噛まれて半端者の吸血鬼となり、そして今、本物の吸血鬼として誕生したのだ。

今なら分かる。私は侵略されそうだったのだ。私を媒体にして外に出るという目的のための。狭い箱の中は嫌だというのが立ち絵にすぎなかった彼女の願い。

只者でありたくないという現実の私と、本物の夜に生きたいという電腦世界の彼女。一つになった事でそれぞれの夢が叶った。

パソコンの外に出て、時刻は三時、そろそろ寝なければならぬ。しかし、それよりも先に眷属を作っておくべきだ。太陽の出ている間、トラブルを解決してくれる頼もしい従者を得なければならぬ。

当然のようにそんな事が出来てしまうわけだ。私は電腦世界を生きてきた吸血鬼、ブラッディ・メアリーなのだから。

そして私は一人だけ血液を吸ったことがあるらしく、血を吸った者を眷属にできるため、一人だけ作れるという事になる。

そんなわけで私は代理血液のミックスジュースをガブ飲みし、吸血鬼パワーを補充した。どうにもその眷属候補はもう身体が存在しないため、本来はやらなくていい、身体

をほぼ一から作るといふ工程が必要なようだ。

「生まれいでよ我が眷属……！」

闇が集まり、一つの人間の形を取っていく。その姿は見たことのあるものだった。

「人間の頃の私じゃないか。これは」

そーいや血吸われてたものね。納得。

眷属と陽の下の吸血鬼と二回目の配信開始

さて、目を覚ましたこの眷属。人間だった頃の私というのは使い道がある。こいつに今まで通りの生活を送らせれば、それだけで私が存在変換した事実を誰も知らない事になるだろう。私は今までの仕事に追われる事も無く、眷属任せにすればいいのだ。

彼女はイラストレーターで、家にいることも多い。ともすれば私の世話役もすっかり果たしてくれるだろう。

働いてるから収入だつて手に入る。私はヒモだな。情けないがこのロリボディを働かせてくれる場所など無いだろうから仕方あるまい。収益化通つたら少しはそういう面でも楽できるか。

家族にだつて心配がかかる事が無い。この眷属を人間だった頃の私だと思ひ込むであらうから。つまり私は身バレの心配の無い新しい時代のV t u b e rとなつたのだ。

まあ、ある意味身バレはするのだが。この吸血鬼の姿は外に出かけたら見られるわけだし。なんというべきか、夢を壊すような身バレが無いと言つた方が正しいか。

「おい、お前はこれから人間として暮らしていた時と同じように活動しろ。ただし私に何かあれば、それを最優先に行動するように。出来るな」

「はい、お任せください。ご主人様」

自分に敬語使われるの凄いと違和感。いや、慣れねばなるまい。私はもう吸血鬼。人間だった頃の私とはおさらばしたのだ。おさらばどころか目の前にいるけどな。

「私はもう寝る。ベッドはお前が使い」

「それではご主人様は……?」

「パソコンの中の屋敷で寝起きする。電腦吸血鬼とは便利なものだな」

かしこまりました、と一礼する眷属から視線を外し、電腦空間の自宅へと入っていく。この屋敷の図面も頭に入っている。迷う事は無いとはいえ配信部屋と寝室以外は使わなそうだが。

光の差さないこの屋敷で心配することも無いのだが、吸血鬼の様式美というやつで寝室の棺桶で寝る。一応ベッドもあるのだが、そこから枕だけ持ってきておやすみなさいだ。

目が覚めた。棺桶の中で手元のスマホをいじっていて思ったが、これ元々眷属のものだ。持たせておかないとトラブルの元になる。それに気づいて私は屋敷の配信部屋にある現実世界との出入口であるパソコンを通して眷属のいる現実へと渡ってきた。

時刻は昼頃、陽の光が眩しくて仕方がない。パソコンの前に座っていた眷属のすぐ横

に着地して、スマホを差し出す。

「おい眷属。お前はこのスマホを持っておけ」

「ありがとうございます。助かります」

とりあえずこれでやる事は終わった。またパソコンの中に入って眠ってもいいのだが、私の中の好奇心が、この身体が太陽の下でどのくらい活動できるのか挑戦したくなってきた。

陽の光が差し込むこの部屋で眩しい以上の感情が出てこないのだから、命の危険は無いであろう。私はどうにも吸血鬼として優秀な部類に入るらしい。

そしてなにより、私は腹が減っている。あのミックスジュースの素材を買ってきて飲んでやろうという気分である。眷属の血を吸うのも考えないでもないのだが、一回の吸血での血液消費量が分からないため失血死されても困る。そういうのはもつとどうでもいいやつで試してからだ。

「それにしても」

「ん?」

眷属が話しかけてきた。しかしこいつ、もつと喋る人間だったはずなんだけどな。まだ眷属化が馴染んでないのか?

「今のご主人様は色が薄いですね」

そう言つてこちらに鏡を向けてくるが、私は映っていない。

「悪いが、吸血鬼は鏡に映らないのだ」

「ではこちらで」

パソコンに接続されていた、V t u b e rの仕事用のスマホを見せてくる。そこに映っているのは私だ。

ただし、銀髪で、眼も色を失い銀色だ。金髪で赤眼をした私はどこにもいない。

「おお、確かに。というかこのスマホに映っている私、ただの立ち絵じゃなくて現実の私の動きを完全に再現してるじゃないか。まあ、それは昨日からそうなつてたか」

つまり配信の時はカメラを通じて上半身の動きがなんとなく再現されるのではなく、本当に私を移す唯一の鏡のようなものになるのだろう。そしてそれは配信中、視聴者にまるまる放送される事になる。スカートぱたぱたして涼を取ろうとしたら皆に見られるので駄目だということだ。別に暑さ寒さは感じないが配信中は気を付けよう。

しかし3Dのように自由に動かせるアニメ絵の私か。これは配信において、強い武器になるのではないだろうか。

「とりあえず出かけてくる。なにかあればメールを直接飛ばす。この能力があれば新しくスマホを買う必要も無いな」

「ついていきます。ご主人様は吸血鬼なのですから、途中で太陽の光にやられてしまう

可能性もあるでしょう」

「それはそうだな。よし、ついてこい」

という流れで出かけたのだが、分かったことが一つ。太陽の下では私の能力が色々制限されるらしい。怪力と再生は多少できる感覚があるのだが、吸血すらできなくなる。この銀髪銀眼の状態では血を吸うための犬歯がどうにも調子がよくない。霧化もできないし眷属作成もできない。

受動的な能力というか、勝手に発動する力はある程度使えるようで、他には動物と会話する能力が動物の声を聞く程度に制限される感じだ。

太陽の下でなつてしまう銀髪銀眼の私は、人間よりは強いが夜の私に比べれば断然弱いという当然の結果になった。

「はーっ……はーっ……」

あと身体能力、特に体力も落ちる。最寄りのコンビニまで持たなかった。

結局木陰で休んでるからミックスジュースの材料を買って来いと財布を渡して命令する事になった。今後は財布も返して、いくらか自分でもお金を持つておくようにしよう。新しい財布が必要だな。

「あーちよつと、大丈夫？」

そう声をかけてきたのは男だ。

「保護者の方はいないの？ お兄さんが探してあげるわよう。」

どうにもオネエという人種らしい。女より女らしい口調をしている。

「心配、いらぬ……ちよつと疲れただけだ」

「そう。でもやつぱり心配。一緒にいさせてね」

いい人なのだろう。話し方からそれが滲み出てくる。そのためかオネエ口調も不快さを感じない。

隣に座った彼はこつちを心配そうに見ていたが、スマホが鳴ると焦ったようだった。

「あら、ごめんなさい。ちよつとお友達から連絡があつてね」

そう言うスマホを取り出し、会話を始めた。

「サイバちゃん。……そう。少しは落ち着いたの。同期に酷い態度を取った。けど謝ろうと思えない……それは、貴方の弱さね。うん。大丈夫、貴方に配信を続ける気があるなら、いつかまた道が交わる時はある。その時までには強くなりなさいな。うん、アタシはいつでも相談に乗るから。ううん、いいのよ。うん、じゃあね」

そう言つて通話を終了していた。サイバ、配信……そこから導き出される答えは私の中には一つしかない。

「サイバ・ワーウルフ……」

そう呟くと彼は飛び上がらなばかりに驚いていた。

「えっ、貴方、サイバちゃんを知ってるの!? もしかしてファンかしら!」

私の両手を握って、彼は笑みを浮かべて問いかけてきた。

「いや、知ってるだけ」

「そう……でもよかった。貴方みたいな小さな子にも知ってもらえてるならまだまだ今後伸びるわ」

彼は眩くように、自分の事のように残念そうに語り始める。

「サイバちゃん。大変なのよね……アバターモエクススの五期生で、一人だけ初配信後のチャンネル登録者数伸びなくて。他が二、三千なのに対して五百ちよつと。モエク스에男を求めてる層なんて少ないから仕方ないかもしれないけど、落ち込んじゃって。打たれ弱いところがあるというか……最初から完璧に行くはずなんてないのに完璧を求めて、思い通りにいかない現実には打ちのめされる。まだ初回配信しただけよ? まだまだアピールのチャンスはあるのに弱っちゃって。見てられないわ」

「それで手を差し伸べてるの? 私にしてくれてるみたいにな?」

「そうね。そのつもりだけど……それがたぶん分かってるかは分からない。自己満足よ」

悲しそうな彼を尻目に、眷属が買い物を済ませてやってきた。

「お待たせしましたご主人様。帰りましょう」

「ご主人様……? 貴方、一体」

「私？ 私はね。メアリー、ブラッディ・メアリー。電脳吸血鬼よ」

心底驚いた顔をして彼は私を見つめてきた。

「確かに、見た事ある顔だとは思ったけど……髪と眼の色こそ違うけどアバターそっくり。そんな事あるの……？」

「あるのよ。そんな調子じゃ夜に私を見たらびつくりじゃすまないでしょうね。もう会う事もないだろうけど」

「そんな事無いわ。アタシは姉齒嘉麻。アバターモエクス三期生、モエクス初めての男 V t u b e r、ダー・バーテンよ」

まさか先輩だったとは。道理でサイバに肩入れしているわけだ。

「そう。貴方の心遣い。少しだけ嬉しかったわ。また会いましょう。先輩？」

眷属に指示を出し、私達はダー・バーテンに背を向けて歩き始めた。

帰ったらすぐパソコンの中に入って寝た。太陽の下で動くのがこんなに疲れるとは思わなかった。吸血鬼なのだから当然なのだけれど。

起きたらもうすぐ配信の時間だ。今回は試験的にパソコンの中から配信を試みる。

「ごきげんよう。人間諸君。私は電脳吸血鬼の V t u b e r、ブラッディ・メアリー。今日は私の屋敷から失礼するよ」

『こんバンパイア』

『絶対こんバンパイア流行らすな』

『背景のクオリティ上がってる』

『というか全身映ってる。脚組んで椅子に座ってワイングラス片手に持つてるって悪の組織のボスじゃん』

『パンツ見えそう見えない』

『というかアニメーション凄すぎ。今のワイングラスに口をつけるワンシーンなんて二次元が自由に動いてる感じじゃん』

テストは成功。 電脳世界の私を直接、世界中に配信できるようだ。 いちいちスマホのカメラに連動させて上半身だけ動かすなんてせせこましいやり方をする必要は無い。分かっていたことだが、実際に出来ると安心するものだ。

「ちなみに、このグラスの中身はトマトとブドウのジュースとユカリスエツトをそれぞれ1:1:2の割合で混ぜたもの。昨日は助かった。疑似血液は無事完成したよ」

『それ美味しいのか……?』

『あくまで血液の代わりだから』

『というか混ぜ合わせたのか』

昨日飲んだそれぞれの飲み物のレポートを語り、なぜこれが完成するに至ったかを話

すと視聴者は感心してくれた。

『へー』

『設定が細かい』

『これで人間襲わないんだね』

『襲われたかった』

「さて、この飲み物はオリジナルのミックスジュースだ。故に名前が無い。カクテルなんかにも名前がつけられるだろう？ こいつにも名前を付けてやって欲しい」

「こういう視聴者に問いかけるのもコンテンツの一つというものだ。私という世界観の一部になってもらう。」

『そのまんま疑似血液でいいんじゃないか？』

『ヴァンパイアブラッドとか』

『レッドウィング。翼を授ける感じで』

『血液とは別の飲み物って感じでアナザーブラッド』

ほう、いい案があるじゃあないか。

「アナザーブラッド。いい響きだ。それに決定」

ミックスジュース、アナザーブラッドの誕生だ。

二回目の配信はリスナーに私の誕生について話そう

このアナザーブラッドを持ち込んでいることから分かるかもしれないが、現実の持ち物を電脳世界に持ち込める。

さらに言えば、イラストとして描き込んだものもリアルな物体として電脳世界に設置される事になる。そしてそれを電脳世界から現実を持つてきてしまえば……？ 描いたものを現実を持つてくることさえ可能になる。なんでもありと思うかもしれないが、最低限イラストのクオリティだけは要求される。

私がイラストレーターで、眷属だつて人間の頃の私なのだからイラストレーター。なのでイラストの質の問題も楽々クリア。おかげでいい感じのワイングラスを手に入れた。器がいいとアナザーブラッドの味も少しは良くなったように感じるものだ。

『そーいやササヤキで魅了できるようになったつて言つてたけどどんな感じ？』

そんな話もあった。色々あつて忘れていた。

「アナザーブラッドの作成実験の為にこの姿でワインを買うための年齢認証突破するのに使つたよ。とはいえ、もうそんな使い方をする必要もないがな」

『？』

『と、いいますと』

「まず、眷属が出来た。大人の女性だ。あいつに買いに行かせればいい。そしてもう一つ、私自身が成長できる」

マントで顔を隠し、座ったまま吸血鬼パワーを全身に勢い良く循環させる。そうすれば、この幼い吸血鬼は体型をぐんぐんと大人のものに変化させられる。

『えつつつつ』

『おっぱいでっか』

『美人杉内』

『もどして』

『ロリコンがおるな』

ぼひゅつという音と煙と共に、私の身体が元のロリボディに戻る。あれはそうそう使えるものじゃない。

「これはエネルギーを大量に消費する代わりに成長できる裏技だ。今回は見せたが、今後はそうそう使わん。吸血鬼の力を増幅する必要がある時しか使わないのつもりなのでね」

『また見たい』

『吸血鬼の力使う時ってないだろ』

『配信に吸血鬼の力は使わんわな』

それはどうか、としか言いようがない。大人形態だと、面白いことが出来る。面白いのは私だけだけだな。

「それで、さつき少し触れた眷属についてなんだが。こいつには事情があつて名前をつけていない。そこで、お前達を仮にでも眷属と呼ぶと混乱をきたす。よつて、お前達視聴者の総称は家畜だ。いいな？」

『そこは眷属さんの方に名前つけてもろて』

『ロリに家畜呼ばわり……イイネ』

『お姉さん状態に家畜つて言われるならまあ』

意外と反応悪くないな？　だが、もう一押しさせてもらおう。

「素直な家畜が多くて私は嬉しいよ。とはいえ、納得のいかない連中もいるだろう。そんな奴らは自分たちの呼び名を考えてもらう。だが……一度私の眼を見て書き込みをしてみらおうか」

そう言つて、私は自身を成長形態。大人モードで魅了の魔眼を発動させる。

『家畜でいい。いや、家畜がいい』

『家畜と呼んでください』

『俺達は家畜だ』

『色気だ……いや、違うなんだこれは。服従したくなる。家畜である事を受け入れてしまおう』

「魅了の魔眼、というやつさ。まさか、画面越しなら吸血鬼だろうが安全だとも思ったのかね？ だからお前達は家畜なのさ」

大人モード終了。「画面の前の視聴者達の魅了も解けたことだろう。

『頭ぼんやりしてた……』

『魅了されるってこういう事なのか。すげえ』

『てことはまさか、本当に本物の吸血鬼……？』

グラスの中のアナザーブラッドを飲み干し、グラスを落として影の中にしまい込んだ。

「やつと分かったか。ここは電腦吸血鬼の危険な配信さ。とはいえ、魅了はたまに冗談でかける程度にするがね。なんでも思い通りではつまらない。そうだろう？」

『全然魅了なんてなくても服従しますぞお嬢！』

『本物の吸血鬼だったなんて……お嬢には参ったな』

『お嬢はこええけど……こんなスリリングな配信ねえや』

いや、お嬢ってなんだ。まだ魅了が解けてないのか？

「今の魅了で視聴者数も若干減った。怖くなったのだろうな。」

だが、構わない。家畜は配信を続けていればまだまだ増える。それに、お前達もいる」

『お嬢！ 感動しました！』

『貴重なお嬢のデレだぞ！』

『あざといデレの大安売り！ いいですぞお嬢！』

思い通りはつまらないとは言ったがお嬢はちよつとやめてほしい。ちよつとだけなので言及まではしない。

「と、いう事で私は吸血鬼なので活動時間は夜がメインだ。だからと言って二時三時の配信では家畜共がついてくるのが難しいだろう。私も夜の散歩をしたい時もあるしな。だから二十二時くらいから今後配信するので期待しておいてくれ。ササヤキも使うからそつちもチェックしてくれば間違いない」

『今回ササヤキ使つてませんがね』

忘れてたわ。

『せっかくの魅了回なのに宣伝不足悲しい』

『アーカイブ見てもろて』

『アーカイブで魅了されるのか？』

まあ、多分されるだろう多分。メアリーと一体となった今でも彼女に組まれていた設定以上には吸血鬼の能力について詳しくなっていないのだ。今回の件で言えば、大人の

状態なら画面越しにでも魅了が使える、というところまでは設定されていたがアーカイブについてまで言及されていない。よって私にも分からないのだ。

「さて、せっかくの雑談枠だ。私はセンベイも開設してないからな。溜まっている質問も無い。コメントからなにか質問を募集しようか」

センベイとは匿名で質問を送る事の出来るサービスで、ササヤキとの組み合わせで使われる。

「スリーサイズは？ 今さつき見ていれば分かる通り、可変というのが答えになるな」

その辺利用してロリ巨乳とかもやれるんだが、サブライズで使えそうなので秘密にして取っておこう。

「翼とか生えてないの？ しまってるだけだ。ちよつと力を入れれば……この通り」

生やして見せて、すぐ仕舞った。無駄に吸血鬼パワーを使うつもりも無いのでサービス程度にしておく。このムーブも評判良かったので気分がいい。

「トリオ・ザ・ハロウィンどうなった？ ん？ なんだそれは」

リスナーから聞いたことの無い単語が出てきた。

『フネちゃんが言ってたやつ』

『パンプキンとお嬢を誘って三人組でユニット組みたいんだって』

『サイバをハブにした実質五期生組って感じ』

なんだそれは。聞いていないんだが……これ今答えないと駄目なやつだろうか。とはいえ断る理由も無いか？ サイバの方はダー・バーテンがなんとかしてくるだろう。

「誘ってくれるというのであればやぶさかではないな。何をやるのかは知らんが、面白いことをしてくれるつもりなら参加しよう」

『おお！』

『可愛いフネちゃんと面白いパンプキンとヤバいお嬢のコラボレーションじゃん』

『サイバのいない五期生……推せる！』

あいつ本当嫌われてるな。結局配信開始二日目のゲーム配信は上手くないかなかったのか、それともまだ受け入れられるのに時間がかかるのか。とはいえ、それをリスナーに聞くわけにもいくまい。今、サイバに興味があるような反応を取る事は私とサイバ、そして視聴者の三方にメリットが無い。

「それじゃあその件は裏で二人と相談するとして、そうだな。今センベイやってないけどいるか？」

『いる』

『どうかんがえても必要』

『お嬢は謎だらけなんだから気軽に質問させて』

「いらないとコメントしたものはごく少数だし、いるかと言われていらないと答えたいだけの天邪鬼だけといった感じだ。」

「よし分かった。設立しよう……さて、結局ブラッディ・メアリーとは何者なの？ とう質問も多くなってきたのでこの辺りで答えておこうか」

『おお！』

『お嬢の謎が今明らかに』

『それ目当てで初回配信から追ってる。まだ二回目だけど』

「まず私の母は一期生の松葉チユリだ。これは知ってる奴も多いのではないか」

『知ってた』

『知らなかった』

『絵柄と、チユリさん配信少なくて忙しそうだったから多分そうだろうと』

「彼女によって私はより良いものを作りたいという熱意と、キャラクターに対する愛。そして詳細な設定が与えられた。吸血鬼に何ができるか、できないか、弱点……等々だな」

メタな話？ などのコメントもあるが、今は無視して説明を続けさせてもらう。

「そして私は気付けば何も無い箱の中。今思えばスマホだな。スマホの中にいた。そして私にはこの時から自我が生まれ始めていた」

うんうん、などと相槌を打ってくれる。それで？ と先を促す者もいる。

「二人の人間の元に送られた時、彼女は言った。私は貴方よ、と。だから私はその人間を乗っ取り、外に出ようと考えた。電脳空間から送れるだけの吸血鬼の力を与え、彼女はその力にどンドンと馴染んでいった。これが初配信の頃だ」

『A Iが搭載されてる訳でもない絵が自我を持つだけでもとんでも話なのに、設定されていた能力を人間に与えただって……？』

『普通に乗っ取ろうとしていて草も生えない』

『やっぱお嬢やばいやつだわ』

『設定凝ってるな』

『お前あの魅了受けなかったのか？ お嬢はガチだぞ』

「彼女はアナザーブラッドを完成させ、その身に取り込んだ。これが、私を受け入れるだけの下準備になったのだ。彼女は再度、私は貴方になりたいと言って私を望んでくれた。嬉しかった……だから私は、その人間を電脳空間に引きずり込み、私を与えた。彼女という人間に、私の設定と自我を上書き保存した。とはいえ、存在しない部分に上書き保存だ。人間の私の人格を完全に消したわけではない。せいぜい、重なっている部分が消えただけだ」

『結局一部消えてんじゃん』

『こっわ』

『本人が望んだことですしおすし』

『本当かー？ 本当に望んだのかー？ 吸血鬼化された時点でそうなるように仕向けられたんじゃないかー？』

『そうして完成されたのがこの私、電腦吸血鬼、元人間のブラッディ・メアリー。私になりたい私は願いが叶った。外に出たい私も願いが叶った。幸せな、ハッピーエンドというやつさ』

『勝手に終わらせないでもろて』

『結局、本物の電腦存在だから動きとかが他のライバーより自由自在って事でいいのかな』

『作り話としてはホラーって感じで面白かった』

『結局これ、設定次第では他に設定の力を得た存在が現実に生まれてもおかしくなさげ？』

『私と同じ吸血鬼か……他には魔女とかサキュバスくらいか？ 相手に干渉できるのは。これまでの話はこれで終わりだ。これからの話をしようじゃないか』

リスナー達に対する説明は終わりだ。これからはライバーとしてこれから何をしていくかの相談が始まった。夜はまだ長い。

デス子で相談と彼の炎上と我がふり直せ

二回目の配信が終わった私は、フネとパンプキンの待っているというデス子に入ってしまった。新しいサーバー、トリオ・ザ・ハロウィンに招待されていたので参加してみると二人は会話中だったので私も通話を繋ぐ。

「配信お疲れ様なの。配信終わってすぐで申し訳ないけど、フネも寝る時間が近いの。だから早めにトリオ・ザ・ハロウィンについて話をさせてほしいの」

「配信お疲れー。メアリーちゃんが電脳吸血鬼とかつていう新しい存在だったなんてねえ」

フネは言葉の通り眠たげで、話を進めないとおねむの時間だろう。なんせ今は深夜一時過ぎだ。

「まあ、ぶっちゃけサイバと繋がりが無い事を視聴者にアピールするつてのが目的なの」「同じ五期生だしサイバと仲良いんだろうつて思われる事はデメリットだっていうのがフネちゃんの考えでね」

なんとも堂々とした孤立化計画発言である。

「フネはサイバなんか足に足を引つ張られるわけにはいかないの。アバターモエクスは女

の子が楽しく遊んでるところを見せるコンテンツなの。それで伸びるのは今までのアバターモエクスが証明しているの」

「うちもリスナーと楽しくやつてるところにサイバの話が出て若干荒れるのは好ましくないんだよ」

男である。それだけでこうまで言われてしまうサイバが哀れだ。

「別にいつまでも繋がりを断つわけじゃないの。サイバがアバターモエクスとして受け入れられた時は、たまに、稀に五期生コラボするとかはするかもしれないの。それまではトリオ・ザ・ハロウィンというユニットとして活動しますというていを取るの」

「サイバには先輩の男ライバーのダーさんがついてるしね。向こうもそっちと一緒にやつてる方が気楽じゃない？ あいつに女に囲まれる趣味があるなら別だけどさ」

つまり、言葉を選ばなければ初回伸びなくて困っている同期を助けず、切り捨てるという事だ。しかし、サイバに構えば我々が助けにならずむしろ炎上を加速させるのも事実。そして、アドバイスをして受入れられないのも実際に確認している。

「配信が上手くいった人には俺の気持ちなんて分からない、か」

「酷い話だったの。数時間も愚痴聞いてきたフネも何のために聞いたのか分からない発言だったの」

「彼は結局、二回目の配信も上手くいったとは言い難かったよ。そこまでゲームが上手

かったわけじゃなく、コメント欄も相変わらず彼を配信者ではなく敵対者として見ていた。それでいい配信になるわけがない。あれはただのサンドバッグだよ」

そんなことになっていたのか。それはまた落ち込みそうだ。

「その時思ったの。またグチグチネガられて慰めてもそれを一言で切り捨てられるくらいなら、フネ達は先んじてサイバを切り捨てるべきなの。いつまでも後ろ向きな女らしい男に引つ張られて無駄に時間を使って駄目になるくらいなら、フネ達はグループ活動を通して同期の女で力を合わせてリスナーを楽しませるべきなの」

「それでデビュー二日目にしてユニット結成の提案をしてくるのだからこのパンプキン、行動力に脱帽さ」

「それで？ 具体的に何か活動予定はあるのか？」

さすがにハブるためのグループです何もしませんというのは体裁が悪いだろう。そう思っていたが、フネはしっかりと考えていた。

「二人にも起動確認して欲しいのだけれど、やれるならビーベックスレジエンスがいいの。あれならちようど三人でプレイできるから、余りもしなければ不足も無いの」

「ああ。あれなら確かに三人プレイだ。……しかし、『悪いなのびのび』、このゲーム三人用なんだ』をリアルにやる時が来るとはね。あれならデビュー前に軽く触った事がある。大丈夫だ」

「こちらもパソコンのスペックは足りている」

いざとなれば高級なパソコンをイラスト化して電脳世界に持ち込んでやればいい。そういう裏技についてもリスナーには話してある。卑怯だって言ってたわ。そりやそううだ。

だが、そういう反則的な存在が私なのだ。

「あとは歌なの。ハロウィンソングは世の中にたくさんあるから、運営さんに許可取ってもらってそれを歌って動画にするの。ただこっちは許可取るのにも時間かかるだろうし、徐々にやっけていくの」

「なんだってトリオ・ザ・ハロウィンだからね。ハロウィンらしさを押し出していくのは正当な方向性だろう」

「任せるといい。完璧な音程で歌ってみせよう」

譜面をダウンロードしてやれば完璧な音程が出せる。卑怯だと思うだろうがそういう反則的な存在が私なのだ。

「あとハロウィン配信でもするの？ 時間が合うならでいいの。ゴールデンタイムをトリオ・ザ・ハロウィンで染めてやるのも一興なの」

「フネちゃんもメアリーちゃんも今後ゲーム配信やってくんだっけ。それなら私が二番目に入って雑談で時間調整するよ」

「私は最後がいい。夜こそが吸血鬼の時間だからな」

そんなわけで、フネが20時から、パンプキンが21時から、私が22時からという風に決まった。フネが時間をオーバーしてもパンプキンが22時には放送を終了して、私にバトンをパスしてくれるというわけだ。

とはいえそれも基本の話。どうしてもパンプキンがずれ込む時は仕方ない。恨みつこ無しで時間をずらすという事になった。パンプキンだったまにはゲーム配信もしたいだろうしな。

「とつても実のある話ができたの。フネは大満足なの。これからもトリオ・ザ・ハロウィンとしてよろしく頼むの。おやすみなさいなの」

そう言つてフネは落ちた。私とパンプキンの二人が通話に残る形となる。

「……で、どう思う?」

「メアリーちゃん、それ、サイバのこと?」

「ああ」

結局どれだけ理由をつけようと、同期を置き去りにする事について彼女の意見も聞いておきたい。

「私もね、仕方ないと思うよ。私は多くの人を楽しませるために配信者になった。私が楽しませるべきなのはリスナーであつて、沈んでる同期じゃない」

「視聴者が望むなら、人ひとり排斥しても構わない。それはいじめとどう違うのだろうか」

「メアリーちゃんは、アバターモエクスの一期生について知ってる？」

「ああ」

アバターモエクス一期生。それは明らかに動きの違う元プロゲーマーらしき倉瀬アズキが、他三人にちよっかいをかける百合百合とした雰囲気が出てバズり、二期生の募集に至った。

一期生のそんな姿を見ているから二期生もそれを踏襲した。アズキに憧れて入ってきた女子だっている。

「女の子同士で明るく楽しく。私もやりたかった。それなのに同期に男がいて、そのせいでギスギスして……正直邪魔だとすら思ってる。なんで私の同期には男がいるんだろうって。ねえ、メアリーちゃん。いじめられているって言うのと皆から嫌われているって似て非なるものだよ」

「誰かが嫌っているから忖度して嫌うのか、本当にそれぞれが悪意をぶつけるのか……どちらも、針の筵の本人は辛いだけだ」

「皆がそれぞれ、人を嫌う権利を行使してるだけ。それがどうしてこんなに醜く映るんだろう。私はただ、嫌いなものを嫌いたいだけなのに」

……難しい、問題だ。

かく言う私もサイバにも興味が無い。世間は、それもいじめだというのだろう。いじめに無関心であつたなら、それはいじめに加担しているのと変わらないのだと。

解決できるとしたら。

「三期生に話を聞こう」

「——なるほど！ アバターモエクス最初の男Vtube、ダー・バーテンとその同期は私達と同じ体験をしてるはず！ メアリーちゃん冴えてる！」

「ただ、もうこんな時間だ。人間はもう寝る時間だろう」

気付けばもうすぐ二時になる。こんな時間に通話に押しかけても相手方を困らせるだけじゃないだろうか。

「でも一人くらい誰かいるかもしれないし、三期生サーバーに声かけてみよう。ありがとうねメアリーちゃん」

かくしてパンプキンは一人で三期生との会話に挑むのであった。しかし、目的が果たせなかったとの報告が入つたのは十分も経たないうちだった。

「どうした？ 誰もいなかったただけなら報告はいらないだろう」

「ううん、逆だよ。全員いた。ダー・バーテンの再炎上について対策を練つて忙しいから無理だつて」

どうにも穏やかじゃない。話を聞いてみたらこういうことだ。視聴者は、自分達がアバターモエクススの初めての男V t u b e rを受け入れたがために、サイバという二人目の男が入ってきたのだという論調になり、サイバの炎上に合わせ、ダー・バーテンも炎上しているということだ。

「……サイバの炎上？」

「簡単に言えば、こいつつまんなすぎ、だそうだよ」

特別ゲームが上手いわけではなく、どちらかというと下手で、かといってコメントを読むかと言えばそうでもない。視聴者の方を向いてるわけでもなければ視聴者を振り向かせるだけの力があるわけでもない。純然たる、能力不足……しかし、配信二日目のライバーに敵しすぎては。

いや、炎上の下地はあったのか。それがもう爆発した。よほど視聴者は腹に据えかねていたのだろう。

「我々は彼の炎上について話題にもしなかった。それに対して三期生は、この時間まで全員起きてダー・バーテンの炎上に対する対策を考えている。この差こそが、三期生と五期生の違いだろうな」

言ってしまう、絆を育んできた時間の差とでも言うべきだろうか。

「直接話した事は無いけどダー・バーテンはいい人っぽいのが配信から伝わってくるか

らねえ。人望だよ」

「その人望がサイバには無いわけだ。この違いがどこにあるのか。考えてみるか？」

「そもそもつまんないっていうのは本人の問題で他人がどうこういうものじゃないし、かといって、もし私達が相談受けたところで上手くいってる奴に自分の気持ちなんて分からないで終わりでしょ？ 相談されてもね」

「そうだ、相談され甲斐がない、全て突っぱねるような発言をするのが目に見えている。つまり性格だ」

これは、本当にどうしようもないやつかもしれない。

「それってまさか、嫌われてるのはつまらないやつだからで、相談しようと思われないのは性格が悪いから？」

「残念ながら、その答えが妥当なところなのだろう」

パンピングが唸る。そして答えに辿り着いてしまう。

「つまり私は、つまらなくて性格が悪い奴がなんで嫌われてるんだらうっていう正解の見えてる問題で悩んだのかい？」

「そういうことになるな」

「……寝るわ。おやすみ」

「無駄な時間を過ごした。おやすみ」

今度こそ私は一人になった。だからこそ考えなければならぬ事もある。

デス子を抜け、電脳空間を飛び出し眷属の家を出て夜の散歩をしながら考える。

見た目こそ美少女だが、本当に面白い配信が出来ているのか？ ただ吸血鬼の権能を見せびらかして物珍しさだけで戦っていないか？

一度見れば満足する、動物園のパンダではないのか。考えなければならぬ。

他人の失敗から学ばねば。私は電脳吸血鬼。日々の糧を得ることを眷属に任せ、ただ配信だけを楽しむ大層なご身分だ。ならばこそ、気高く、美しく、それでいて面白い配信を皆に届けなければならぬ。

私が吸血鬼になった事で手に入れたのはあくまで吸血鬼の能力だ。決して配信者の才能ではない。

ただ使える手札が多いだけで、正しく手札を切らなければ配信者としてははずれの存在になってしまう。

可愛い、美しい、動いてる。そう言われるだけで満足する私ではないのだ。凡百の存在でいたくないという願いが私にはあつたはずだ。

ハングリーに攻める。使えるものはなんでも使え。しかし視聴者を不快にさせない範囲で。そんな絶妙なバランスを駆け抜けるんだ。

私は吸血鬼。人とは違うという点を活かし、最高のショーを見せよう。

それこそがブラツディ・メアリーにできる事なのだから。

母との接触と二人の男の話

深夜の散歩は、楽しい。

人間だった頃から趣味は深夜のコンビニ巡りだったが、今は夜に出歩くという行為そのものが気分を良くさせる。

偽物ではない、本物の夜が設定された吸血鬼としての本能を刺激する。

「きみきみ、こんな時間で一人でどうしたの。保護者の方はいないの？ お母さんとか、お父さんとかだよ」

こんな風に絡まれる事すら愛おしい。流星に行動を妨害されるのは困るので睡眠の魔眼で眠ってもらおうが。

などとやっていたら、脳内スマホに連絡が入った。これは意外な人物だ。私の母親、アバターモエクス第一期生の松葉チユリからである。

頭の中でデス子を起動して適当なビルの上に飛び乗り、通話を始める。

「やあ、お母様。良い夜だね。私に何か用かな？」

「あなたね。何のつもり？ 気付いたら私が化物の製作者なんて呼ばれているんだけれど」

ふむ、化物とは私の事か。実の母親からそう言われると傷つくものがあるな。事実だが。

「何と言つてもね、事実を語つただけだが。お母様の無償の愛と詳細な設定による肉付けが私を産んだのさ」

「……端的に聞いわ。貴女が本当に吸血鬼だとして、私はまた同じような存在を生み出してしまふの?」

「それは無理だろう。これからまた作ろうと思つた作品には、また私のような存在を生み出すのではないかという雑念が入る。良くも悪くもね。だから、それが完璧な作品を作り出すうえで邪魔になる。電腦吸血鬼はこれまでもこれからも私一人さ」

期待も不安も、邪魔なのだ。電腦存在を作るためには純粋な心が必要になる。作品に對する思いが。そこに電腦存在を作るかも、作つてしまうかもしれないなんて思考はよぎるだけでもアウトなのだ。

「そう、それならいいけどね。私は純粋に絵を描きたいの。その過程で怪物を生み出すつもりはないのよ」

「なら、念のためV t u b e rの立ち絵のような、動かす前提のものはやめておくことだ」

「そうするわ。じゃあね」

本当に聞きたい事だけを聞きに来たという感じだ。そこに親子の情は感じ取れない。

「ああ、良い夜を。……最後に聞かせてくれ」

「何？」

「貴女は、お母様は私が嫌いかね？」

息を吐く音が一つ聞こえた。

「思ってるのとは違った。って感じかしらね。普通に中の人が入って人気になつたり苦労したり。そういうのを考えてたから……本物の吸血鬼が生まれて困惑してる。ついでに言う私の名前出して迷惑かけてきたから嫌い寄りって感じよ」

「これは手厳しい。これからイメージを挽回できるように気を付けよう。母親に嫌われたままとするのは悲しいからね」

「……もう切るから」

その一言を残して通話は途切れた。自分もデス子から退室し、脳内スマホから意識を外す。

ふと空を見上げれば、ビル一棟分だけ月が近くに来ていた。なんとなく月に手を伸ばしてみる。

帰りは霧化して帰った。なんとなく精神が揺らいでいて、人間に絡まれたらいつも通り対処する自信が無かったからだ。

なんでもない風を装ったが、嫌われるというのは辛いな。

【サイバ・ワーウルフの話】

こんなはずじゃなかった。俺が配信することで反発がある事は分かっていた。それでも少ない理解者と同期に恵まれて、細々とではあるが楽しくやっていけると思っていた。けど現実はずう。

まずコメントが読めない。これは俺の配信能力とは別の問題で、いつコメント欄を見ても荒れていて拾えるコメントが無いのだ。そうすれば当然見なかったことにするか無いわけで……沈黙が生まれる。そうすればそれを追求する荒れたコメントが流れてくる。悪循環だ。とてもじゃないけど精神がやられる。

同期も酷い。なんでも俺を除いた三人でユニットを組んでしまったらしい。これではいかにも俺が邪魔者のような扱いだ。確かに俺のチャンネル登録者数は少ないが、こんな事をされる理由が無い。

ただ、唯一有難かった事がある。先輩が俺を見かねての事だろうがコラボしてくれるという。俺が入るまではアバターモエクス唯一の男Vだった、ダー・バーテン。彼が俺を助けるために力を貸してくれるらしい。有難い話だ。俺は世間で言われているような女が好きだからアバターモエクスに入った男ってわけじゃない。V t u b e r と

して立ち絵が貰えて、配信が出来ればそれでよかった。たまたま募集してたからというのが強い。もちろん倉瀬アズキのゲームの腕前と視聴者との距離感の上手さに憧れてというのはあるが、そういう配信はどこでも出来る。……出来る、はずだった。

そもそも俺がここに入れた理由は未来を買われたかららしい。ゲームも下手の横好きでまだまだFPSみたいなゲームはお世辞にも上手いとは言いがたい。それでも、俺は第二の倉瀬アズキになるという理想を語ったのがウケたのだとマネージャーから聞いている。

だから、俺は視聴者の悪意に負けるつもりはない。ちゃんと配信を見てくれる人が、本当にほんの一握り存在する。そうじゃなきゃ最初の配信でハッシュタグを決める事は出来なかつただろう……。あの時も酷かった。

男は狼だから気をつけろだとか、その辺のコメントはまだいい。リスナー名なんて銀の弾丸にしようとするのが視聴者間で流行った。狼男を殺す武器だ。俺を滅そうとする超がつくほど攻撃的なコメントが当然のように、埋め尽くすように流れていく。それは俺が歓迎されていない証だ。

それでも俺は二回目の配信でBUGをプレイして、流れを変えるつもりだった。芋ったりはしない。配信映えを考えた突撃プレイ。男らしい、とかそんな印象を与えるための手段だった。

結果は惨敗。一キルも出来ない俺に下手くそ、辞めたらこのゲーム？ などというコメントが見てるだけのやつから送られてくる。

俺は見ている人を楽しませるだけの配信がしたかっただけなのに。それがまったく伝わらない。

なんでアバターモエクス入ったの？ と聞かれたから、倉瀬アズキさんに憧れて……と言ったらまた悪い意味で盛り上がった。調子に乗るな、という旨のコメントを大量に頂く事になった。彼らは夢を語る事さえ俺に許してくれない。

だが、俺は成長するコンテンツとして運営に望まれた。だから、まだこれからだ。ダー・バーテン先輩だって俺と一緒に戦ってくれる。悪意ある視聴者には負けない。配信だつて始めて二日目、徐々に俺の事を分かかって貰えばいい。

長い目で見てくれれば、俺は成長できる。同期の誰よりもだなんて思っていたら、同期の一人は電腦吸血鬼？ とかいう存在らしい。キャラが濃くてなによりだ。だが、それは卑怯じゃあないだろうか？

V t u b e r は人間が中にいる事を前提として、人間が動かすコンテンツとして出来ている。そこに、訳の分からない怪物が我が物顔で参入してくることはルール違反じゃないだろうか。

それでも彼女は受け入れられているらしい。それはきつと、見た目が美少女だから。

幼女と言ってもいい。

人間の俺が受け入れられなくて、化物の女が受け入れられる。おかしな話だ。世の中狂っている。

だが、それも少しの間だけの辛抱だ。この業界、一発ネタだけでいつまでもやっていける業界じゃない。すぐに飽きられるだろう。

だから俺は、特に狼男らしいなりきりはしなかった。そういう、無理な設定は放り投げてやった。そうじゃないとどうせコメントで狼男関係の事でまた何か言われる。設定がこの前言っていたのと違う、だとかだ。俺が狼男のVであるという事は徐々に風化させる。

これは戦いなのだ。視聴者に、俺を認めさせるための。出来る限り相手の攻撃、炎上を避け、イメージを良くし、こちらの理想の配信を叩きこむ。そうしてノックアウトしてファンにさせる。

駄目で元々、イメージは現時点でマイナスだ。これ以上下がることもないはず。だから俺は絶対に辞めない。このままVを辞めたら、俺を叩いてきた奴の望み通りになってしまう。そんなのは許せない。

確実にファンを作っていく、無理はせず、成長していく。それが俺に出来る精一杯の戦い方だ。派手さはいらない。ただ、堅実に。

先輩もたしか、そうやって戦ってきた。俺もそれを真似て徐々に歩みを進めていこう。俺を切り捨てた同期にだって必ず追いつく。いや、追い越す。

【ダー・バーテンの話】

「……だからね、アタシとしてはリスナーのみんなが争うのも辛いけど、何よりサイバちゃんを救えないのが辛い」

そんな内情を吐露するのはダー・バーテンだ。

「そうは言うでござるがなあ……結局、配信内容がつまらなかつた事が原因での炎上じゃ、救いようがないでござるよ。配信のノウハウを一個一個教えてやるでござるか？」

溜息を漏らすのは三期生、刃ココロ。忍者系Vtuberの少女。

「そうねえ、それもいいかもしれないわ。サイバちゃんが良ければ男同士でコラボして支えてあげたいわ」

「コラボしてる間、自枠はどうするんです？　まさか、後輩の為に自分の放送を放置するとか？　それはダーさんのファンに申し訳が立たないのでは？　ダーさんが好きで、その……サイバさんが苦手な方はそれを知ったら怒り狂いますよ。炎上がさらにひどくなります」

三期生の紅白ミイコがそう指摘する。

「それはしないけど……ちゃんと、コラボも自砕もするわよ。ちよつと大変かもだけど、やってやれない事はないわ」

「炎上してる配信は体力を使うの、私は知ってますからねえ。オススメはできませんよ。単純計算で炎上配信が二倍。バーテンの体力が持ちませんなあ」

同じく三期生、錬金術師Vの霧野アルケがダー・バーテンに苦言を呈し、心配している。

「それでもアタシは仲間を、同じ男Vを救いたいの」

「飛び火で炎上しているあなたに、それができるとでも?」

「アタシにしかできない。アバターモエクスで男が活躍できる土壌を作れるのはアタシとサイバちゃんだけ」

最初に折れたのは侍巫女のミイコだった。

「考え方が尊いのは認めます。挑戦して駄目だった者を救い上げるのは人として正しい行いですから」

「そうよね、アタシ、間違つてないわよね」

「ただ、溺れる者を助けようとして自分も溺死なんてことになるリスクについては考えているか?」

ココロの追求に、しかしダーは領きで返す。

「もちろんよ。これは男Vの誇りをかけた戦い。視聴者との戦いよ」

「カップリング的には美味しいけど……リスナーと戦うなんて言ってる時点で駄目だ
と思うね」

水を差したアルケの発言に、一瞬時間が止まる。

「結局さ、我を通すために視聴者に納得してもらわなきゃならないのに、戦おうなんて喧嘩腰な時点で泥沼だよ。そんなんで本当に望む結果が得られるの？」

「それは……そうだけど」

「デビュー時点のバーテンはどうだった？ 男一人でバツシングを受けて、それを受けて入れて細々とやって、今のバーテンがある。そりゃオネエで、女に興味ないってスタンズだったのもあるけど、そこにはバーテンとリスナーの間に、一種の相手を受け入れる気持ちがあつたでしょ。」

今のバーテンは何？ サイバと一緒にリスナーと戦うって？ 後輩にいいとこ見せようとして調子に乗ってない？ そういうの、リスナーも馬鹿じゃないから気付くよ」

長文疲れた。滑舌悪いからとちってたら恥ずかしいな。などと言いながらアルケは言葉の矛を収める。

「そうよね……うん。サイバとのコラボはアタシの名前でちよつと人集めて、まだコメ

ントを読むのに慣れてないサイバの代わりにコメントを読んで話題を振る。サポートに徹するわ」

「甲斐甲斐しいねえ。まったくサイバくんは幸せ者だよ。こんな先輩がいるなんてね。今日の話だけでサイバ×バーテンのカップリング妄想が捗りますわ。ぐふふ」

アルケの錬金術とは、つまるところカップリング妄想だった。直近の放送ではテレビ×テレビチューナー付きパソコンの話題だ。

それはデビュー当時から変わらないアルケのスタイル。無機物も生ものも、稀に炎上しながらカップリングを続けてきた。三期生はそんな彼女を受け入れ……しかし、ダー・バーテンとの距離感は掴めていなかった。

今の五期生と変わらない。初の男Vと近づきすぎて仲が良いともなれば処女性を重んじる視聴者に嫌がられる。そして、その層は無視できないだけの勢力を持っていた。

当然と言えば当然だ。V tuberは二次元のアイドル。ともすれば、清らかな人間関係を求められるのは当たり前と言える。そこに、男の入る隙間は無かった。

特にアバターモエクス三期生は、当然一期生や二期生の次に入ってきた。そしてその一期生や二期生というのは、倉瀬アズキを中心とした女同士のいちやいちやが人気コンテンツだった。

ならば、それを三期生にも求められるのは道理。なぜか入ってきたダー・バーテンと

いう異物を、彼女達三期生は持て余していた。

そして、ダー・バーテン自身もそのことは分かかっていて、同じ三期生と近づくことは無く、裏で距離を取ることを宣言。雑談配信で視聴者の距離を徐々に徐々に近づけていったのだ。

そんな地固めがあつたからこそ、他の三期生達も今や普通にダー・バーテンの話を配信で出来る。裏でもバーテンが困つていれば夜中まで起きて相談に乗るほどの仲になつたのだ。

ともすれば、五期生も同じようにサイバ・ワーウルフは時間と共に受け入れられるのだろうか。結局、ダー・バーテンの干渉は吉と出るか凶と出るか。今この時点では、たとえ吸血鬼であろうとも分からない。

掲示板1

【GW特別コラボ】アバターモエクススレ part 52 【一期生から四期生まで】

213：名無しのVリスナー 2020/5/6 (水) 22：41：50 ID：???

このゴールデンウィークはマジでよかった

214：名無しのVリスナー 2020/5/6 (水) 22：41：52 ID：???

最終日だけとはいえネココちゃんが参加できたの安心した

215：名無しのVリスナー 2020/5/6 (水) 22：41：53 ID：???

ほんとそれ

生存確認できたのよかったわ

217：名無しのVリスナー 2020/5/6 (水) 22：41：55 ID：???

本業はなにやってんだってくらい忙しいからな

220：名無しのVリスナー 2020/5/6 (水) 22：44：02 ID：???

お前らどの企画が一番楽しかった？俺はレナちゃんとウサミちゃんの歌とダンス

のコラボレーション

224：名無しのVリスナー 2020/5/6 (水) 22：46：43 ID：???

霧野アルケの錬金術講座くアバターモエクスガチカップリング妄想く

本人達の前であんな妄想するか普通

2 2 7 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 5 / 6 (水) 2 2 : 4 7 : 0 1 I D : ???

一期生から四期生全員集めてやるのがそれっていうのが無駄遣い過ぎて笑ったわ

2 2 9 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 5 / 6 (水) 2 2 : 4 8 : 2 3 I D : ???

でもダー・バーテンは組み合わせてもらえなかったね

使えない素材扱い

2 3 2 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 5 / 6 (水) 2 2 : 4 9 : 4 4 I D : ???

そりゃあ……男だから

2 3 3 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 5 / 6 (水) 2 2 : 5 0 : 2 0 I D : ???

流石のダー・バーテンでも他のメンバーと付き合うのは妄想でも駄目でしょ

2 3 6 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 5 / 6 (水) 2 2 : 5 1 : 5 7 I D : ???

本当に割を喰ったのはダーさん抜いたから人数奇数になって、二人で一人扱いされた

灰音クライネ、ナハトム姉妹だが

2 3 8 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 5 / 6 (水) 2 2 : 5 3 : 0 0 I D : ???

でも俺だつて双子姉妹と一緒に頂きたいぞ俺

2 3 9 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 5 / 6 (水) 2 2 : 5 3 : 2 1 I D : ???

w a k a r u

240 : 名無しのVリスナー 2020 / 5 / 6 (水) 22 : 53 : 25
 ID : ???
 それな

245 : 名無しのVリスナー 2020 / 5 / 6 (水) 22 : 55 : 48
 ID : ???
 妄想の中のアズキちゃん様、あれ八割がたチャラ男だろう！

248 : 名無しのVリスナー 2020 / 5 / 6 (水) 22 : 56 : 12
 ID : ???
 彼女は一期生と二期生には何やっても許されるところあるから……

251 : 名無しのVリスナー 2020 / 5 / 6 (水) 22 : 57 : 39
 ID : ???
 後ろから胸揉んで挨拶とかエロ衣装強要したりとか妄想とはいえ酷い

253 : 名無しのVリスナー 2020 / 5 / 6 (水) 22 : 58 : 44
 ID : ???
 レナちゃんに「実際そういう事してきたでしょ」って突っ込まれてて股間に悪い

254 : 名無しのVリスナー 2020 / 5 / 6 (水) 22 : 59 : 57
 ID : ???
 >>253

>>253
 アバターモエクスは『ガチ』

255 : 名無しのVリスナー 2020 / 5 / 6 (水) 23 : 00 : 10
 ID : ???
 お？

257 : 名無しのVリスナー 2020 / 5 / 6 (水) 23 : 01 : 12
 ID : ???

五期生募集きちゃ!

259 : 名無しのVリスナー 2020 / 5 / 6 (水)

23 : 02 : 40

ID : ???

新人だー! 囲め囲め!

262 : 名無しのVリスナー 2020 / 5 / 6 (水)

23 : 03 : 17

ID : ???

>>259

気が早いw

263 : 名無しのVリスナー 2020 / 5 / 6 (水)

23 : 04 : 31

ID : ???

よく見たら男も募集してるじゃん

265 : 名無しのVリスナー 2020 / 5 / 6 (水)

23 : 05 : 20

ID : ???

マジだ。 いらない

267 : 名無しのVリスナー 2020 / 5 / 6 (水)

23 : 05 : 54

ID : ???

男の娘かもしれない

270 : 名無しのVリスナー 2020 / 5 / 6 (水)

23 : 06 : 19

ID : ???

>>267

それ結局男

アバターモエクスにちんちん突つ込もうとする奴は見た目が女でも害悪

274 : 名無しのVリスナー 2020 / 5 / 6 (水)

23 : 07 : 11

ID : ???

>>270

でもそれがアズキちゃん様だったら？

277:名無しのVリスナー 2020/5/6 (水) 23:07:48 ID:???

>>274

許される！ 不思議！

【五期生誕生】アバターモエクススレpart73【でも男だけは勘弁な】
 110:名無しのVリスナー 2020/10/31 (土) 18:56:50 ID:???

ついに五期生のリレー配信かあ

男二人とかいたらどうしよう

112:名無しのVリスナー 2020/10/31 (土) 18:57:12 ID:???

>>110

ホモらせとけ

119:名無しのVリスナー 2020/10/31 (土) 18:58:50 ID:???

>>112

発想が錬金術師のそれ

1 2 4 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 0 / 3 1 (土)

1 8 : 5 9 : 4 7

I D :

???

始まるぞ

1 2 8 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 0 / 3 1 (土)

1 9 : 0 3 : 5 0

I D :

???

お化けか

1 3 1 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 0 / 3 1 (土)

1 9 : 0 4 : 0 6

I D :

???

萌え袖かあざといな嫌いじゃない

1 3 8 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 0 / 3 1 (土)

1 9 : 0 6 : 4 9

I D :

???

船沈めたがるのは悪霊だよう!

1 4 1 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 0 / 3 1 (土)

1 9 : 0 7 : 1 3

I D :

???

ゴースト・フネってそのまま船幽霊か! まんまと騙されたわ!

???
 144:名無しのVリスナー 2020/10/31 (土) 19:08:20
 ID:

プリントークが始まってしまった

???
 149:名無しのVリスナー 2020/10/31 (土) 19:10:01
 ID:

低糖質だから甘くないってわけじゃないんだな。むしろ上品な甘ささえあると

???
 155:名無しのVリスナー 2020/10/31 (土) 19:13:56
 ID:

いや幽霊はプリン食えんだろ……お供えしてもらおうのか？

???
 833:名無しのVリスナー 2020/10/31 (土) 19:57:28
 ID:

塩プリンが気になって挑戦した話は面白かった

???
 837:名無しのVリスナー 2020/10/31 (土) 19:58:47
 ID:

やっぱり塩は弱点なんだな……

840:名無しのVリスナー 2020/10/31 (土) 19:59:12
 ID:

???

この調子で可愛い子頼むぞ

867:名無しのVリスナー 2020/10/31(土) 20:07:12 ID:

???

はい男

870:名無しのVリスナー 2020/10/31(土) 20:07:18 ID:

???

はいクソ

878:名無しのVリスナー 2020/10/31(土) 20:08:00 ID:

???

ゲーム配信ですってよーコラボしやすいですもんねークソが

885:名無しのVリスナー 2020/10/31(土) 20:09:12 ID:

???

これがアバターモエクスとして幅効かすのか。つら……

888:名無しのVリスナー 2020/10/31(土) 20:09:34 ID:

???

もうこいつ一人で五期生推せないわ

893:名無しのVリスナー 2020/10/31(土) 20:10:11 ID:

???
 なんでこんなの採用するかね。他にいくらでもいただらうに

901:名無しのVリスナー 2020/10/31(土) 20:10:44 ID:

???

やっぱモエクスは二期生までだわ

913:名無しのVリスナー 2020/10/31(土) 20:11:27 ID:

???

アズキ、ユズリハ、コノエのゲーム上手い勢に入りたいてことかこいつ

厚かましい

922:名無しのVリスナー 2020/10/31(土) 20:12:23 ID:

???

>>913

最悪すぎる

最強のアズキちゃんとアズキちゃん推薦のユズリハ、アズキちゃんに憧れて入ってきたコノエでバランス取れてるんだよこんな男に滅茶苦茶にされたくない

925:名無しのVリスナー 2020/10/31(土) 20:13:00 ID:

???

アズキちゃんに憧れてるとか言い出した。憧れてるのはアズキちゃんのポジションにだろ

ハーレム希望かこのゴミクズ

938:名無しのVリスナー 2020/10/31(土) 20:07:12 ID:

???

控えめに言って死んでほしい

【五期生デビュー】アバターモエクススレPart74 【狼男なんていなかった】

723:名無しのVリスナー 2020/10/31(土) 20:58:48 ID:

???

ダダ滑りしてましたね

727:名無しのVリスナー 2020/10/31(土) 20:59:01 ID:

???

ゲームあるある語って俺ゲーム詳しいんですーってアピールかよ。うざすぎてやば

い

730:名無しのVリスナー 2020/10/31(土) 21:04:53 ID:

???

んん!?

7 3 5 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 0 / 3 1 (土) 2 1 : 0 5 : 2 1 I D :

???

カボチャだ……

7 3 8 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 0 / 3 1 (土) 2 1 : 0 5 : 4 8 I D :

???

ラバースーツでめっちゃボディライン出てる……

7 4 0 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 0 / 3 1 (土) 2 1 : 0 6 : 1 7 I D :

???

こいつあやべえ新人が出てきたぜ……

7 4 3 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 0 / 3 1 (土) 2 1 : 0 7 : 2 3 I D :

???

いや今日ハロウィンだからいいけどさあ! 出落ちじゃん! 今後一年その格好で

やってくるの!?

7 4 7 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 0 / 3 1 (土) 2 1 : 0 8 : 5 1 I D :

???

自分の事ミロのヴィーナスに例えてる。思い上がり過ぎて草

750:名無しのVリスナー 2020/10/31(土) 21:09:53 ID:

???

いやハロウィンテーマならさあ……魔女とかあるじゃん。狼男いらないんだけど

754:名無しのVリスナー 2020/10/31(土) 21:10:22 ID:

???

>>750

最後の一人が魔女かもしれないからな。狼男いらないのは同意だけど

759:名無しのVリスナー 2020/10/31(土) 21:12:00 ID:

???

暇な時間はカボチャ彫ってるって……暇杉内

988:名無しのVリスナー 2020/10/31(土) 21:58:53 ID:

???

かぼちゃ頭振りながらの変な歌は威力抜群でしたね……まだ頭に残ってるよ

かーぼちゃぼちゃぼちゃぼちゃぶつぶー

995:名無しのVリスナー 2020/10/31(土) 21:59:10 ID:

???

フリーダム杉田

さて最後の一人を迎える前に次スレだ

1000:名無しのVリスナー 2020/10/31(土) 21:59:54 I

D
???

1000なら最後の一人は可愛い女の子

【五期生見参】アバターモエクススレpart75 【女ならなんでもいい】

1:名無しのVリスナー 2020/10/31(土) 21:55:20 ID:???

企業配信者集団アバターモエクススのスレです

モエクスを楽しむための四つの心得

・アズキちゃん様のセクハラは絶対

・でも我々はアズキちゃん様ではないのでセクハラはほどほどに

・メンバーをかわいいと思ったときには素直にかわいいと言おう

・ダーさんは唯一の男だけど悪い人ではないので優しくしてあげよう

2:名無しのVリスナー 2020/10/31(土) 21:57:33 ID:???

>>1乙

ミス・パンプキンおもしろー女だわ

4 : 名無しのVリスナー 2020 / 10 / 31 (土) 21 : 58 : 08 ID : ???

乙

ハロウィンテーマなら最後の一人はあれだろうな

12 : 名無しのVリスナー 2020 / 10 / 31 (土) 22 : 04 : 20 ID :

???

背景は屋敷でBGMはおどろおどろしい

これは魔女か、それとも

15 : 名無しのVリスナー 2020 / 10 / 31 (土) 22 : 04 : 59 ID :

???

吸血鬼キタ——(。▽。)——!!

17 : 名無しのVリスナー 2020 / 10 / 31 (土) 22 : 05 : 31 ID :

???

メアリーちゃんか、いいじゃない

なまいきようじよって感じ

19 : 名無しのVリスナー 2020 / 10 / 31 (土) 22 : 06 : 13 ID :

???

声が二重に演技してるっていうのか？

ロリ声出した上で、雰囲気出す為に背伸びして低い声出してるロリって感じ出てる
すげえ

24 : 名無しのVリスナー 2020 / 10 / 31 (土) 22 : 08 : 48 ID :

吸血鬼初心者www

メタ的にはそうだろうけどさあw

27 : 名無しのVリスナー 2020 / 10 / 31 (土) 22 : 09 : 12 ID :

まあ、そう言っておけばボロはなかなか出ないわな

頭いいというか姑息というか

30 : 名無しのVリスナー 2020 / 10 / 31 (土) 22 : 11 : 47 ID :

んん？ 血液の代用品になりそうなもの考えろって？

いやそれはいいけどできなきや襲うって予告するのはいいのこれ

32 : 名無しのVリスナー 2020 / 10 / 31 (土) 22 : 12 : 10 ID :

そりやあ新しく生まれた吸血鬼だからなあ

血液の代わりも無ければ人は襲われるわ

35 : 名無しのVリスナー 2020 / 10 / 31 (土) 22 : 13 : 40 ID :

???

設定がしつかりしてるっていうか、しつかり煮詰めてきてるな

47 : 名無しのVリスナー 2020 / 10 / 31 (土) 22 : 17 : 17 ID :

???

魅了してみろよって煽りにしれっと乗ってきたな

50 : 名無しのVリスナー 2020 / 10 / 31 (土) 22 : 18 : 36 ID :

???

本当は成人してるから酒買えるんだろいな

この声出せて成人か。二十代前半か本当ハタチぎりぎりか

55 : 名無しのVリスナー 2020 / 10 / 31 (土) 22 : 22 : 20 ID :

???

お、なんかやってくれるみたいだぞ

61 : 名無しのVリスナー 2020 / 10 / 31 (土) 22 : 24 : 58 ID :

???

壊れたマウスを使って何するつもりだ？

64 : 名無しのVリスナー 2020 / 10 / 31 (土) 22 : 25 : 39 ID :

???

え。なに壊してるのこれ

67 : 名無しのVリスナー 2020 / 10 / 31 (土) 22 : 26 : 41 ID :

???

こわいこわい

71 : 名無しのVリスナー 2020 / 10 / 31 (土) 22 : 28 : 44 ID :

???

さつき言ってたマウス壊してるってか？

どんな握力だよ

73 : 名無しのVリスナー 2020 / 10 / 31 (土) 22 : 29 : 10 ID :

???

や、安物だったんでしょ……

75 : 名無しのVリスナー 2020 / 10 / 31 (土) 22 : 30 : 37 ID :

???

よくそれっぽい効果音持ってきたもんだな。リアルだわ

77 : 名無しのVリスナー 2020 / 10 / 31 (土) 22 : 31 : 55
ID :

き、鍛えてますね

79 : 名無しのVリスナー 2020 / 10 / 31 (土) 22 : 32 : 23
ID :

>>75

それな。マウス握力だけで握り潰すとか男でも無理でしょ

80 : 名無しのVリスナー 2020 / 10 / 31 (土) 22 : 33 : 20
ID :

ゴ、ゴ、ゴリラ。ゴーリラ♪

82 : 名無しのVリスナー 2020 / 10 / 31 (土) 22 : 34 : 07
ID :

>>80

大人の求人募集やめいw

84 : 名無しのVリスナー 2020 / 10 / 31 (土) 22 : 36 : 18
ID :

お、ハッシュタグ決めるか

??? 88 : 名無しのVリスナー 2020 / 10 / 31 (土) 22 : 37 : 30 ID :

あーあー、さっきの流れで決めようとするからゴリラ扱いのネタタグ多いぞこれ
構成は素人だな

??? 102 : 名無しのVリスナー 2020 / 10 / 31 (土) 22 : 44 : 56 ID :

十年続けても新米って事は十年Vtube続ける気あるって事かなやつたー

??? 106 : 名無しのVリスナー 2020 / 10 / 31 (土) 22 : 45 : 52 ID :

センシティブタグ!? いいのか!?

??? 109 : 名無しのVリスナー 2020 / 10 / 31 (土) 22 : 46 : 29 ID :

やっぱ成人だったのか……

??? 112 : 名無しのVリスナー 2020 / 10 / 31 (土) 22 : 47 : 06 ID :

家で吸血鬼に噛まれるってどうしようもないじゃん……

戸締りとかしてたでしょ……

1 2 7 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 0 / 3 1 (土) 2 2 : 5 2 : 0 1 ID :

お、なんか吸血鬼らしいことしてくれるらしい

1 2 9 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 0 / 3 1 (土) 2 2 : 5 3 : 5 6 ID :

つっても見えないんだから成功しましたーで何言ってもいいんだけどな

1 3 4 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 0 / 3 1 2 2 : 5 5 : 4 0 ID : ???
立ち絵が霧のように徐々に消えてく!?

1 3 7 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 0 / 3 1 (土) 2 2 : 5 7 : 0 0 ID :

ゴリラSEだけじゃなくまだ演出仕込んでたかこの女あ!?

1 4 0 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 0 / 3 1 (土) 2 2 : 5 8 : 2 3 ID :

お、戻った

1 4 2 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 0 / 3 1 (土) 2 2 : 5 8 : 4 6 ID :

あれ? なんか表情が違う? 自然というか

???
1 4 5 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 0 / 3 1 (土) 2 2 : 5 9 : 4 6 I D :

こつちに腕伸ばしてきた!? この立ち絵2Dだろ!? このためにアニメーションさせたのか!?

???
1 5 1 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 0 / 3 1 (土) 2 3 : 0 1 : 0 3 I D :

すごかったわ

???
1 5 7 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 0 / 3 1 (土) 2 3 : 0 2 : 4 4 I D :

かわいいフネ、面白いパンプキン、技術力のメアリー。五期生は有望だな

???
1 5 9 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 0 / 3 1 (土) 2 3 : 0 3 : 0 3 I D :

>>>157

一人足りなくない?

???
1 6 2 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 0 / 3 1 (土) 2 3 : 0 3 : 3 3 I D :

>>>159

別に？

1 6 3 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 0 / 3 1 (土) 2 3 : 0 4 : 0 1 ID :

???

>>>159

それ以上そこに触れるならお前のIDが出る事になる

1 6 7 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 0 / 3 1 (土) 2 3 : 0 5 : 2 0 ID :

???

ひえっ、なんでもないです五期生の三人はサイコーです

3 2 2 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 1 (日) 0 0 : 0 1 : 0 3 ID :

???

速報・メアリーちゃん魅了に成功する

3 2 3 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 1 (日) 0 0 : 0 1 : 5 2 ID :

???

>>>322

ん？

3 2 4 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 1 (日) 0 0 : 0 2 : 3 1 ID :

???

もう次回配信のネタ仕込み終わったって？

325:名無しのVリスナー 2020/11/01(日) 00:03:20 ID:

???

まあ魅了はね。言ったもん勝ちだから

画面の前の俺達までは届かないけど直接会った相手になら出来るんですって言えばいいだけだし

327:名無しのVリスナー 2020/11/01(日) 00:07:06 ID:

???

ゴースト・フネ 登録者数2812

ミス・パンプキン 登録者数3563

ブラッディ・メアリー 登録者数3451

関係ない狼男 登録者数514

妥当かな

330:名無しのVリスナー 2020/11/01(日) 00:09:42 ID:

???

>>327

むしろ狼男に足引っ張られてるまである

全員それだけのスペックは持ってた

334:名無しのVリスナー 2020/11/01(日) 00:12:03 ID:

???

>>327

むしろ箱推しはさあ……:脳死で登録するのやめて欲しい

狼男500も登録されてんじゃん

337:名無しのVリスナー 2020/11/01(日) 00:13:11 ID:

???

というかさ……サイバとかいうのが出てきたのはダー・バーテンを受け入れた俺たち

の責任じゃね?

338:名無しのVリスナー 2020/11/01(日) 00:13:57 ID:

???

>>337

と、言うと?

340:名無しのVリスナー 2020/11/01(日) 00:14:39 ID:

???

>>>338

つまり、俺達がダー・バーテンいいよねってしちゃったから運営は勘違いして二人目の男を入れるって判断になっちゃったってこと

344:名無しのVリスナー 2020/11/01(日) 00:15:59 ID:

???

俺達はダーさんの時点できちんと男は受け入れられませんと意思表示すべきだったって事か

347:名無しのVリスナー 2020/11/01(日) 00:16:45 ID:

???

つつても当時はダーさんだってボコボコだったのを徐々に受け入れてきたんじゃないん

350:名無しのVリスナー 2020/11/01(日) 00:17:23 ID:

???

>>>347

じゃあサイバも受け入れましょうってか! そうはなんねえよなあ!

352:名無しのVリスナー 2020/11/01(日) 00:18:07 ID:

???

そんなことは言ってねえよde1

355：名無しのVリスナー 2020/11/01（日） 00：19：51 ID：
 ???

とりあえずメインコンテンツツラしいゲーム配信は見てやろうや
 それがダメだったら叩く。それだけだ

【五期生デビュー】アバターモエクススレ part 76 【基本めでたい】

722：名無しのVリスナー 2020/11/01（日） 20：00：11 ID：
 ???

ゴミだったわ

723：名無しのVリスナー 2020/11/01（日） 20：00：50 ID：
 ???

あれでアズキちゃん様に憧れてるとかよう言えたわ

725：名無しのVリスナー 2020/11/01（日） 20：01：22 ID：
 ???

へたくそが画面に向かってぼそぼそ喋ってるだけ

配信辞めたら？

727：名無しのVリスナー 2020/11/01（日） 20：02：11 ID：

???

>>>725

むしろ喋ってた？ 無言のが印象強いんだけど

730:名無しのVリスナー 2020/11/01 (日)

20:03:01

ID:

???

やっぱりアバターモエクスに男はいらなかった

俺達は男にNOを突き付けるべきなんだ

731:名無しのVリスナー 2020/11/01 (日)

20:03:33

ID:

s i b z k i

いやまだ早いでしょ

ゲーム配信初回だよ？

732:名無しのVリスナー 2020/11/01 (日)

20:03:50

ID:

???

IDでてますよ

733:名無しのVリスナー 2020/11/01 (日)

20:04:20

ID:

???

ほっとけ

そいつサイバの配信中にずっとサイバの擁護してたやつ

735:名無しのVリスナー 2020/11/01(日) 20:05:01 ID:

???

あーはいはい女さんね

アバターモエクスに男入ると本当に女視聴者釣れるんだな

そりゃ運営も男入れたくなるわ

737:名無しのVリスナー 2020/11/01(日) 20:06:08 ID:

???

それよりダーさん……いや、ダーの奴のところにお前はいらなんだってしつかり意

思表示しにどうぞ配信時間だろ

740:名無しのVリスナー 2020/11/01(日) 20:08:20 ID:

s i b z k i

やめてよ

サイバくんは何も悪くない

そんないじめみたいなことして何になるの？

742:名無しのVリスナー 2020/11/01(日) 20:09:01 ID:

???

サイバの話なんかしてねえんだよなあ

745:名無しのVリスナー 2020/11/01(日) 20:i0:i8 ID:

???

ダーのやつはどうなってもいいからサイバだけはってかあ?

最悪だなサイバのチャンネル登録外しました

748:名無しのVリスナー 2020/11/01(日) 20:i1:i07 ID:

???

俺達は俺達の見たいものの為に戦ってるだけだからな

視界に入れたくないものは処理したいんだよ

750:名無しのVリスナー 2020/11/01(日) 20:i3:i23 ID:

???

凸られてバーテンも混乱……してねえな

懐かしいとか言ってる

752:名無しのVリスナー 2020/11/01(日) 20:i4:i02 ID:

???

これが当たり前の時代を生き抜いてきた猛者だからな

755:名無しのVリスナー 2020/11/01(日) 20:i6:i44 ID:

???

サイバが原因でこうなったって聞いたら静かに頷いてるわ

758：名無しのVリスナー 2020/11/01（日） 20：17：04 ID：

???

それでもアタシは彼が入ってくれて嬉しいってなんだよ

お前の良し悪しは聞いてねえよ

やっぱこいつ、『敵』だわ

【ダー消えろ】アバターモエクススレPart77【サイバ消えろ】

598：名無しのVリスナー 2020/11/01（日） 21：42：09 ID：

???

五期生からサイバを抜いた三人のユニット「トリオ・ザ・ハロウィン」!

600：名無しのVリスナー 2020/11/01（日） 21：43：11 ID：

???

五期生なんか動きあった? メイドツグちゃんの配信見てたわ

603：名無しのVリスナー 2020/11/01（日） 21：43：41 ID：

???

>>600

フネちゃんやんが五期生の女だけでユニット組みたいって言い始めた

そのユニット名の案がトリオ・ザ・ハロウイン

604:名無しのVリスナー 2020/11/01(日) 21:44:01 ID:

???

>>603

それなら推せるわ

608:名無しのVリスナー 2020/11/01(日) 21:46:08 ID:

???

とはいえまだフネちゃん発案なだけで他の二人に話を通ってるわけじゃないらしい

612:名無しのVリスナー 2020/11/01(日) 21:49:41 ID:

???

絶対やつてもらおう絶対だ

616:名無しのVリスナー 2020/11/01(日) 21:52:03 ID:

???

一日でも早い結成をお待ちしております

620:名無しのVリスナー 2020/11/01(日) 21:53:48 ID:

???

こういう案が出るっただけで分かるけどやっぱサイバって同期にも嫌われてるんだ

な

6 2 2 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 1 (日) 2 2 : 0 3 : 4 0 I D :

???

>>620

それが分かっただけでもメシウマ

6 2 7 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 1 (日) 2 1 : 5 8 : 2 8 I D :

???

2 2 時からさっそくミス・パンプキンの配信か

6 3 0 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 1 (日) 2 2 : 0 1 : 3 0 I D :

???

ん? なんだ?

6 3 3 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 1 (日) 2 2 : 0 2 : 1 5 I D :

???

ネタがねえって呻いてるw

6 3 6 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 1 (日) 2 2 : 0 3 : 4 0 I D :

???

本当に一発ネタ要因だったのかお前w

639:名無しのVリスナー 2020/11/01(日) 22:04:23 ID:

???

流石に冗談だろ……w

647:名無しのVリスナー 2020/11/01(日) 22:05:44 ID:

???

お。リスナーのいいネタありますぜって話に食いついた

650:名無しのVリスナー 2020/11/01(日) 22:06:17 ID:

???

そして流れるようにトリオ・ザ・ハロウィンについての話題を出していくう!

ナイスリスナー!

653:名無しのVリスナー 2020/11/01(日) 22:07:30 ID:

???

名誉リスナーだわ

657:名無しのVリスナー 2020/11/01(日) 22:09:58 ID:

???

オーケーでした！ あとメアリーちゃんだけ！

660：名無しのVリスナー 2020/11/01（日） 22：11：00 ID：

???

トリオ・ザ・ハロウインの夜明けは近い！

800：名無しのVリスナー 2020/11/01（日） 23：01：22 ID：

???

メアリーちゃんの配信だああああ

802：名無しのVリスナー 2020/11/01（日） 23：01：50 ID：

???

背景すごいな。奥行がしつかりしてるといふかりアリティあるというか

805：名無しのVリスナー 2020/11/01（日） 23：03：12 ID：

???

全身映ってる！ だけじゃなく座ってる！ なんだこの技術！ お前立ち絵じゃないか！

いんか!?

808：名無しのVリスナー 2020/11/01（日） 23：04：50 ID：

???

ワイン飲んだ！ アニメだこれ！

810:名無しのVリスナー 2020/11/01 (日) 23:05:09 ID:

???

ワインではないね

そもそも色違うし

811:名無しのVリスナー 2020/11/01 (日) 23:05:22 ID:

???

混ぜたものは案外普通だな

814:名無しのVリスナー 2020/11/01 (日) 23:06:31 ID:

???

>>811

普通

トマトとブドウとユカリスエツトは

混ぜない

817:名無しのVリスナー 2020/11/01 (日) 23:07:32 ID:

???

飲み物のレビュー始まった

851:名無しのVリスナー 2020/11/01(日) 23:16:54 ID:???

甘酒:論外

エナドリ:ちよつと元気になるけど炭酸がきつい

トマトジュース:色がいい。腹に溜まる

牛乳:意外と駄目

ブドウジュース:人間で言うところの水とか麦茶

ユカリスエツト:焼肉のタレとちよつとの肉汁くらいの満足感

ワイン:酔わないからブドウジュースと変わらん。渋みとかは吸血鬼の舌では気にな

らない

こんなところか

854:名無しのVリスナー 2020/11/01(日) 23:18:02 ID:???

>>851

まとめ乙

効果があったやつをエナドリ以外混ぜた感じね

???

876:名無しのVリスナー

2020/11/01 (日)

23:26:50 ID:

???

うおおおおお

875:名無しのVリスナー

2020/11/01 (日)

23:26:49 ID:

???

成長!?

870:名無しのVリスナー

2020/11/01 (日)

23:23:22 ID:

眷属!?

???

867:名無しのVリスナー

2020/11/01 (日)

23:22:11 ID:

お、やっぱ魅了はワイン購入のためか

???

860:名無しのVリスナー

2020/11/01 (日)

23:20:46 ID:

よう設定考えたもんだ

???

857:名無しのVリスナー

2020/11/01 (日)

23:19:22 ID:

おっばい！

878：名無しのVリスナー 2020 / 11 / 01 (日)

23：27：01

ID：

???

もうアニメが動いてる事に誰も突っ込まん……はー、すご

880：名無しのVリスナー 2020 / 11 / 01 (日)

23：28：20

ID：

???

あ、戻った

888：名無しのVリスナー 2020 / 11 / 01 (日)

23：32：50

ID：

???

家畜宣言頂きましたー！

892：名無しのVリスナー 2020 / 11 / 01 (日)

23：33：22

ID：

???

吸血鬼つてば尊大ー

900：名無しのVリスナー 2020 / 11 / 01 (日)

23：35：47

ID：

???

はいわたしはかちくです

905：名無しのVリスナー 2020 / 11 / 01 (日)

23：37：11

ID：

???

すんなりと家畜であることが受け入れられる

9 1 0 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 1 (日)

2 3 : 3 9 : 1 3

I D :

???

魅了された……? なんだよそれ

9 1 4 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 1 (日)

2 3 : 4 0 : 2 7

I D :

???

お前ら無事か!? 俺は駄目だった

9 1 7 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 1 (日)

2 3 : 4 0 : 4 4

I D :

???

ガチのやつだったわ危険すぎる

9 2 2 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 1 (日)

2 3 : 4 1 : 1 6

I D :

???

眼が赤く光ったと思ったたらもうだめだった支配された

9 2 4 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 1 (日)

2 3 : 4 1 : 2 0

I D :

???

なんか放送法に違反するようなことやってるだろ

俺は降りるぞ

9 2 7 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 1 (日) 2 3 : 4 2 : 1 3 I D :

???

吸血鬼なんだ……ブラッディ・メアリーは本物の吸血鬼なんだ!

9 3 0 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 1 (日) 2 3 : 4 3 : 2 2 I D :

???

メアリーお嬢様!

9 3 7 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 1 (日) 2 3 : 4 4 : 0 7 I D :

???

お嬢!

9 4 0 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 1 (日) 2 3 : 4 5 : 1 7 I D :

???

>>937

お嬢はなんか違うだろwww

9 4 2 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 1 (日) 2 3 : 4 6 : 5 5 I D :

???

>>940

吸血鬼は反社会的な存在だし……

948:名無しのVリスナー 2020/11/01(日) 23:47:43 ID:

???

>>942

じゃあお嬢だな

955:名無しのVリスナー 2020/11/01(日) 23:49:55 ID:

???

お嬢ってコメ流れたからかちよつと眉ひそめててワロタ

960:名無しのVリスナー 2020/11/01(日) 23:50:12 ID:

???

>>955

吸血鬼をいじっていいギリギリの範囲攻めるのやめろやお前らwww

【お嬢は】アバターモエクススレpart78 【本物の吸血鬼】

1:名無しのVリスナー 2020/11/01(日) 23:55:59 ID:???

企業配信者集団アバターモエクススのスレです

モエクスを楽しむための三つの心得

・アズキちゃん様のセクハラは絶対
 ・でも我々はアズキちゃん様ではないのでセクハラはほどほどに
 ・メンバーをかわいいと思ったときには素直にかわいいと言おう

3 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 01 (日) 23 : 56 : 01 ID : ???

>>>1乙

おー羽生やした

7 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 01 (日) 23 : 56 : 42 ID : ???

羽ちっちゃ

かわいい

10 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 01 (日) 23 : 57 : 59 ID :

???

お、トリオ・ザ・ハロウインの質問読まれた

13 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 01 (日) 23 : 58 : 17 ID :

???

お嬢もオツケーしたか!

17 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 01 (日) 23 : 59 : 55 ID :

???

トリオ・ザ・ハロウィン結成！めでたい！

21 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 02 (月) 00 : 02 : 03 ID :

???

お？ お嬢の謎に迫るのか

24 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 02 (月) 00 : 03 : 27 ID :

???

チユリちゃんは一時期忙しかったっぽかったから何かやってるとは思ったが

30 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 02 (月) 00 : 04 : 55 ID :

???

チユリちゃんの作ったキャラクターに自我が……？

37 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 02 (月) 00 : 06 : 00 ID :

???

自我を持ったキャラクターがリアルの人間を乗っ取ろうとした!?

48 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 02 (月) 00 : 10 : 24 ID :

???

電脳世界とか電脳空間ってなんだ……

??? 50 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 02 (月) 00 : 11 : 09 ID :

>>> 48

お嬢が存在した、パソコンの中とかスマホの中の世界……？

ゲーム機の中とかにも入れるのかね

??? 55 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 02 (月) 00 : 14 : 28 ID :

再現性は？ 再現性はどうか？

の
か？
チユリちゃんがまた吸血鬼ライバーを描いたりしたらまたヴァンパイアが生まれる

??? 58 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 02 (月) 00 : 15 : 03 ID :

>>> 55

吸血鬼だけと言わず、魔女やサキユバスも存在できるかもしれないな

??? 61 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 02 (月) 00 : 16 : 12 ID :

>>> 58

サキユバスと一体化……閃いた

マナージャーのお説教とスマプラ

眷属のスマホにマナージャーからの連絡が入った。

用件としては電脳吸血鬼 i s 何？　と言ったところだろうか。

『トリックオアトリートなの。トリオ・ザ・ハロウインのゴースト・フネなの』

などという同期の配信を聞きながら、私はマナージャーに対応していた。

「だからね。配信でも言った通りなんだよ。なんなら直接会って話してもいい。吸血鬼そのものになったんだ。松葉チユリの考えたキャラクター、ブラッディ・メアリーそのものに」

「松葉さんの名前出すのもやめてくださいよ！　今ネットでは怪物を産んだ女とか言われてるんですよ！　それにフネさんの配信も見えますけどなんですかトリオ・ザ・ハロウインって！　勝手にユニット組まないでください！　それになんでサイバくんを勝手に切り捨ててるんですか！　仲良くやってくださいよ！」

やかましい女だ。全部が全部、私のせいだと思ちなよ。

「いいですか！　なんなら謹慎させてもいいんですからね！」

くだらない脅し文句。やかましいだけじゃなくつまらん奴だな。

「何が謹慎に値するのかね？ 私の母が松葉チユリだという一部の人間はとつくに知っていた情報を公開したことかね？ それともユニットを組んだことかね？ 面白いな。全責任を私に被せるかね。それともデビューしたての五期生が三人とも連帯責任で謹慎させられるのか？ 君がそれだけの権限を持つているとは私でも知りえなかった事だよ」

「むむ……とにかく、大人しくしててくださいって事です！」

「君は本当に愚かだ。私がどれだけ大人しくしているか分かっていない。何のためにアザールブラッドで吸血を我慢していると思っている。なんなら五月蠅いマネージャーの身体から血を一滴残さず搾り取り、静かにしてやっても私としては構わんのだよ」

脅しとはこうするものだ。マネージャーは無言になっている。結局、絞り出せた言葉はこれだ。

「……吸血鬼なんて、いるわけないじゃないですか」

まあ、こんな答えになるのも無理はない。結局、アーカイブで服従の魔眼は発動しなかったらしい。正確には、徐々に効果を失っていったようだ。

おかげで確認の遅れたアバターモエクスの運営は私の魔眼を見ていない。それでも明らかにおかしいであろうこの自由自在な動く立ち絵を見て何か変だとは思わないものかね。とはいえそれと吸血鬼の存在を認める事は別か。

そして、確認が遅れたというよりは正確にはバズったのでそっちの方が動きが早かったという方が正確かもしれない。

令和に誕生した吸血鬼。そんなタイトルで駆け巡った私の記事を見て、アーカイブはどんどん消費。魔眼の残り香もすぐに使い切られたというわけだ。

故に、服従の魔眼の効果を感じた者達は私を吸血鬼だと認めているが、魔眼の効果が無かった者や頭の固い者達は吸血鬼の存在を認めなかった。

そしてその論争こそが、私の存在を世に知らしめる事となった。大声で喚いていれば注目を浴びるのはネット上でも変わらない。

野次馬のような、吸血鬼を自分の眼で見定めたい者達がチャンネル登録してくれて、登録者数は一人を超えた。こういう時、ライバーは一人突破記念をやるべきなのだろうな。

「信じてくれとは言わんよ。やがて、信じざるを得なくなるだけだからね」

「そうやってからかって……前はもつとまともな人だったのに。キャラに引つ張られすぎてるっていうか……」

ぶつくさと言いながらマネージャーはスマホの通話を切った。テレビ電話なら魔眼の一つも使ってやったのだがね。

結果的に静かになったのでよしとする。楽しそうに配信をするフネを見てみると、ユ

ニットを組んだ甲斐があったというものだ。

『トリックオアトリック。トリオ・ザ・ハロウインのミス・パンプキンだよ』

そんなわけで、私達三人のリレー配信はもう今日から始まっている。実際にコラボするのは金曜の夜にしようと話し合っている。それまでは各自で好きなことをやる。となれば一万人記念もやってしまいたいのだが……そうすると一風変わったことをするのがいいだろう。私はササヤキに今回の配信内容の概要を書き始めた。

『今日は一万人記念でオフラインスマブラ。オンラインでやらない理由は見れば分かる』

スマブラとはスマッシュプラスの略で、ダメージを与えて敵を吹っ飛ばす大人気対戦アクションゲームだ。

今回私はこれで遊んでやろうと思っている。

パンプキンの雑談を楽しみながら配信準備を整え、22時。私の時間が始まる。

「トリックオアブラッド。トリオ・ザ・ハロウインのブラッディ・メアリーだ」

ちなみにこの挨拶も三人で考えた。とはいえ好きな物言ってるだけなので考えたと言っても秒で考えたようなものだ。

『お嬢おはようございますー！』

『こんヴァンパイア』

『こんヴァンパイア絶対に流行らすな』

「ご機嫌よう、家畜共。さて、今回私がスマプラでやろうと思っていることは、言っ
てしまえばチートだ」

その発言にリスナーがざわつく。

『それはよくない』

『荒れるよそれは』

『吸血鬼の炎上配信か』

「だからオフラインだ。オンラインでは頼まれても絶対にやらん。専用部屋でもだ。

そして慌てないでもらいたい。私にしかやれない事をやるだけだ。スターハンドを
使えるようにだとかそういうレベルのものではない」

スターハンドとは初代ラスボスの事だ。最近はやインフレでただのオリジナルの敵く
らいまで価値が下がっている。

『でもチートはなあ』

『そこまで言うなら内容聞くだけ聞く』

『お嬢にも考えがあるんだろう』

「とりあえずスウィッチの画面に切り替えるぞ」

真ん中に映るゲーム画面と、右下に私の立ち絵があり、ゲーム画面とは被らないよう

に配置されている。

乱闘モードで対戦相手をスタービィ一体にして自分のキャラクターは選ばない。

「さて、話したことがあるかもしれないな。私は電腦吸血鬼。スマホやパソコンの中に入り込むことができる。そこを電腦空間と言い、電腦世界という広い場所に繋がっているのだが……それはまあ、今は関係ない。今大切なのはゲームの中に入る事ができるという事だ」

『そんな夢のようなことが』

『まさか』

『やりたい事わかったわ』

察しのいい家畜もいるようだ。私は僅かに笑みを浮かべた。

「そう、今から私はスウィッチの中に入り、このスタービィと戦って見せようじゃないか」

『マジでか!』

『そりやすげえや』

『吸血鬼感はないけどすげえ』

吸血鬼の戦いを見せるのだから、この上なく吸血鬼らしいと思うのだが……そうでもないらしい。いや、見れば分かるか。

意識を集中させ、ゲームの中に侵入する。1Pのキャラクター選択画面に私が存在している。ルールはアイテム無し、エンドラインと呼ばれる直線状のステージ。

カウントダウンがゼロになり、今、戦いが始まる。

私は速攻でスタービィに近づき、殴りかかった。

『速い！』

しかし、スタービィは一頭身ボディのくせに私より腕が長いらしく、リーチで負けて一発を貰ってしまった。いや、私の腕が短いのか。

脳内スマホで自分の配信画面を見ると、ダメージが12%入っている。そしてある事に気が付いた。

『お嬢、専用ゲージ持つてる！』

『20%つてなってるな！』

『何のゲージだろうな？』

しかし考えても分からない。とりあえず近距離がダメなら遠距離だろう。私は影を操作すると、スタービィの傍まで伸ばしてから実体化させて、槍のように突き刺すがジャンプされてしまう。

『ゲージ減った！』

『必殺技使用で減るタイプか』

ゲージ19%。単純計算だとあと19回何かをすると使い切るのだろう。意識を切り替えて空中のスタービィを迎撃するために跳躍。突撃した。

「もっちり……」

直撃したスタービィは柔らかかった。その感触にうっとりとしたものだが、その隙を突かれて吸い込まれてしまった。

そして排出。スタービィは黒マントを身に付けていた。スタービィの能力コピーだ。

『スタービィの方ゲージ100%だぞ!』

『普通100%スタートなんじゃねえか!?!』

『なんでお嬢そんなに初期値低いんだよ!』

私に聞かれても困る。いや、むしろ私が知らなかったら誰が知ってるんだって話だ。実際知らんが。

そこからのスタービィの攻撃は凄まじかった。凝固した血液で槍を作り斧を作りの猛攻撃。伸ばしてきた影はこっちも影を伸ばして対処したが、同じ分だけゲージを消費するのでこっちが不利。

結局攻撃は全部躲したり防いだりしたが、スタービィの持っているゲージは80%以上だ。私のゲージ燃費いいな。

と、ここでスタービィがワイングラスで飲み物を飲み始める。この隙に私はスター

ビィに殴りかかり、22%のダメージを与えた。しかし……

『スタービィのゲージ回復してるぞ!』

『飲み物で回復か』

なるほど、つまり。

「あれは吸血ゲージか! 私はアナザーブラッドしか飲まないから20%しか溜まらないのか!」

『あー』

『やっぱ本物の血液飲まない吸血鬼は駄目だな』

『まあ飲まれても困るけど』

とはいえ、CPUの行動パターンは理解した。あとは攻撃をガンガン避けて、吸血ゲージを回復させようとしたところを殴る。

それを繰り返してスタービィのダメージが100%を超えた。

『やっぱ運動性能高い方がつええわ』

『お嬢めっちゃ回避上手い』

『一撃の威力も地味に重いよな』

『握力強かったもんね……』

そして最後の一撃は、最初に入れようとしたのと同じ攻撃……ただのダッシュ攻撃。

『それは駄目だってわかってる筈だぜお嬢！』

『無茶しやがって……』

に、見せかけた大人化。ゲージを10%消費し、リーチが伸びた事でスタービィの腕よりも長くなったこちらの攻撃で吹っ飛ばしてフィニッシュだ。

「と、まあこんな感じだ。苦戦したのはさすがスタービィと言ったところか」

『面白かった』

『俺もお嬢と戦ってみたい』

『でもこれアバターモエクスが許諾受けてるとはいえチートは大丈夫なん』

……ふむ。駄目かもしれんね。

スマブラ恩赦とビーベックスコラボ

当然、チートして良いと言われるわけもなく注意を受けたわけだが。

忍転道の方にマネージャーが連絡をしたところ、むしろ全キャラと一回戦ってみてくれと言われたらしい。それでキャラにしてくれていいよ、と。

まあ、疑わしい事だ。なんでそんな条件を付けるのかと。

理由は簡単に思いつく。吸血鬼である私の弱点探した。

お誂え向きにスマブラにはリヒトとサイモンというキャラがいる。こいつらはヴァンパイアハンターで聖水とか使うので、そういうのが効くのか試したいのだろう。

とはいえ、やらかしたのは事実だしハイスペックなゲームキャラとゲームという土台で戦うならともかく現実の人間が準備を整えたところで負けるわけもないので有難くその恩赦を受け取る事にした。

「トリックオアブラッド。トリオ・ザ・ハロウィンのブラッディ・メアリーだ。ご機嫌よう家畜共。結局昨日のスマブラは運営には怒られたわけだが」

『残念ながら当然』

『駄目だったかー』

『MODみたいなものって扱いにはならんか』

「忍転道さんの方からはむしろそれで一回全キャラと戦ってみてくれというお達しが入ったらしい。ということで今日もスマブラだ」

『さすが』

『ふとつばらだぜ』

『器が違うわ』

忍転道を称えるコメントで溢れている。そこにどんな裏があるかも知らずに……とはいえこれで本当に私の情報を集める目的が無いとしたら私はとんだ恩知らずのピエロだな。一応感謝しとくか。

「とりあえずヒゲオから倒していくぞ。金曜夜にトリオ・ザ・ハロウインのコラボ配信あるからそれまでに終わらせてやろうと思う」

視聴者数三千オーバー、この中に忍転道の社員が入っているのか。それとも忍転道にこの条件を付けさせた何者かが見ているのか。それとも何の敵意も無いのか……それは分からない。今やれる事は忍転道のオールスターと戦う事だけだ。スウィッチの中に入り、世界的に有名なヒゲと帽子の男に立ち向かう。

初撃はヒゲオの火球飛ばしからだった。私はそれを固形にした影を操作し、盾にして受ける。

殴りかかったところ、スタービィほどの発生フレイムを持たなかったらしくヒゲオに後の先を取られるようなことはなかった。続けてもう一撃と行こうとしたところでガードをされたので、掴んで地面に叩きつけてマウントを取って何回も殴りつけ、最後に蹴飛ばした。

それで場外に吹っ飛んでいき、復帰しようとしてきたところを血液を固体化した槍を投げつけて阻止したところ、画面外まで吹っ飛ばしてゲームセット。

まずは一勝。だが、対戦相手はまだ七十人以上いるのだ。勝利のアナザーブラッドを飲み、消費したゲージを回復させる。私の吸血ゲージはリアルに連動しているので、消費したまま次の戦いに行くとゲージも少ないままに戦わなければならなくなる。そして、戦闘中にアナザーブラッドを飲んでる暇はない。

続いているニテール戦は楽なものだった。兄弟だけあってヒゲオと大して変わらなかったし、自分自身をロケットのように飛ばしてくる攻撃を私の反射神経であっさり迎撃して殴ってやれば地面に埋まった。そこを血液斧で重い一撃を加えてやれば、簡単にダメージは蓄積して後は吹っ飛ばしてやるだけだ。

ドンク・ゴリラとは力比べだ。長いリーチの腕に対してこちらも私の細腕で拳をぶつけ合い、互いにダメージを与えあった。途中掴まれて持ち上げられ、地面に叩きつけられたりもしたが吸血鬼は頑丈だ。そのまま両足で蹴りつけ、軽く吹っ飛んだところを空

中でコンボを入れて画面外に送ってやった。

と、まあそんな感じで楽しく戦っていて分かったが、私は戦う事が好きらしい。血が騒ぐというか、負けるものかという反骨心のようなものをくすぐられる。

配信自体も好評だ。曰く、新鮮である、と。それはそうだ、新キャラ参戦みたいなものだし、動きだつて特定の行動しか取れないキャラクター達より自由度が高い。

あと画面右下の立ち絵も自由自在に動いている。殴ったり蹴ったりする激しいアクションが正面からカメラに映るような形のように。そのせいでゴリラに持ち上げられてる間はパンツ丸見えだったらしい。というか蹴りの時はチラリしてしまうのでそれ目当ての層も少なくないようだ。

そんな感じで一日二十戦以上戦う楽しい日々が続いて三日目となった十一月四日、水曜日についてヴァンパイアハンターと戦う時がやってきた。直前には鋭い尻尾の怪物リドルと戦ってウォームアップは万全。集中力も高まっている。

そんなわけで行われたリヒト戦。長い鞭による攻撃で私は遠距離攻撃を余儀なくされる。血液武器ブラッドウェポンや影を伸ばしてその中から固体となった影が飛び出す攻撃……リスナーのつけた名称、影鬼による攻撃をしてダメージこそ与えていたのだが、しよせんは吸血ゲージ最大が20%なだけあってすぐ消費しきってしまった。なにしろ、相手は遠距離への飛び道具も得意技なのだ。この状況で私は近接攻撃に移るしか

ない。

もしくはアナザーブラッドを飲むわけだが、とてもじゃないが戦闘中にできる行動ではない。少なくとも相手を吹っ飛ばしておかなければ。

仕方なく殴りに行ったその瞬間、瓶が投げつけられたのを見逃さなかった。私はそれを素手で受け取るが、痛みを感じて落としてしまう。

瓶が落ちると瓶の中身がぶちまけられ、聖水が燃え上がる。どんな仕組みなのかと言われても、それはそういう技だとしか言えない。確かなのは、私がこの攻撃を直撃してしまったと言う事だ。

そのダメージ量、60%。露骨な威力に私は顔をしかめた。

『ありえんほど食らった』

『やっぱ聖水は弱点なのか』

『吸血鬼だもんな』

聖水に拘束されている間、私はそんなコメントを眺めていた。弱点が明かされる事になったが構わない。肝心なのは、ここからどうやって勝つかだ。

などと考えていると、聖水の炎上拘束が終わると同時に鞭で殴られる。遠距離攻撃同士のやり合いで与えられたダメージを合わせればこれで蓄積ダメージ120%。吹っ飛ばされた私はこれ幸いと一つの手段を取る事にした。

「吹っ飛ばした時だけじゃなくて、吹っ飛ばされた時でもアナザーブラッドは飲める……！」

空中でアナザーブラッドを口に含み嚙下し、復帰阻止に投げてくる斧を霧化で躲しながら、私は地面を掴み、復帰阻止の為に崖際まで近寄ってきていたリヒトの裏に緊急回避で回り込んだ。鎌のブラッドウェポンを作り出し、リヒトの足に引っ掛けて転倒させる。そのまま大斧へと血液武器を変化させ、大ダメージ&吹き飛ばし。

このまま復帰力の低いリヒトを復帰阻止してとどめを刺してもいいのだが、こいつには聖水の借りがある。

私は崖際で力を溜めることにした。戻ってきたリヒトが先程私がしたように裏に回ったところで、影鬼を解放。全方位に広がった影から剣を発生させ、上に吹き飛ばして相手が星になってゲームセット。私の勝ちだ。

え？ 次サイモン戦？ もう一回似たようなのと戦う必要があるのか……しんどいぞ。

結局また辛勝してその日は終了した。宣言通りに木曜日にスマブラオリジナルキャラクターにカップ頭の格好をさせた最後の敵を倒してノルマ達成。ちなみにここまでステージはエンドライン。たくさんステージがあるにも関わらず、だ。理由はシンプル

で、背景が夜なのがここだからだ。バトルラインなんかもよく遊ばれるステージなのが昼の背景をしているので吸血鬼には辛い、と説明するとリスナーも納得した。

金曜日となり、トリオ・ザ・ハロウインのコラボが開始されようとしていた。

「トリックオアトリートなの。トリオ・ザ・ハロウインのゴースト・フネなのよ」

「トリックオアトリック。トリオ・ザ・ハロウインのミス・パンプキンだよ」

「トリックオアブラッド。トリオ・ザ・ハロウインのブラッディ・メアリーだ」

『初コラボ！ 待ってた！』

『五期生コラボいいぞー』

『ビーベックスやるんだっけ』

「さて、動画タイトルにもある通り、今回はビーベックスレジエンスやるよ。私はちよつとだけやったことあるけど二人はどうかかな？」

ミス・パンプキンの質問だが、これは元々裏で相談済みだ。リスナーに聞かせるという目的が正しい。

「フネもちよつとだけあるの。でも企画者としては情けないところ見せられないの。頑張るの」

「私は全然だ……起動確認した程度だな。ちなみに銃を撃つゲーム自体、世界防衛軍シリーズを触ったことがあるくらいか。敵が人間のものはほとんどやった事が無いと

言ってもいい」

『いいよね世界防衛軍。シンプルで』

『最近のキャラは言うほどシンプルでもないがな』

『バトルロイヤルものは全然勝手が違うぞ』

「まあ、そんなわけで今回は初心者三人。温かく見守って欲しいね。今回司会的なポジションだから面白い事言わなくてごめんね。この二人には任せにくくて」

「はーなの。パンプキンは何もわかってないの。フネが本気を出せば司会なんて楽勝なの。船を沈めるのと同じくらい楽勝なの」

「まったくだ。家畜の調教と同じくらい楽勝なのだがね」

「その凶暴性が不安を掻き立てるんだよなあ……」

『頑張れパンプキン』

『ネタ枠から不遇枠に』

さて、そろそろビーベックスレジェンズについて詳細な説明をしたい。三人一組のバトルロワイヤルゲームなのだが種族と職業が存在し、この二つを選ぶ事で特殊能力が決まる。そして、組んでいる三人は同じ種族職業は選ぶことが出来ない。つまり、一人が人間・戦士を選んだら他の二人は別の種族と職業を選ばなければならないのだ。

そうなる、野良でやる場合には不可能だが、今回のように一緒にやるプレイヤーと

事前に相談できるならしておくに越したことはない。

「私は吸血鬼をやるぞ、職業はこだわらない」

「フネは最初ゴーストやるけど、弱かったら切り替えるの。生前はもしかしたら別の種族だったかもしれないの。職業も強いのがいいの」

「私はさすがにジャックオーランタンなんてないからなあ。自由にやるよ」

吸血鬼は建物の中で強化される種族となる。そうなると相性のいい職業は……

「吸血鬼・狩人。これだね」

「畏知識と畏作成を持つてるからトラップの作成と解除が得意な職業だね。建物の中でひきこもるのは強いかもね」

「フネはとりあえず戦士からやってくの。ヘッドショットで受けるダメージを軽減してくれるから安定した防御力が期待できるから強いはずなの。ヘイトアツプも持つてるから相手はヘイトを溜めたフネしか見えなくなる時があるの」

このゲームはFPSには珍しくヘイトの概念がある。ヘイトが高いと同じグループに存在しているはずの他キャラクターが見えにくくなる。最大までヘイトを溜めれば一度攻撃に当たったり当てたりするまでは他の仲間は無視だ。

「じゃあ私は獣人・レンジャーで索敵と回復を担当しようか。応急処置が強い」

それぞれの役割が決まったところでマッチングを開始する。当然だが、私はゲーム侵

入を行っていない。オンラインのゲームでやろうとは思っていないからだ。オフラインでも注意を受けるのでやれるゲームはかなり限られてくると思う。

プレイするための人数、60人が揃ったところでゲーム開始だ。キャラクターセレクトを行った後に飛行船に乗せられ、ランダムに選ばれたジャンプリーダーに追従するようにして着地する。今回のリーダーはフネ。私の特性を活かすため、建物の近くに飛び降りてくれた。

しかし、後ろからは同じ建物を目指して降りてくるプレイヤーの存在を確認している。

「早く建物の中に入るの。こっちが位置的に有利なんだからさつきと銃を取るの」

素早いレンジャーであるパンプキンが扉を開けると、私達は一目散に中に入り込む。すると明らかに私のキャラクターの運動性能が上がっている。先程素早いと評していたレンジャー以上だ。

いかにもアイテムが入っているとやわんばかりの箱を開けると、そこにはアサルトライフルとハンドガンが一丁ずつ、そしてその弾丸が置かれていた。

「私はいいいから二人が装備しな。私はこの建物の他の武器探すからその間、後続の撃破よろしく」

「待ち構えるならメアリーが強い武器持つといいの。建物の中の吸血鬼は頑丈だし素早

いの」

というわけで私がアサルトライフルを持つ。経験値的にフネに持ってもらった方が迎撃できる気もしたが、華を持たせてもらったところだろうか。

建物内に遅れて入ってくる後続に向けて射撃を放つ。ヘッドショットには自信がなかったので身体を中心に狙う。

敵は三人。私がたどたどしく敵に向けて攻撃していると妙な動きで纏わりついてきながら殴りかかってくるプレイヤーが一人。

私の技術ではそいつを狙えるエイム能力が無い。リアル身体能力が問題ではなく、パソコンの操作となると勝手が違う。なにしろ私はPCゲーらしいPCゲーをやったことがあるのは難易度ピースのメインクラフトくらいのもなのだ。世界防衛軍はコントローラーでやっていたし、マウスを使つてのエイムは全然駄目だ。

「なんかやけに素早い動きのやつがいるのだが？ 負けるぞこれ」

素早いだけじゃない。緩急がついてて狙いづらい。耐久力の高さを生かして、ここは他の相手を狙うことにする。

フネの方に攻撃を仕掛けている二人のプレイヤーのうち、一人は倒した。だが、ハンドガンでは多勢に無勢。アイテムを落として復帰待ちの状態になってしまった。

復帰待ちとは復活アイテムを拾ってもらい、復帰地点で復活させてもらえるように

なるまで行動できない状態だ。これによってパーティが一人でも生きていけば逆転のチャンスがあるのだ。

「あー、駄目だったのごめんなの。メアリーのところの相手がしているその動きはスライディングなの。シフト+コントロールでこっちもやれるの」

なるほど、そんな技が……押し辛っ。どんな長い指が必要なんだこれ。こっちは幼女だぞ。

そんな事をやっている間に体力は1/4だ。そしてそのスライディングでフネのいた場所、つまり武器の落ちているところに移動している。

馬鹿め、武器を取ってる間に蜂の巣だ。

などと考えていたが、そんな隙は与えてくれなかった。そして、相手の手にはハンドガン。またスライディングでこちらを惑わしてからのヘッドショット一発。復帰待ちの状態になってしまった。

私を撃破した相手の名前を確認すると……倉瀬アズキ。

『アズキちゃん様か!』

『スナイプしてたのか!』

『てことは射手だな。銃攻撃が強くてそれ以外が弱くなる』

ゲームのとんでもなく強い一期生が交じっていたらしい。そんな偶然ある？

降臨・倉瀬アズキ

FPSめっちゃうまレズ少女。それが倉瀬アズキという一期生の評価らしい。

つまり私達は最初からラスボスに当たってしまったという事だ。スナイプしたのはいいとして、落下地点まで同じなんて偶然あつてたまるか。と、思っていたのだがどうやら倉瀬アズキの方でも配信していて、ジャンプリーダーがアズキで無かった事は確認されていたようだ。だがややこしい事に、このジャンプリーダーがアズキと私達目当てのリスナーの可能性があり、そいつはゴースティングの疑惑があるようだ。

リスナーである事も可能性でゴースティングの疑惑って結構無理がある気がしなくもないが、私達とアズキを鉢合わせさせたかった何者かって考えると違和感が無いのも事実だ。実際、倒したフネからハンドガンを取らずにアズキに譲るような動きを見せていたから。自分も素手なのにそんな動きをしないとこの事はアズキが強いのが分かっているのとやらないムーブだ。

ちなみにあの後、パンプキンも即座にやられた。私が倒されたって事はアサルトライフル持ってたからね。そりゃ鬼に金棒だ。

で、そこからの私達の二回目以降のプレイはと言うと。

「アイテムを取る時はきちんと頭を振るの。ヘッドショットを貰う可能性があるの」
「相手より高所を取ると、いいらしいよ。理由は知らないけどね……ん？　なるほど、ちよつと下がるだけで相手の銃撃から身を守るからか、なるほど。コメントありがとう」

アズキ戦に触発されたのかFPSの基礎を学んで次はいい勝負をしようと思巻いていた。フネは影響されたのかアズキと同じ射手を練習するようになっていて、直接やられたのは私なんだから熱くなるべきは私なんじやと思いつつも、今回のコラボの提案者だしと思いつながら熱中するフネに付き合っていた。

そして0時が過ぎて、コラボも終わろうとしていた。

「今日は楽しかったの。二人ともありがとうなの」

「いやいや、こつちこそ楽しかったよフネちゃん」

「ああ、いい夜を過ごせた」

『しよっぱなのトラブルにはまいったね』

『アズキちゃんとの実質コラボよかったよ』

『すぐやられたけどね』

まともに入るとコメントもすぐ最初の戦い話になってしまう。今回は完全に倉瀬アズキに食われたな。初回コラボなのに。

「次回もすぐやりたいの〜」

「明日……いや、もう今日か。とにかく空いてるよ。メアリーちゃんは？」

「基本夜は暇な存在だ、私は。リアルの事は眷属に任せっぱなしだしな」

早くハイパーチャット貰えるようになってアナザーブラッド代くらいは自分で稼ぎたいものだ。時期的にはそろそろだと思っただが……

「メアリーちゃんって、夜は配信以外何やってるの？ 吸血鬼の活動って知りたい。興味本位だから答えられないじゃないけど」

「散歩する程度か。よく迷子と間違われて警察に補導されそうになるから魔眼で眠らせたりして回避してるよ」

「それ大丈夫なの？ 本来見つかるはずだった犯罪が警察眠らせたせいで見つからなかったとか問題になるの」

フネの厳しい指摘だ。なるほど、考えたことも無かった。

「それならいつそ、夜は警察に代わってパトロールでもしてやるか。ふふ、吸血鬼は夜の味方だからな」

『夜歩いてればお嬢に会える……？』

『日本中歩き回って探す気か』

『いや、都内でしょ。前に言ってた覚えがある』

身バレも何もない姿だから構わないのだが、集団に発見されてオフ会みたいになるのはあんまりな。……そうだ。

「私を探すなら、ついでに家畜共もパトロールしたらどうだ？ 怪しい奴を捕まえろとは言わんが、ストーリーカーを追い払うくらいなら貴様らでもできるだろう」

面倒事押し付けければ私を探したがる奴も減るだろう。そう思っていたのだが。

『自警団……悪くないな』

『なんか名前決めようぜ』

『ナイトシーカーとか』

『それ怪しい側じゃね？』

なんでノリノリなんだこいつら。お、いい名前発見。

「ヴァンプ・ナイト。いいじゃないか。ベタだがナイトが夜と騎士をかけてるわけだな」

『お嬢が納得した名前出たって事は決定だな』

『我々はヴァンプ・ナイト！ お嬢の家畜である！』

『しまらねえwww』

つい口を出してしまった。これで自警団の活動も決定か……なんか面倒事が増えた気がする。

「私達も交えて欲しいなあ。別に私に会えるとかないけど、うちのリスナーも無理のな

い範囲で自警団しておくれよ。名前はパンプキン・ナイト！」

「フネも負けてられないのー。こつちも自警団結成なの。名前はゴースト・ナイトなのー」

事態がややこしくなっちゃった。この連中がむしろ怪しいからという理由で捕まらない事を願うばかりだ。

「さて、自警団やるって事が決まった所で今夜はお開きだよ。二人とも、終わりの挨拶だ。本日のお相手は」

「ゴースト・フネと」

「ブラッディ・メアリーと」

「ミス・パンプキンでした！」

そして三者三様の挨拶。

「またねなのー」

「また夜に会おう」

「ばいばい」

配信終了。お疲れ様とお互いを労い合い、穏やかな時間が流れる。

「アズキさんとマツチングできるとはねー。いやー強かった。こつちのスライディングに全部エイム合わせられて死んじゃった」

「あの人、普段は一人ならランクにしか潜らないの。フリーに入ってきたのはフネ達を狙ってきてたの」

「話題も持ってかれたな。一撃も与えられなかったのは技量の差を感じるよ」

などと話していると、パンプキンが慌てた様子でちよつと待っててと言って通話を切った。

「なにかあつたのかなの」

「今日はこのまま解散かね」

「でも待ってて言ってたの。きつと何かあるの」

それもそうか、と納得してフネとビーベックスの話で盛り上がる。するとパンプキンが戻ってきてこう言った。

「アズキさんが良ければ話をしないかって。一期生サーバーで待ってるからって」

「それはまた……緊張するの」

「とはいえ先輩も先輩。最上位からの呼び出しだ。答えないわけにもいくまい」

ちなみにチャンネル登録者数50万人超えている大物だ。一期生でもトップである。

我々はトリオ・ザ・ハロウィンサーバーの通話を一度切り、倉瀬アズキの待つサーバーへと出向いた。

「やあやあ、わざわざありがとうございます。トリオ・ザ・ハロウインのみんな。私が倉瀬アズキです。こうして話すのは初めてですね」

「ど、どうも。ミス・パンプキンです」

「フ、フネがフネなの」

「吸血鬼のメアリーだ」

敬語を使わない私にぎよつと息を呑む雰囲気を感じた。しかし、倉瀬アズキは気にした様子を見せなかった。

「私がゴースティングしたわけじゃなかったんだけど、一緒に組んだ人は私のリスナーだったんじゃないかって事で謝っておこうと思ひまして。すみません」

「いえ、お気遣いなく……」

「そこで、お詫びというわけじゃないんですけど、今度メインクラフトのアバターモエクス鯖紹介させてもらえればなと思ひまして。時間あります？」

別に嫌という訳じゃないが、断れないやつだなこれ。

「明日はコラボで集まるの。その後とかなら……なの」

「ああ、じゃあ配信で私とメインクラフトコラボ配信やりましょうか」

「えっ、アズキさんと一緒に?! いいんですか!」

「もちろんです。明日の何時からがいいですか?」

穏やかな口調が人々を安心させるのだろう。彼女の喋り方は、配信でなくても常に穏やかで、さざ波一つ立つことが無い。

「コラボの予定そのものをアズキさんとのコラボに変えるの！ こっちは19時以降から0時までなら大丈夫なの！」

「ああ、そうしよう！ 私もそのくらいの時間なら何時からでも大丈夫です！」

二人は浮足立っているが、私は冷静だ。いくら先輩でチャンネル登録者数が上だとしても、私は吸血鬼。人間の下につくつもりは無い。

「私も問題ないな。詳細は任せよう」

「わかりました。では21時開始にしますね。それでは皆さんもササヤキで緊急コラボの告知してもらえればと思います」

ああ、そうだ。メアリーさん。運営から許可は取りますので、ゲームの中に直接入ってもらえますか？」

「構わないが……なぜだ？」

「鯖の紹介終わったら対戦しましょうよ。私弓使いますから負けませんよ？」

まさかの決闘の申し込み。これは吸血鬼の誇りにかけて負けられない。ビーベックスのリベンジだ。

「いいだろう。人間と吸血鬼の差というものを見せてやるさ」

「よかった。楽しみにしてますね」

気迫を感じさせない声だ。本当に、ちよつと試してみただけと言った感覚。吸血鬼に挑むのだという畏れというものを覚えていない。舐められているのだろうか。

「その余裕、いつまで持つかな」

「そういうわけじゃないんですが……そうだ、これ言うと一期生や二期生のみんなに怒られちゃうと思うんですけど、私が勝ったらデートしてくれませんか。リアルで」

「は？ デート？」

「はい。ちよつとは身体を触っていいくらいの、女の子同士のデートです」

そういえば彼女はそういう趣味があるのだった。小学生の頃から、彼氏の出来た女の友人の気を引くため、気持ちいいことごとつことという身体の接触で心を繋ぎとめたという生粋のレズ。狙われたのだろう、私は美少女吸血鬼だからな。

「ちよつとはどのくらいだ？」

「少なくともキスはします」

断言した。こいつやばい。

「……私が勝つたら何をしてくれる？」

「血を吸ってくれていいですよ。アナザーブラッドだけじゃ物足りないんでしょう？」

そんな話も、雑談でした。という事は彼女、私の配信を見ているという事になる。ど

れだけの情報が流れていることやら。

「ビーベックスとは違うぞ。ゲームの中に入った私は吸血鬼としての力を出せることになる」

「20%だけですよね？ それならいけるかなって」

挑発だ。しかし乗ってやろう。

「鯖を案内してもらった後、メインクラフト内で夜になったのを合図にスタート。それでいいな」

「はい。楽しみにしてますね」

この時から私は、その変わらない穏やかさに多少なりとも恐怖を覚えていたのは事実だ。

VSアズキちゃん様

とりあえず、倉瀬アズキの情報を仕入れる事にした。ササヤキでアズキ先輩と戦う事になったんだけど弱点を教えてください、と呟いたところ。

『アズキちゃんと勝負か。負けたな。今のうちに身体洗つといた方がいいよ』

『お嬢もレズ堕ちかー。まあ吸血鬼だし処女に執着しても違和感ないか』

『弱点は可愛い女の子だよ。つまりお嬢が弱点だから大丈夫。問題は得意な相手も可愛い女の子な事か』

だとかそんな感じでまったく役に立たない。分かった事はアズキとの一日デートでお泊りするとレズになって帰されるという事だ。まったく何をされるのやら。……いや、だいたい分かる。ナニされるのだ。それも、一期生や二期生は全員堕としていてという手管で。若干のドキドキが隠せない。心臓動いてないのにな。

とにかく、得意なのは遠距離武器全般。相対的に近づけばチャンスがあるという事だ。

得られた情報の少なさに歯噛みしながら、私はパソコンの中の電脳空間で眠りについた。あまりにアズキの事を考えていたからだろうか、ビーベックスでスライディングを

駆使しながら私を翻弄してきたあの時の彼女の夢を見た。

対策らしい対策も考えられず、コラボの時間だ。私は望まれた通り、ゲーム世界に侵入してのプレイとなる。まあこのゲームならそれこそMOD扱いで許されるだろう。無理か。でもアズキが許可取ってくれてるらしいのでおんぶにだっこだ。

「トリックオアトリート。トリオ・ザ・ハロウインのゴースト・フネなの。今日は大先輩と一緒に緊張してるの」

「トリックオアトリック。トリオ・ザ・ハロウインのミス・パンプキンだよ。いやあ、こんな機会が来るなんてね。メインクラフトのモエクス鯖にも興味あったしありがたい」
「……トリックオアブラッド。トリオ・ザ・ハロウインのブラッディ・メアリーだ。今日は正直対戦の方に集中している。負けられないからな」

「トリックオアガール。なんて言ってみたりして。女体大好き倉瀬アズキです。今日はトリオ・ザ・ハロウインの皆さんと一緒にモエクスサーバーをぐるりと一周回っていきたいと思っています。その後、メアリーさんとのデートを賭けた一騎打ちを挑みます。リスナーの皆さん、楽しみにしてくださいね」

『トリオ・ザ・ハロウイン初見だわ』

『ハーレム増やすと一期生二期生のセフレ達に怒られるぞアズキちゃん様』

『セフレとか言ってるなw』

「しかし、この四角っぽい世界でがつつりと人間型してるメアリーさんは浮きますね」
『確かに』

『なんかコラっばい』
『頭身だけ他のメンバーと一緒にでなんか草』

それは私も思う。スキンで色合いこそそれぞれのメンバーだが、だいたいこの形は私を除いてみんな一緒だ。ちなみにアズキは紫髪の両メカクレだ。これは普段の立ち絵からそうなのだが。

ちなみに目の動きを配信用のスマホがきちん認識していないところを見る限り、リアルでもメカクレの髪形をしているのだらうとファンの間では噂になっているらしい。私は負けたらその真偽を嫌でも確かめる事になるわけだ。

「それじゃあ行きましようか。湧きつぶしの松明は取らないでくださいね。まずは建築物の集まっているメインタウンから——」

そうして始まったアズキの紹介はなかなか面白かった。ホテルを再現した高層物件や増築を繰り返し続けて未だ完成が見えない迷路、特に意味はないけどなんとなく格好いいで作った彼女自身のオブジェなども案内された。マップは広くて、何度も朝と夜を繰り返していた。

そうすると、まあ。当然あの事について突っ込まれる。

「メアリーさん、朝になると銀髪銀眼になるんですね」

「ああ。この状態では吸血鬼らしい力もだいぶ失われている。やはり吸血鬼が強いのは夜だからだな」

「つまり私は決闘において時間稼いでれば勝てそうですね。いやあ、デート楽しみです」
しまった。自分から弱点を喋ってしまった。とうかこの女、具体的には知らなくても吸血鬼が太陽に弱い事くらい知っているはずだ。だとすれば、元から時間稼ぎは選択肢に入っていると考えると良い。食えない奴だ。

「しかし、そうすると戦闘エリアはどうしましょうかね。洞窟の近くとかにして、いざとなったらメアリーさんが逃げ出せるようにした方がいいですかね。さすがに洞窟の中からスタートは私不利すぎるのでやめておきたいですけど」

「……なんだと?」

複雑ななんだと、である。吸血鬼であるこの私が逃げるとでも思っているのかというなんだと、でもあるし、自分から洞窟付近なんてこちらに対する好条件をつけてくる事に対してのなんだとでもある。

「道具はなんでも使つていい事にしましょう。私は自分の作った装備使いますけど、メアリーさんも必要なら何か使います?」

「いや、いらん」

いざとなつたら飛行する事も考えれば重い防具はつけられない。そして、武器は私の素手のほうが強いだろう。

「場所は どうしますか？ 洞窟近くがいいのであればそうしますけど」

「……いや、森のそばにしよう。太陽光が多少入るくらいがフェアだろう」

「では、そのように。ふふふ、よかったですね」

軽く微笑む彼女が不思議で仕方が無かった。

「なにがだ」

「近くの洞窟は爆弾をたくさん仕掛けてまして。油断して入り込んだら追いかけた私の弓矢が起爆してドカン。私の勝ちでした」

恐ろしい女だ。こちらに有利な提案は罠か。そうなると案内される森も危険だろうか。

「……平原にしよう。さつさとケリをつけてやるから朝になる心配などいらん」

「ありがとうございます。そう言っていただけに誘導した甲斐がありました」

なんだこいつは！ どこまで本気で言っているのかまるで分からん。他人の言動を読み切っていると言わんばかりの発言を大人しい声色で言ってくる。強い感情を発しない、静かな強者の雰囲気を感じざるを得ない。

「そろそろ紹介も終わりですので、戦いましょうね。パンプキンさん。フネさん。行き

ましようか」

「はいなの」

「はい。案内していただいてありがとうございます。ごさいました」

三人が歩いていくのを後ろから見ている。不安を感じた。飲まれてしまっている自分がいる。大丈夫だ。負けてもたかがデートだ……何か無理強いされたら拒否すればいい。いや、彼女はそれくらい読んでいる？ 違う、そもそも今から負けた時の事を考えてどうする。私は勝つのだ。吸血鬼の誇りにかけて。

整地してある平原を、パンプキンに頼んで選んでもらった。これで罨は無いはずだ。

時間も夕方。髪と眼が色を僅かに取り戻していく。

「フネさんとパンプキンさんに土ブロックを置いてもらったので、その中で戦います。この外に出してしまう、体力をゼロにされる、ログアウトしてしまう。敗北条件はこのくらいでいいでしょうか」

「ああ」

「私が勝つたらキスありのデート、それ以上は要相談。メアリーさんが勝つたら私に吸血していい。これで間違いありませんね」

「そうだな」

「どつちにしろ私は貴女にリアルで会える。そのメリットが存在していた事には気づいてましたか？」

「……」

沈黙で返すしかなかった。話せば話すほど、お釈迦様の掌の上にもいるような感覚に陥ってしまう。

「さあ、そろそろ夜が始まりますよ。楽しい夜になるといいですね」
「楽しい時間はすぐ終わるといふ事を教えてやろう」

お互いが土ブロックの両端に位置取り、準備完了。そして、陽が落ちた――

それと同時に射出される矢。その発生源はもちろんアズキ。狙いは正確で、私の頭を的確に打ち抜き……はしなかった。ハート10個を最大体力として、0.5しか削られない。加えて、吸血鬼の再生能力でそのダメージもすぐに回復。

そうか、確かにアズキは厄介だ。だが、ゲーム内の武器は恐れるに足りない。私を倒しきるための火力が無かった。

気付いた私はただ愚直に、前へ向かった。飛んでくる矢は的確にこちらの頭を狙い、ダメージを与えてくるが、ゲームの仕様で多少のノックバックが発生するだけだ。

あと一歩近づけばダイヤ装備のその身体を貫くであろうと拳を握りしめたところで、アズキが、弓を弓に持ち替えた動きをした。

放たれる射撃は一発で私のハートを四点削り、僅かにノックバックしてもそこは射程圏内。追撃の射撃が連発で頭に決まり、私は死亡した。

リスポーンした私は茫然とするばかりであった。そこにトリオ・ザ・ハロウインの仲間二人とデートする事が決まった相手が迎えに来てくれた。

「……で、なんだあれは」

「弓ですか？ 単純な仕掛けで、弱い弓使つて油断して近づいてくるところを強い弓に切り替えて逃げられない距離で連射しようって作戦です」

「そうだよな。気付いた時にはもう遅かった」

どうしようもないくらいに敗北だった。弓のダメージが少なかつたから油断した。まさか最初から全力でこないとは思ってもせずに。

「……ちなみに、森を選んだ場合の対処方法はどうしてた？」

「火打ち石で森全焼させてました」

やっぱこの女やばいな。

「それでデートなんですけど、明日とかどうですか？ 都内住みですよね？」

めちやくちやくぐいぐい来る。ちよつとコメントを見て現実逃避。

『アズキちゃん様×メアリーちゃんてえてえ』

『ハーレム入りおめでどう』

『お嬢、非処女になっても幸せでね』

逃げ場なんてなかった。というか男に食われるのは嫌がるくせに女同士ならてえてつてなんなんだ。同じ性行為だろ。いや性行為もせんわ。

「……明日でいい。ただ、配信はいつも通りにやらせてくれ」

「それじゃあ、どつちかの家でお泊りしましょう。本当はラブホのつもりだったんですけど」

あ、性欲を隠すつもりも無い猿だ。というかこの女、本当頭良くて手玉に取られるから警戒しないと駄目だわ。本当にやられる。

そんな感じで若干ピンクな雰囲気です配信終了。

デス子には明日の打ち合わせをしたがるアズキが連絡待ちだ。

とりあえず泊まるのは家を知られる危険を考えても我が家にすべきだ。なにしろ家には眷属がいる。なにかあれば眷属を操ってアズキを引き離す。私は電脳空間に逃げ込む。それで問題ない。

「もしもし、明日は我が家に泊まってもらおう」

「メアリーさん、配信お疲れさまでした。それではそのようにしましょう。夜はそれでもいいとして、朝からのデートコースは——」

そうして始まった次の日のデート。私は朝から吸血鬼の力の無い姿で待ち合わせる

事に。この状態で押し倒されないかが不安だ……などと思っていたが、彼女は紳士的だった。ちなみにメカクレ黒髪ロリ巨乳という立ち絵よりも属性盛り盛りののが彼女のリアルだ。

そして何事も無く私の家での配信も終えて……その本性が明らかになる。

「チユリさんがね。言ってたんですよ。吸血鬼は魔族。魔族は約束を違えない……契約だからって」

「なるほど、それで？」

「キスをします」

「そういうルールだからな」

「ここに、します」

そういうと彼女は私の下腹部を撫でてくる。

「おい、まさか——」

彼女は私の下着を脱がせると目的を達成しようと狙いをつけて。

「ディープキスです」

彼女は極太デイルドを用意していて、私は処女を失い……レズに目覚めた。

掲示板2

【お嬢は】アバターモエクススレ part 78 【本物の吸血鬼】

412:名無しのVリスナー 2020/11/02 (月) 21:48:43 ID:

??? 私は薄味の料理が好きなのではない! 薄味の料理が好きなら私自身が好きなのだ!

って飛ばしてるなあ。パンピキン

414:名無しのVリスナー 2020/11/02 (月) 21:49:21 ID:

??? でもなんとなく分かる……繊細な味が分かる自分かっこいいみたいなことだろう?

419:名無しのVリスナー 2020/11/02 (月) 21:51:07 ID:

??? そろそろお嬢の番か。バズったよなあ

423:名無しのVリスナー 2020/11/02 (月) 21:52:33 ID:

??? 吸血鬼だって信じたのはアーカイブに魅了効果が残ってた先着者限定だけだな

4 2 6 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 2 (月) 2 1 : 5 3 : 5 8 ID :

俺あれ二回目見ちゃったから本当ならお嬢が吸血鬼だって信じてる人が一人多かつたはずなんだよな……

4 3 0 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 2 (月) 2 1 : 5 4 : 1 3 ID :
 ???

>>> 4 2 6

それは早くからお嬢を知ってた特典だからしゃーない

4 3 3 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 2 (月) 2 1 : 5 5 : 3 6 ID :
 ???

アーカイブから魅了が消えるとも思ってたないもんなあ。仕方なかった

4 3 7 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 2 (月) 2 1 : 5 6 : 4 9 ID :
 ???

で、今回はスマプラだっけ? しかもなぜかわざわざオフライン

4 4 0 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 2 (月) 2 1 : 5 7 : 2 4 ID :
 ???

熱帯出来ないほど下手なのかなお嬢。ちよつと解釈違い

4 4 2 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 2 (月) 2 1 : 5 8 : 2 8 I D :

>>> 4 4 0

見れば分かる言われところが

4 4 5 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 2 (月) 2 1 : 5 9 : 0 1 I D :

???

お嬢の待機時間はやけに短いから油断するなよ。2 2 時ちようどに始まってもおかしくないんだ

あれは電脳吸血鬼なのがなにか関係してるのかね

4 5 0 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 2 (月) 2 2 : 0 0 : i 6 I D :

???

はじまつたー

4 5 3 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 2 (月) 2 2 : 0 1 : 0 1 I D :

???

お嬢はユニットとしての挨拶トリックオアブラッドか。吸血鬼らしいな

4 5 6 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 2 (月) 2 2 : 0 2 : 2 7 I D :

???

なあ、なんかこんヴァンパイアって言うてる奴増えてない……??

4 5 9 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 2 (月) 2 2 : 0 3 : 4 0 I D :

???

気にしたら負けのやつだぞ、こんヴァンパイアは

4 6 2 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 2 (月) 2 2 : 0 4 : 5 4 I D :

???

チートすんの!?

4 6 5 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 2 (月) 2 2 : 0 5 : 3 3 I D :

???

そりゃあ、機种的にチートはできなくはないだろうが……

4 6 8 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 2 (月) 2 2 : 0 7 : 1 7 I D :

???

ゲームの中に入る!? それチートの一種なの!?

4 7 1 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 2 (月) 2 2 : 0 8 : 1 1 I D :

???

ゲームの仕様外の事やるならチートだが……そんなのありかよ

480 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 02 (月) 22 : 10 : 28 ID :
 ???

アイテム無しエンドライン。エンドライン厨か

483 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 02 (月) 22 : 11 : 25 ID :
 ???

>>480

台座とかはリアルには無いし、戦い辛いんだろ

486 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 02 (月) 22 : 12 : 00 ID :
 ???

てかこれ負けたら高いところから落とされるんだよな。高所恐怖症の俺には無理だ

わ

487 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 02 (月) 22 : 13 : 21 ID :
 ???

うわ痛そ……殴り掛かったらスタービィにカウンターパンチ貰ってるわ

489 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 02 (月) 22 : 14 : 36 ID :
 ???

これ難易度いくつだっけ。最大の9? 反応良くね

???
 491:名無しのVリスナー 2020/11/02 (月) 22:15:22
 ID:

>>489

5。それでもこの動きだから科学の発展ってすげーよな

???
 494:名無しのVリスナー 2020/11/02 (月) 22:16:32
 ID:

ていうかお嬢のダメーじ蓄積度の下のゲーじ何よ。20%ってなってるけど

???
 497:名無しのVリスナー 2020/11/02 (月) 22:17:45
 ID:

うわ本当だ何かある

???
 500:名無しのVリスナー 2020/11/02 (月) 22:18:56
 ID:

吸血鬼ゲーじ?

505:名無しのVリスナー 2020/11/02 (月) 22:20:39
 ID:

???

>>500

それはそうなんだろうが……君、雑って言われない?

508：名無しのVリスナー 2020/11/02 (月) 22:21:22 ID:???

あれは……影を実体化して武器を作り出し貫く技！

510：名無しのVリスナー 2020/11/02 (月) 22:22:05 ID:???

???

>>508

なげえ！

そしてゲージ減った！

513：名無しのVリスナー 2020/11/02 (月) 22:23:16 ID:???

???

スタービィに飛びついた！そのまま攻撃……しねえ！

516：名無しのVリスナー 2020/11/02 (月) 22:24:22 ID:???

???

スタービィのもっちり感を楽しむな

520：名無しのVリスナー 2020/11/02 (月) 22:25:52 ID:???

???

そんな事してるから吸い込まれてコピーされ……ゲージ向こうはマックスだこれ！

??? 5 2 3 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 2 (月) 2 2 : 2 7 : 0 4 I D :

スタービィのが吸血鬼として優秀……悲しいな

??? 5 2 7 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 2 (月) 2 2 : 2 7 : 5 1 I D :

うお、血液を凝固させることで作成される影で作った武器よりリーチこそ短いが強度の高い武器！

??? 5 3 0 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 2 (月) 2 2 : 2 8 : 3 2 I D :

>>> 5 2 7

やっぱりなげえ！

というかよく知ってるな！

??? 5 3 2 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 2 (月) 2 2 : 2 9 : 2 1 I D :

これお嬢負けるか……？ スタービィが能力ガンガン使うからジリ貧じゃん

??? 5 3 7 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 2 (月) 2 2 : 3 1 : 4 7 I D :

ん？ スタービイがワインか何か飲み始めた

541:名無しのVリスナー 2020/11/02 (月) 22:32:i6 ID:

???

その際にお嬢殿った！ ダメージ量20%オーバー！ ゲノンか何かか!?

544:名無しのVリスナー 2020/11/02 (月) 22:33:52 ID:

???

やはりお嬢は重量級……

547:名無しのVリスナー 2020/11/02 (月) 22:34:i2 ID:

???

重量級なお嬢……なにも閃かない

550:名無しのVリスナー 2020/11/02 (月) 22:35:27 ID:

???

>>547

乳が重量級になるかもしれんじやろがい！

552:名無しのVリスナー 2020/11/02 (月) 22:36:59 ID:

???

>>550

これだからロリ巨乳派は！ 欲望に忠実だと言われるのだ！

556：名無しのVリスナー 2020 / 11 / 02 (月) 22：37：39 ID：

???

おお、お嬢がさっきの飲み物でゲージ回復したスタービー見てゲージが吸血ゲージだと看破したぞ

559：名無しのVリスナー 2020 / 11 / 02 (月) 22：38：14 ID：

???

アナザーブラッドで20%まで吸血ゲージ溜まったのか。偽物の血液としてはいい方なのか？

562：名無しのVリスナー 2020 / 11 / 02 (月) 22：39：05 ID：

???

>>559

満腹度と捉えればいつも20%しか腹膨れてないんだぞ。辛いと思うが

564：名無しのVリスナー 2020 / 11 / 02 (月) 22：39：47 ID：

???

>>562

そこまでして実際には吸血しないお嬢の思惑とは一体……

570：名無しのVリスナー 2020/11/02 (月) 22:43:52 ID:

お嬢回避に専念し始めた。ぶっちゃけガン待ち

575：名無しのVリスナー 2020/11/02 (月) 22:45:12 ID:

お、ゲージ回復しようとした所殴りつけた

578：名無しのVリスナー 2020/11/02 (月) 22:46:43 ID:

まさかこれ繰り返して勝つつもりか!?

580：名無しのVリスナー 2020/11/02 (月) 22:47:22 ID:

相手がCPUだからってケチくせえな!

554：名無しのVリスナー 2020/11/02 (月) 22:48:58 ID:

勝つために手段を選ばない過ぎる

611：名無しのVリスナー 2020/11/02 (月) 22:55:52 ID:

???

815:名無しのVリスナー

2020 / 11 / 03 (火)

10:21:52

ID:

お嬢、運営に怒られてて草

???

813:名無しのVリスナー

2020 / 11 / 03 (火)

10:21:17

ID:

まあチートだから大っぴらにはやれなそうだけど

???

625:名無しのVリスナー

2020 / 11 / 02 (月)

23:00:25

ID:

なんだかんだ面白かったわ。また見たい

???

620:名無しのVリスナー

2020 / 11 / 02 (月)

22:58:41

ID:

お嬢成長したー！ 大人状態でぶん殴ってフィニッシュ！

???

614:名無しのVリスナー

2020 / 11 / 02 (月)

22:56:22

ID:

なんだ今更痺れ切らしたのか!? 殴り掛かりにいったぞ！

???

>>813

やっぱチートは駄目だった？

816：名無しのVリスナー 2020/11/03 (火) 10:22:33 ID:

???

>>815

お嬢のツイッター。運営に怒られたって

819：名無しのVリスナー 2020/11/03 (火) 10:24:57 ID:

???

昨日の配信はどこもよかったんだけどなー、サイバとダーが奮わなかった事も含めて

821：名無しのVリスナー 2020/11/03 (火) 10:25:22 ID:

???

>>819

ダーの独り相撲だっけ。まあ、男はいいよ。別に

【チート】アバターモエクススレpart79 【駄目絶対】

502：名無しのVリスナー 2020/11/03 (火) 21:50:20 ID:

???

しつかり香辛料を買い込んで、数時間かけて作ったカレーよりレトルトカレーが同じくらいかそれ以上に美味いと、私はなぜこんな無駄な時間を……と打ちのめされる。至言だな

???
505:名無しのVリスナー 2020/11/03 (火) 21:51:i7 ID:

パンプキンの場合はカボチャを入れようとするからな気もするが……

???
509:名無しのVリスナー 2020/11/03 (火) 21:52:34 ID:

パンプキンが料理作れるのは解釈違いです。だめだめなお姉さんであるべきです

???
512:名無しのVリスナー 2020/11/03 (火) 21:53:02 ID:

カレーくらいなら小学生でも作れるだろ

???
514:名無しのVリスナー 2020/11/03 (火) 21:53:57 ID:

俺、無理だわ……

???
520:名無しのVリスナー 2020/11/03 (火) 21:55:48 ID:

ていうかなんでお嬢はまたスマプラやるって言うてんの？ 昨日の今日で？ 馬鹿なの？

5 2 2 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 3 (火) 2 1 : 5 6 : 3 2 ID :

???

>> 5 2 0
詳細は配信でって言われとろうが

5 2 4 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 3 (火) 2 1 : 5 7 : 3 0 ID :

???

他のプレイヤーに迷惑かけないならチートもありだと思っただけだなー

お嬢もそれが分かっているからオフライン限定って釘刺したんだろ？

5 2 7 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 3 (火) 2 1 : 5 8 : 0 9 ID :

???

>> 5 2 4

上に怒られた。それがすべてだ

5 3 2 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 3 (火) 2 1 : 5 9 : 5 7 ID :

???

配信許可取ってるだけだからね。公式でもなんでもないんだから人目のあるところ

でやるべきじゃなかった

537 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 03 (火) 22 : 01 : i0

???

こんヴァンパイアが流行っておる流行っておる

540 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 03 (火) 22 : 02 : 52

???

チート承認!?

544 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 03 (火) 22 : 03 : 45

???

忍転道 「いいぞもっとやれ」

547 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 03 (火) 22 : 05 : 04

???

お嬢の逆転満塁ホームラン

552 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 03 (火) 22 : 07 : 25

???

さー、ヒゲオ戦だ

570 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 03 (火) 22 : 10 : 48

ID :

???

うわ、えっぐいな。マウント取ってボコボコに殴りつけた上で締めは蹴り飛ばしか

572：名無しのVリスナー 2020 / 11 / 03 (火) 22：11：12 ID：

???

そんな下投げ？ があるかよお！

620：名無しのVリスナー 2020 / 11 / 03 (火) 22：19：07 ID：

???

ニテールの扱い草

623：名無しのVリスナー 2020 / 11 / 03 (火) 22：23：14 ID：

???

ニテールロケットで飛んできたのをいいことに殴りつけて地面に埋めるの本当草

674：名無しのVリスナー 2020 / 11 / 03 (火) 22：31：01 ID：

???

ゴリラと対等に殴り合ってる……

678：名無しのVリスナー 2020 / 11 / 03 (火) 22：33：47 ID：

???

お嬢、やっぱあんたゴリラだよ……

683 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 03 (火) 22 : 35 : 07 ID :

???

うお！ お嬢ドンクに掴まれて持ち上げられて……立ち絵で白パン丸出し！

685 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 03 (火) 22 : 35 : 47 ID :

???

よくやったドンク！ ナイスサービスショット！

688 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 03 (火) 22 : 37 : 05 ID :

???

蹴り入れるときのチラリズムもいいんだが丸出しはスクショが捗る……

【お嬢の】アバターモエクススレ Part 80 【乱闘】

1 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 04 (水) 22 : 10 : 04 ID : ???

企業配信者集団アバターモエクススのスレです

モエクスを楽しむための三つの心得

・アズキちゃん様のセクハラは絶対

・でも我々はアズキちゃん様ではないのでセクハラはほどほどに

・メンバーをかわいいと思ったときには素直にかわいいと言おう

2 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 4 (水) 2 2 : 1 5 : 3 4 I D : ???
 >>> 1 乙

このスレタイじやお嬢が死球食らって暴れ出したみたいにな事になつてる

3 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 4 (水) 2 2 : 1 6 : 0 7 I D : ???

次はマールか。剣士キヤラ

6 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 4 (水) 2 2 : 1 7 : 3 4 I D : ???

乱闘二日目だけどお嬢に疲れみたいなのは見えな

8 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 4 (水) 2 2 : 1 8 : 1 6 I D : ???

昨日二十人以上相手にしてるのにな

1 1 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 4 (水) 2 2 : 1 9 : 5 1 I D :

???

>>> 8

一日で二十人以上を相手にするとかとんだビツチだな!

1 4 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 4 (水) 2 2 : 2 1 : 1 7 I D :

???

お、ブラッドウェポンの剣モード。これでリーチの不足を補うか

???
 16 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 04 (水) 22 : 22 : 24
 ID :

お嬢、その名前気に入っちゃったね

???
 19 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 04 (水) 22 : 23 : 50
 ID :

お嬢、ちょっと中二なところあるから……

???
 23 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 04 (水) 22 : 24 : 13
 ID :

見た目は小学生だし、ちょっと早めの中二病でもおかしくない

???
 27 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 04 (水) 22 : 25 : 44
 ID :

だが成人女性だ

57 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 04 (水) 22 : 40 : 26
 ID :

???
 今度はゲノン戦か。パワー勝負になるな

60 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 04 (水) 22 : 42 : 16
 ID :

???

いや、スピードが違いすぎる。ゲノンにワンチャンは合っても順当にいけばお嬢が勝つだろうな

???

64：名無しのVリスナー 2020 / 11 / 04 (水) 22：43：24 ID：

おお、ブラッドウエポン引つ張ってくるか。今回は槍だね

???

68：名無しのVリスナー 2020 / 11 / 04 (水) 22：44：00 ID：

なるほど、ゲノンは魔王剣のリーチがあるからそれ以上のリーチで勝負しようってわけか

???

120：名無しのVリスナー 2020 / 11 / 04 (水) 23：34：17 ID：

今度はヘビヘイだな。ロケットランチャーだとかの飛び道具や地雷設置でやりにくそうだ

???

123：名無しのVリスナー 2020 / 11 / 04 (水) 23：35：44 ID：

うお、珍しい！ あのちっちゃい羽出して飛んだぞ！

1 2 7 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 4 (水) 2 3 : 3 6 : 5 9 I D :

???

あの小さい羽で飛べるんだから吸血鬼ってのは訳が分からん

1 8 7 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 5 (木) 0 0 : 2 7 : 3 0 I D :

???

リドル撃破！ 鋭い尻尾を躲して、攻撃判定の無くなったところを掴んでジャイアン
トスイング！ 見応えあつたな！

1 9 0 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 5 (木) 0 0 : 3 0 : 2 7 I D :

???

次は……どうなんだ？ ヴァンパイアハンターだろ？

1 9 2 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 5 (木) 0 0 : 3 1 : 1 4 I D :

???

相性はよくないだろうな。お嬢になにか考えがあるといいんだけど

2 1 1 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 5 (木) 0 0 : 3 3 : 3 0 I D :

???

影鬼使つて互角……ゲージ消費技な事考えると辛い展開だ

214 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 05 (木) 00 : 34 : 19 ID :

???

お嬢、影鬼採用したね

218 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 05 (木) 00 : 34 : 58 ID :

???

>>214

お嬢中二病だから。成人女性なのに

224 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 05 (木) 00 : 36 : 47 ID :

???

うわ、聖水エグいほど食らった！ 相手これある程度連発できるんだぞ!?

227 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 05 (木) 00 : 37 : 30 ID :

???

お嬢吹っ飛ばされた！

230 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 05 (木) 00 : 38 : 17 ID :

???

こんなあからさまに吹っ飛ばされたのは初めてか！

???
 2 3 3 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 5 (木) 0 0 : 3 9 : 4 6
 ID :

いやでも……空中で給水してるッ!

???
 2 3 7 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 5 (木) 0 0 : 3 9 : 2 4
 ID :

復帰成功!

???
 2 4 2 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 5 (木) 0 0 : 4 0 : 1 9
 ID :

ブラッドウエポン・鎌からの……大斧! えぐい! それがいい!

???
 2 4 5 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 5 (木) 0 0 : 4 1 : 5 5
 ID :

スマッシュホールドしての影鬼・劍群! お嬢の勝利だ!

???
 2 5 0 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 5 (木) 0 0 : 4 2 : 2 0
 ID :

もう一戦あるのかって呟いた! 露骨に嫌そう!

9 1 1 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 5 (木) 2 2 : 0 3 : 2 7
 ID :

???

今日はバイオネット戦からか。相手は回避する時に蝙蝠化したりするし吸血鬼みたいなもんだろ

9 1 4 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 5 (木) 2 2 : 0 4 : 1 2 ID :
???

>>> 9 1 1

魔女だけどな

9 3 1 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 5 (木) 2 2 : 0 7 : 2 7 ID :
???

バイオネットの空中コンボを霧化で無理矢理抜けて……殴り飛ばした!

9 3 4 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 5 (木) 2 2 : 0 8 : 5 7 ID :
???

霧化VS蝙蝠化は霧化のお嬢が制したか!

【明日】アバターモエクススレpart 8 1【五期生コラボ】

1 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 5 (木) 2 2 : 4 0 : 4 8 ID :
???

企業配信者集団アバターモエクススのスレです

モエクスを楽しむための三つの心得

・アズキちゃん様のセクハラは絶対

・でも我々はアズキちゃん様ではないのでセクハラはほどほどに

・メンバーをかわいいと思っただときには素直にかわいいと言おう

2 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 05 (木) 22 : 44 : 23 ID : ???

>>> 1乙

五期生コラボだと余計なの入らない？

4 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 05 (木) 22 : 45 : 27 ID : ???

>>> 2

トリオ・ザ・ハロウィンだと長いからね

五期生コラボでも分かるでしょ

7 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 05 (木) 22 : 47 : 01 ID : ???

>>> 4

合理的だな

10 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 05 (木) 22 : 49 : 18 ID :

???

お嬢タフすぎる……毎日どれだけやってるんだ

13 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 05 (木) 22 : 50 : 56 ID :

???

>>>10

一日25戦やってた

今日はちよつと少なくて済む

17 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 05 (木) 22 : 52 : 03 ID :

???

プロならアイアムマンチャレンジとかやるし余裕

20 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 05 (木) 22 : 54 : 17 ID :

???

>>>17

お嬢プロじゃないんだからプロと比較されても

24 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 05 (木) 22 : 56 : 03 ID :

???

>>>17

なにそれ

??? 28 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 05 (木) 22 : 58 : 36 ID :

>>>24

スマプラで全キャラオンラインで一勝する挑戦。そのタイムで競うRTA

??? 31 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 05 (木) 23 : 00 : 12 ID :

??? そういやお嬢のブラッドウエポンって威力あんなものなの？

??? 34 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 05 (木) 23 : 01 : 20 ID :

???

>>>31

と、言うとは？ 破壊力は十分だと思うが

??? 38 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 05 (木) 23 : 03 : 01 ID :

???

>>>31

お嬢って血を吸わないからブラッドウエポンってアナザーブラッド製だと思うんだ

よね。

って事は、本当の血液で作ったブラッドウエポンならもつと強いんじゃないかなって

4 1 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 5 (木) 2 3 : 0 4 : 5 0 ID :

>>> 3 8

一理ある

4 4 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 5 (木) 2 3 : 0 5 : 3 4 ID :

???

そもそもお嬢そのものが血を吸わない吸血鬼だから性能落としてそうだし
本来ならもつと凄いな

4 7 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 5 (木) 2 3 : 0 7 : 1 2 ID :

???

あー、お嬢がエンドラインでしか戦わないの背景が原因か

エンドライン厨だと思ってたわ

5 0 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 5 (木) 2 3 : 0 9 : 3 3 ID :

???

吸血鬼つてのも不便なものだな。データの世界でも日差しの下が駄目なんだから

【五期生コラボ】アバターモエクススレPart 8 1 【開催中】

???
3 1 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 6 (金) 1 9 : 0 5 : 5 1 I D :

ビーベックスプレイ量

パンプキン : ちよつと

フネ : ちよつと

メアリー : 動作確認しただけ

不安だあ!

???
3 4 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 6 (金) 1 9 : 0 7 : 3 9 I D :

メアリーちゃん : …お嬢だっけ? 彼女の吸血鬼・狩人の組み合わせってどうなの?

3 8 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 6 (金) 1 9 : 0 8 : 2 2 I D :

???
>>> 3 4

攻めるときはトラップ外しがお仕事だけど芋るのが一番強い。配信向けではない

4 7 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 6 (金) 1 9 : 1 2 : 5 1 I D :

???

フネの戦士はヘッドショット一発で抜かれる事が少ないから安定して強い。ゴース

トはまあ、最序盤の武器持ってない時の殴り合いなら

59 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 06 (金) 19 : 15 : 51 ID :

???

パンプキンの獣人・レンジャーはいいぞ。獣人の臭いの可視化で周囲の状況を確認しながらレンジャーで傷を回復できる。安定したヒーラーだな

70 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 06 (金) 19 : 17 : 25 ID :

???

お、開始したジャンプリーダーはフネか

73 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 06 (金) 19 : 19 : 30 ID :

???

建物付近か。序盤から芋るのは悪手だが

83 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 06 (金) 19 : 22 : 51 ID :

???

確実に建物の中で武器手に入れるならこの動きはありよりのあり

殴られるのに強いゴーストと建物の中で強い吸血鬼なら確実に武器回収できるから

85 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 06 (金) 19 : 23 : 07 ID :

???

後ろ！ 後ろ！ 来てる来てる！

8 8 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 6 (金)

1 9 : 2 5 : 2 1
I D :

???

武器とった！ 勝ったな！

8 9 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 6 (金)

1 9 : 2 6 : 5 1
I D :

???

あー、これうちの……

9 0 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 6 (金)

1 9 : 2 7 : 2 1
I D :

???

うん……

9 2 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 6 (金)

1 9 : 2 9 : 0 5
I D :

???

あたんねええええええええ

9 3 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 6 (金)

1 9 : 3 0 : 2 3
I D :

???

だってこれ、アズキちゃん様だから……

9 6 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 6 (金)

1 9 : 3 1 : 3 1
I D :

???

>>93

えええええええええ!?

100:名無しのVリスナー 2020/11/06 (金) 19:32:51 ID:

???

アズキちゃん様と言えど、ゴースティングはhikuwa……

101:名無しのVリスナー 2020/11/06 (金) 19:33:20 ID:

???

>>100

スナイプする企画だったけどゴースティングはしてないよ!

ジャンプリーダーでもなかったし!

102:名無しのVリスナー 2020/11/06 (金) 19:34:10 ID:

???

たぶんアズキちゃん様の五期生にスナイプする企画にスナイプ成功したりリスナーが

ゴースティングした

103:名無しのVリスナー 2020/11/06 (金) 19:34:41 ID:

???

アズキちゃん様のせいではないがアズキちゃん様リスナーのせいではある。申し訳ないことをした

803:名無しのVリスナー 2020/11/06 (土) 00:01:00 ID: ???

最初こそトラブルがあったが、あれのおかげで上手くなろうという意志見せてくれて見応えがあつたな

807:名無しのVリスナー 2020/11/06 (土) 00:02:11 ID: ???

メアリーちゃんも初心者なりに頑張ってた!

810:名無しのVリスナー 2020/11/06 (土) 00:03:20 ID: ???

お嬢は移動自体が怪しい……WASD移動に慣れてない感じがありありと伝わってくる

812:名無しのVリスナー 2020/11/06 (土) 00:04:16 ID: stko yt

少なくともチートしてる感じはなかったな

815:名無しのVリスナー 2020/11/06 (土) 00:04:52 ID: ???

>>812

まだそれ言ってるのか。お嬢はオンラインゲームではチートしないの

818:名無しのVリスナー 2020/11/06 (土) 00:05:03 ID: ???

???

>>815

ID出てる奴に構うな。ほっとけ

821:名無しのVリスナー 2020/11/06 (土) 00:06:23 ID: ???

???

で、お嬢はメイクラフトくらいでしかWASD移動したことなかったんだっけ？

824:名無しのVリスナー 2020/11/06 (土) 00:07:11 ID: ???

???

しかもピース(笑)で巨大な豆腐要塞作って満足するらしい

827:名無しのVリスナー 2020/11/06 (土) 00:08:27 ID: ???

???

しかもそのデータも誤って消してしまっただけからはメイクラフトは新しいデータ

作っては旅だけして終えるらしい。旅ってそんな

833 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 06 (土) 00 : 09 : 40 ID :

そんな話してる間になんか自警団やるとか。物好きといつかなんといつか

834 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 06 (土) 00 : 10 : 33 ID :

ヴァンプ・ナイト読まれたから俺は嬉しい

837 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 06 (土) 00 : 12 : 07 ID :

>>834

おめ

ださいけど

840 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 06 (土) 00 : 12 : 59 ID :

>>837

最後の一文いる？

??? 878:名無しのVリスナー 2020/11/06 (土) 00:21:i6 ID:

速報・アズキちゃん様と五期生がメインクラフトコラボ

??? 881:名無しのVリスナー 2020/11/06 (土) 00:22:20 ID:

>>>878

まだ三期生や四期生もほとんどコラボしてないのに、もう!?

??? 884:名無しのVリスナー 2020/11/06 (土) 00:23:i7 ID:

>>>881

(危険すぎて) コラボしてないのに

??? 890:名無しのVリスナー 2020/11/06 (土) 00:24:00 ID:

>>>884

アバターモエクスの稼ぎ柱が一番危険なやつってどうなんだろうな

??? 895:名無しのVリスナー 2020/11/06 (土) 00:25:33 ID:

>>890

我々、百合レス好きすぎるからな……

899:名無しのVリスナー 2020/11/06 (土) 00:26:i7 ID:

???

で、誰狙いだと思う？

901:名無しのVリスナー 2020/11/06 (土) 00:26:i57 ID:

???

确实にかわいいのが分かってるお嬢

902:名無しのVリスナー 2020/11/06 (土) 00:27:i36 ID:

???

成人が確定してるメアリーちゃん

907:名無しのVリスナー 2020/11/06 (土) 00:28:i41 ID:

???

>>901-902

だよなあ……リスナーのゴースティング疑惑を逆手にとって会話のつかかりにしたのか？ 相変わらずそういうの上手いよな

911:名無しのVリスナー 2020/11/06 (土) 00:29:i16 ID:

???

>>907

女だから許されてる。割とマジで

914:名無しのVリスナー 2020/11/06 (土) 00:31:00 ID:

???

女の子をレズ堕ちさせる才能がやばい

正直サキユバスじゃないかと疑ってる

917:名無しのVリスナー 2020/11/06 (土) 00:33:07 ID:

???

>>914

チユリちゃんが言うにはお嬢より後に超常存在は生み出されないうって話だけど、アズキちゃん様はその前からいるわけだからな。可能性は無くも無い

920:名無しのVリスナー 2020/11/06 (土) 00:34:44 ID:

???

あ、ササヤキでお嬢がアズキちゃん様と戦う事になったって。アズキちゃん様が勝てばデート、お嬢が勝てば吸血する……お嬢負けたなこりゃ

922:名無しのVリスナー 2020/11/06 (土) 00:35:47 ID:

???

アズキちゃん様が勝負を仕掛けにいったって事は勝てる算段があるからだ。なんとなくで勝負を受けたら勝てるはずもない

【敗北者】アバターモエクススレ part 83 【メアリー】

1 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 06 (土) 20 : 58 : 57 ID : ???

企業配信者集団アバターモエクススのスレです

モエクスを楽しむための三つの心得

・アズキちゃん様のセクハラは絶対

・でも我々はアズキちゃん様ではないのでセクハラはほどほどに

・メンバーをかわいいと思ったときには素直にかわいいと言おう

2 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 06 (土) 20 : 59 : 20 ID : ???

>>> 1乙

いいタイミングで次スレ立ったな

というかお嬢がやるまえから負けてて草

17 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 06 (土) 21 : 05 : 55 ID :

???

お、はじまったな

20 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 06 (土) 21 : 06 : 23 ID :

???

世界観に合わない女がおるぞ

23 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 06 (土) 21 : 08 : 55 ID :

???

多少二頭身用にデフォルメされただけで、明らかに人間でございって形されると違和

感あるわw

26 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 06 (土) 21 : 09 : 12 ID :

???

>>23

他のキャラと並べると特になw

82 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 06 (土) 21 : 17 : 05 ID :

???

ん? 太陽浴びて溶けたりするかと思ったが、お嬢銀髪になるだけか?

??? 86 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 06 (土) 21 : 18 : 25 ID :

>>> 82

溶けはしないだろせめて燃えるとかさあw

あと眼も銀色だわ。なんかちよっと人外感増しつつ大人しそうに見えて好き

??? 90 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 06 (土) 21 : 19 : 33 ID :

吸血鬼としての力も失われるのか。あの暴力の塊みたいなムーブもできないんだな

??? 92 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 06 (土) 21 : 19 : 54 ID :

>>> 90

閃いた

??? 95 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 06 (土) 21 : 20 : 29 ID :

>>> 92

通報した

215：名無しのVリスナー 2020 / 11 / 06 (土) 22：05：07 ID：

さて、一通り紹介も終わったからアズキちゃん様とお嬢の勝負だが……さつそく心理戦にやられておるわ

217：名無しのVリスナー 2020 / 11 / 06 (土) 22：05：55 ID：

誰も話を聞いたら負けだって教えなかったのか？ 訓練されてるなあ

221：名無しのVリスナー 2020 / 11 / 06 (土) 22：06：13 ID：

メアリーちゃんが負けた方が『面白い』からなあ

225：名無しのVリスナー 2020 / 11 / 06 (土) 22：07：29 ID：

悪く思わないでくれよ、お嬢。俺達は面白いものが見たいだけなんだ

どれだけ慕っていても面白い方に引つ張られる。俺達と配信者はそういう関係だ

228：名無しのVリスナー 2020 / 11 / 06 (土) 22：08：11 ID：

お、戦闘開始

???
 2 3 1 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 6 (土) 2 2 : 0 9 : 2 7
 ID :

ヘッドショット刺さった……けど効かねえ！

???
 2 3 3 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 6 (土) 2 2 : 1 0 : 3 7
 ID :

こつからどう勝つつもりなんだ。アズキちゃん様……

???
 2 3 7 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 6 (土) 2 2 : 1 1 : 1 6
 ID :

アズキちゃん様の方の画面見れば勝ち方分かるよ

ヒントは何をエンチャントしてる弓なのか

???
 2 4 2 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 6 (土) 2 2 : 1 2 : 2 4
 ID :

あく……なるほどね。これ壊れた時のための予備の弓とかじゃなくて

???
 2 4 6 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 6 (土) 2 2 : 1 3 : 4 0
 ID :

これ接近戦になった時のダイヤの剣は分かるけど木の剣は何に使うんだ？

2 5 0 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 6 (土) 2 2 : 1 4 : 1 2
 ID :

???

用意できるなら用意できるだけの罫用意するだろうからな

なにかあるんだろう

261:名無しのVリスナー 2020/11/06(土) 22:17:49 ID:

???

がっ……! 負け……! 二つ目の策は使われる事無く……!

290:名無しのVリスナー 2020/11/06(土) 22:22:17 ID:

???

お疲れ様です

早速明日デートか。伸ばし伸ばしにさせない攻めっ気よ

790:名無しのVリスナー 2020/11/07(日) 22:06:17 ID:

???

メアリーちゃんのチャンネルでアズキちゃん様とのコラボ配信

794:名無しのVリスナー 2020/11/07(日) 22:08:11 ID:

???

>>790

生贄の羊が調理される直前か……見てみる

797:名無しのVリスナー 2020/11/07 (日) 22:10:17 ID:

???

メアリーちゃんの家、一緒に眷属が住んでるのか

800:名無しのVリスナー 2020/11/07 (日) 22:11:46 ID:

???

今の「おっぱい触ってみていい？」は見事だわ

眷属の事だと思うじゃん。メアリーちゃん触りましたね。

803:名無しのVリスナー 2020/11/07 (日) 22:12:27 ID:

???

メアリーちゃんは表情が豊かだからセクハラ映えるねえ！

807:名無しのVリスナー 2020/11/07 (日) 22:13:09 ID:

???

怒りのメアリーちゃん。代わりに私のも触っていいですよ攻撃にたじたじ

これができるからアズキちゃん様はつえーんだ

811:名無しのVリスナー 2020/11/07 (日) 22:14:25 ID:

???

挑発に乗ったメアリーちゃん！ 触った！

814：名無しのVリスナー 2020/11/07（日） 22：15：30 ID：

???

アズキちゃん様、色っぽい声を出す。メアリーちゃん、ビビる！

816：名無しのVリスナー 2020/11/07（日） 22：17：01 ID：

???

お嬢でもやっぱりアズキちゃん様の掌の上か……

820：名無しのVリスナー 2020/11/07（日） 22：18：17 ID：

???

お嬢の呼び方で分かるわ。メアリーちゃんって呼んでるのはアズキちゃん様リスナー。新しい獲物に大興奮ってところか

823：名無しのVリスナー 2020/11/07（日） 22：19：22 ID：

???

>>>820

そうだね

チャンネル登録したよかわいいし

もうアズキちゃんの家族みたいなものだからね

???
 8 2 6 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 7 (日) 2 2 : 2 0 : 2 4
 ID :

今までのお嬢とは一味違くなっているだろうな

アズキちゃん様にはそういう「毒」がある

8 2 9 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 7 (日) 2 2 : 2 3 : 1 1
 ID :

???

>> 8 2 6

それが美しい

女性が同性しか愛せなくなる様は素晴らしい

それが我々の求めるてえてえなのですよ

8 3 3 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 7 (日) 2 2 : 2 4 : 2 3
 ID :

???

男に食われるくらいなら女といちゃいちゃしてくれた方がいい

それが真理だ……

9 8 7 : 名無しのVリスナー 2 0 2 0 / 1 1 / 0 7 (日) 2 3 : 3 6 : 1 7
 ID :

???

そろそろ配信終わるってよ

992 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 07 (日) 23 : 37 : 20 ID :
 ???

キスの前にシャワー浴びますか? ってそれもう……

1000 : 名無しのVリスナー 2020 / 11 / 07 (日) 23 : 40 : 19 I

D
 :
 ???

1000ならメアリーちゃん普通のレズ堕ちどころか重度のレズ堕ち

淫欲のくじらサーバー

あの女は危険すぎる。結局帰っていったのは昼頃だ。

朝起きて銀髪の私を見て盛ったアズキはずっと私に女体の素晴らしさを教え込んできた。柔らかく温かい体は私の冷え切った体に染み渡る。結局何が言いたいかというと、だ。

「おっぱいはいいぞ、という事だ」

ちなみに現在配信中。女体の良さを広めている。

『やっぱりお嬢もそっち側に……』

『異性に縁がなくて』

『非処女になって吹っ切れたか』

「男は知らんが、女はもつと女と触れ合うべきだろうな。処女なんていつかは捨てるんだから早めに捨てても問題ない。女同士ならヒートアップしても子供はできないだろう。人間でも安心だ」

いつだったかアズキの事を性欲にまみれた猿のように思ったものだが、今は私も同類だ。あのプレイを味わった今、女性の肉体に溺れたいという欲求がある。

『一人の女がいたとして、その人の処女の血と非処女の身体、どっちが欲しい?』

なんという難しい質問か。吸血鬼としては血を選ぶべきなのだろうが……

「処女の血は味わったことがないから保留だな」

やりたい盛りの学生のような発言も品が無いので誤魔化した。吸血鬼の誇りはまだ残っているのだ。アズキにベッドの上で打ち砕かれたが、欠片くらいはある。

そしてまあ、来るわ来るわ。私とアズキの夜の活動についての話題が。アズキの新しい女として認識され、アズキリスナーが登録していき、チャンネル登録者数ももうすぐ五万だ。

ふざけた話である。ちょっとアズキが私の事を自分の枠で話題に出しただけで四万に近い登録者がポンと湧いてきた。

ともすると、ハイパーチャット、投げ銭、収益化……色んな呼び方があるが、とにかくマネーを得る手段も一緒に手に入ったのである。

最初だから……というのも当然ブースト理由としてあるのだが、リスナーは私のようなレズを求め、レズを受け入れてくれている。その手の話題を出すだけでお金をどんどんと投げてくれる。自己肯定感も半端ではない。

だが、だからといってなんでもかんでも売り払うわけではない。元々は、吸血鬼としての私を求めてくれたリスナーを蔑ろにするほど、落ちぶれてはいないのだ。レズに

なったのは、うん。アズキのせいだし。

「しかし、レズの吸血鬼というのは吸血鬼の祖に近づいた感じすらあるな……カーミラ殿がそういう性癖だろう?」

『殿つて……』

『お嬢、目上の人敬つたの初めてか』

『祖に近づいたからかね。色気出た感じする。それともアズキちゃん様の力かな』

人間は家畜だと思っっているが先輩吸血鬼は別だ。その家畜も女体という利用価値を新しく見出した事で上方修正されている。

「自分で言うのもなんだがね。多少丸くなったとは思うよ。人間の強さを見たからかもしれない。それはそれとしてアズキはいつか倒すが」

『人間の知恵と武器にやられる様はまさしく吸血鬼だった』

『お互いに得意な領域で戦って負けたんだから悔いはないよね』

『アズキちゃん様をライバル視するポジションはハーレムにいなかったから新しいな』

『ユズリハはわりかしライバルだと思う』

いくらでも血を吸える相手がいれば100%吸血鬼の私でアズキを倒せるかもしれないが、それでいいのだろうか。今の私でリベンジしてこそ、という気持ちもある。負けたらまたデートなのだろうか。

デートそのものはいいんだが、夜のアレがものすごい恥ずかしい事させられるのが悔しい。

「意志表明をしたところで、今晚は終わりにしよう。また次の夜に会おう……つと、その前にハイパーチャットしてくれた家畜の名前を読むぞ」

あれあれ団子、竜童、月下……読んでるうちに次から次へと投げ銭が送られてきて止まらない。そうこうしている間に知っている名前が……倉瀬アズキ。文章付きだ。

この後デス子見てください。とのことだがそんなの裏で言えとしか言いようがない。金額は上限値の五万円。金持ってるな。

無事放送も終わり、言われたとおりにデス子を見る。するとそこには一つの招待が送られてきていた。鯖名はくじら。入ってみると、そこには一期生と二期生の名前が並んでいた。

倉瀬アズキ「ようこそ。こんばんは。みんなを紹介したかったので来てもらいました。通話入ってください」

送られてきたチャットの通りに通話に入ってみると、サーバーの参加者は全員通話中だ。

「メアリーさん、こんばんは。今日はよかったですよ」

「死ね」

開幕セクハラ飛ばしてきたぞこの女。喧嘩売ってるのか。

「まあまあ、落ち着いておくれ。妾は内藤ナイン。一期生じゃぞ」

知っている。着物を着ていて、青髪のナイスバディなお姉さんといった格好をした人だ。

「全員一度に覚える必要はないからね。私、汐井レナ。一期生。よろしく」

彼女は3Dモデルを貰ってから桃色髪でロリ巨乳な外見を活かして踊りで人気を集めている。彼女のファンの名称は汐井レナイトだ。

「……まさかここで会うなんてね。私は流石にあなたとここの主目的で会う事はないでしょう。松葉チユリ。一応、あなたの母ってことになる一期生」

お母様。赤髪ロングなストレートの髪形が素敵。主目的ってなんだろう。

「千鶴木ユズリハ、二期生。俺様としてはあんたと気が合うと思うんだよなあ」

銀髪でちよつとガラの悪い少女。イキってて吸血鬼からしてみれば可愛いものだが。

「日真コノエ！ 二期生！ 好きなことはゲーム！ よろしくね！」

元氣いっぱいいの緑髪少女。アズキほどじゃないが、ゲームの腕は確か。それはユズリハもそうなのだが。

「灰音クライネ。二期生……よろしく」

「灰音ナハトム。二期生……ボクのこともよろしく」

黒と白のゴスロリ。灰音クライネ、ナハトム姉妹。配信をいつも二人で行っていて、ズレも感じない事から実の双子じゃないかと言われている。

「ここが一期生、二期生の裏サーバー……通称くじら鯖です」
腹が立つくらいに穏やかな声でアズキが語る。

「なんで五期生の自分が、と思われているかもしれませんが。理由は簡単です。私と一晚を共にしたからです。そして、ここに入っているメンバーは人肌恋しい時、会えないか相談して可能なら女と女の関係を楽しむ場所なんですよ」

何か凄い事言いだしたぞ。

「つまりここは、ちよつとした出会いの場ってことか？」

「そういう事になります。私に抱かれたのを忘れられない皆さんが、私がいなくても欲求不満にならないために考えた運営は黙認のエリアですよ。私も出来る限り皆さんと遊びたいですが、私の身体は一つなので……余る人が出ないようにしたいな、と」

とんでもない話だ。

「ここはその、そんなに使われてるのか」

「はい。実はアバターモエクスって都内在住の人間だけで構成されていますから。会おうと思えば結構簡単に会えるんですよ」

「そうか……じゃあ、もしも今挙手したら誰が相手してくれるんだ？」

まさか、そんな事はあるまいだろうと思いつつも聞いていた。

「妾はよいぞ」

「私もオツケー」

「……母親とそういう事したくないでしょ？」

「俺様もいいで。楽しませてやる」

「日真はもうちよつと仲良くなってから決めたいなあ」

「ナハトムと一緒にいいなら……」

「クライムの言う通り……」

賛成5、反対2。とんでもない話だ。しかもそのうち一つは3Pでやると言う。

「た、例えの話だ。まさかそんな淫乱の集まりだとはな」

慌てて皮肉を返す私を、アズキは僅かに笑い声を口にしながら一つ問いかけてきた。

「なぜここがくじらサーバーだか分かりますか？」

「ん？ いや……」

「鯨の潮吹き。ここにいる皆さんしてるんですよ。動画もあります」

ぞつとした。それはつまり、昨日の夜……

「と、撮つてあるのか？ 私の……その、瞬間のシーンを」

「それどころか、みなさんに共有してありますよ。あ、メアリーさんもこの鯖のチャット欄探してみてくださいね。みなさんの分をメアリーさんも見れないと不公平ですから。」

で、何が言いたいかといいますと」

「あ、ああ……」

「あんなに勢い良く噴いておいて、よく人に淫乱だなんて言えましたね？」

顔から火が出そうだ。まさか、最中に撮影されていたなんて！ 絶句する私に、アズキは続ける。

「そう、ここにいるみなさんは淫乱だ。私も含めて。だから、いいじゃないですか。寂しい時、人を呼んで温め合っても……異性間なら、多くの人がやつてる事です。そして、私達はレズだ。ともなれば、やる事は一つですよ」

「それが……Vtuberグループ、アバターモエクスの裏の顔……？」

「はい。とはいえ、まだ三期生や四期生には手を付けてないです。さすがに黙認されるとはいえ怒られそうだったので……今回はメアリーさんと絡むいい機会だったから利用させていただきました」

興味があった。アズキ以外の女体も味わってみたいという欲求が。女同士の触れ合いには尊さすら感じている。だが。

「わ、私はV t t u b e rだからな。それも吸血鬼。だから、夜はどうしても忙しい」「オフロボしますか？ それか、休日だけとか」

逃げ道が塞がれている。私の言い訳がどんどん通用しなくなっていく、やりたいという欲望が前へ前へと現れてしまう。

「アバターモエクスに入る前から思っていた。一期生と二期生は仲がいいなど。身体の関係があるからだったんだな……」

「そういうことです。そして、メアリーさん。今日から貴女もその仲間ですよ……」
その囁きに私は心を震えさせ、後戻りのできない一言を言ってしまった。

「ナハトム、クライム。さ、3Pさせてほしい」

私は、私の知らない幸せな体験をしたいと願ってしまう。

「いいよ……」

「はじめての相手、どきどきするね……」

興奮でくらくらする私に、アズキは正当化するかのように声をかけてくる。

「これでアバターモエクス間の仲はもっと深まりますよ……」

ああ、それはいい事だ。

私は家に灰音姉妹を呼ぶことを決めた。

ASMRの双子

「灰音姉妹。リアルでの苗字を双神と言うのだが、彼女達と最寄りの駅で待ち合わせをしている。というかそのためにリアルの名前を教えてもらった。見た目が活動中そのまま私というVの名前で呼び合ってたら正体がバレバレだ。」

「メアリーちゃん……」

「ついたよ……」

合流すると同時に頬の左右にキスをくれた二人が双神姉妹。夜子と朝子だ。しかし……どつちがどつちだ？

「私、夜子……」

右手を上げる、黒ゴスロリの少女。とはいえ、V t u b e rとしての立ち絵とは違うデザイン。

「ボク、朝子……」

左手を上げる、白ゴスロリの少女。こちらはまさかのアルビノ。白い髪がまぶしい。真っ黒と真っ白、相対的な二人だというのは配信と同じだ。

「顔もそっくりだな。本当の双子か？」

二人は同時に頷き、順番に話していく。

「服じゃなくて……」

「髪で覚えてね……」

「じやないと……」

ハモつて見せて、私の両耳にそれぞれぴったりと張り付き。

「脱がした時分からなくなるでしょ……？」

そう囁いて私を震えさせた。彼女達の得意なA S M Rだ。

「あ、ああ。そうだな。間違えるのは失礼だ」

レズになりたての私には刺激が強すぎる。これが二期生の本気か。

たまらず視線を逸らせば二人の手には大荷物。

「荷物が多いが、それは一体？」

「私は二人分のお泊りセット……」

「ボクはマイク……」

ふむ。私よりは僅かに大きいとはいえ、世間一般では小柄な方に入る彼女達にそんな荷物をいつまでも持たせてもいいものか。人外故の怪力を持つ私が代わりに持つてやるべきじゃないかと思い、提案したのだが断られた。

「それよりも……」

「手を繋ぎましょう……？」

そう言つて差し出された二つの手を握り、私は三人で横一列になりながら自宅へと彼女達を連れ込んだのだ。ちなみに語つてなかったが眷属も常に後ろからついてきている。こいつ本当喋らん。

それで荷物を置いた二人と配信時間まで遊ぼうかと思つたのだが、彼女達の遊ぶとはあの事だったのである。寝室を案内させられて、二人は服を脱いでいく。

「蕩けさせてあげる……」

「愛してあげる……」

朝から会おうつて言われておかしいと思つたが、まさか配信時間までずつと弄ばれるとは思ひもしなかつた。両サイドから四本の腕が私を快楽に誘ひ、突起した部分はすっかり感度を上げられ調教済みだ。今度眷属とブラ買いに行かないといけないくらい。でも凄いい良かった。腕枕した両腕の中で甲斐甲斐しく私を楽しませてくれたのは幸せ。キスもめちやくちやしてくれたし。

そんな訳で、配信時間だ。

朝子の持つてきたマネキンの頭部のようなASMR用のバイノーラルマイクを設置して今日の配信がスタートする。というか現実世界で配信するの久しぶりだな。こつちでやつてる間、眷属がイラストの仕事できないんだよ。だからといってリアルの人間

の双神姉妹は電脳空間に入れられない。

「トリックオアブラッド。トリオ・ザ・ハロウインのブラッディ・メアリーだ。ごきげんよう家畜達。今日はゲストが二人来てくれているぞ」

「灰音クライネ……よろしく」

「灰音ナハトム……よろしく」

『こんヴァンパイア。お嬢の声が耳に響く』

『片耳ずつから双子ちゃんの囁き声がする。耳が幸せ』

『これマイク双子ちゃんの持つてるやつだな』

『珍しい組み合わせだけどなんなん？』

当然、そんな質問も出るだろうとは思っていた。当たり障りのない答えを用意してある。本当の事は当たり前だが言えるわけがない。3Pしたくなって相手連れてきただけです、なんて。

「アズキがこの前、一期生と二期生の皆を紹介してくれてな。そこで、私のしようと思っている配信の中には無かったA S M R配信をしている二人に興味を持った。それだけだよ」

『二期生二期生、三期生四期生の間には壁があつたのに一足飛びで五期生のお嬢が紹介されたのか』

『アズキちゃんの方もお嬢気に入ってるみたいだったしなー』

『新しいタイプの配信に興味持ってえらい』

『双子ちゃんも協力的で優しい。好き』

『好きって言ってくれてる人がいるよ、ナハトム……』

『私達も視聴者さんの事好きだよね、クライネ……』

『「そう、私達は視聴者さんの事が好き」』

ハモリ、両耳の形をしたマイクの左右から囁く。その威力にコメント欄のリスナーはメロメロだ。この手管は長くやってきただけあつて上手いなと感心してしまう。

「メアリーちゃんも好き……」

「妹みたいで好き……」

こつちに矛先が向いてきた。さつきベッドの中でやられたASMR攻撃を思い出して俯いてしまう。

「照れてるの……っ？」

「かわいいね……」

「メアリーちゃんはかわいい」

配信中だ。私に向けてやっても仕方ないとは分かっているけど、リスナーに向けてその言葉を発してサービスしてみせるのはなんとなく心にもやっとしたものが残る。

そしてそんな私のご機嫌をとるかのように、二人は会話の合間を縫って頬にキスをしてきた。小悪魔的だ。

「今日はメアリーちゃんがASMRに挑戦するよ……」

「喋る内容、考えてきてねって言っておいたから……」

そう、昨日の夜リスナーに向けて囁く言葉を考えておいて欲しいと言われたのだ。当日一緒に考えない理由が分かったわ。その時間を使って私で遊びたかったからだ。

「じゃあ、始めるぞ……」

息を一つ吸い、出来る限り穏やかに、右耳に囁くように言葉を紡ぎ始める。

「ごきげんよう、家畜……眠れないのか？ 仕方のないやつだ……私が一緒にいてやろう。なあに、夜は吸血鬼の時間だ。少しくらい貴様に割いたところで、時間はたっぷりある……」

沈黙。自分のマントでバイノーラルマイクを仰ぎ、環境音を出す。そして、左耳のマイクに近づいて言葉を続ける。

「ああ、すまないな……少し、姿勢を変えた。こっちの方が……私を身近に感じられるだろう……？」

普段の配信では絶対やらない、優しい声だ。吸血鬼らしい強さは、そこには一切無かった。ただ、少し尊大なだけの少女としての一面。

「おやすみ、家畜……よい夢を見る事だ……」

以上で終了。コメントでも見るか。

『Zzz……』

『幸せだ』

『バブみを感じる』

「いつまでも寝ているな家畜共。さっさと起きろ」

ぼんやりしているリスナーに普段の調子で語りかける。いつまでも甘えられてはたまらない。

『なんだ夢か』

『お嬢があんな優しいわけないもんな』

『でもいい夢だったよ』

好評ではあつたらしい。あんなんやって好評じゃなかったら腹立たしささえあつただろう。

「とつてもよかった……」

「環境音もやるのいい……」

ASMRを得意としている二人にも褒めてもらえるのは嬉しいものだ。

「他にもやってほしいものがある……」

『お嬢分かっててやってるな!』

当たり前だろう。さて、オチもついたし配信もそろそろにするか。

「今日はここまで。良い夢を見る事だ、家畜共。今日の配信、お相手はブラッディ・メアリーと」

「灰音クライネと……」

「灰音ナハトムでした……」

「じゃあね(な)」

配信を切った。パソコンは眷属に返して早速仕事の続きをやらせる。

そして私達は寝る時間だ、と思ったのだが……

「メアリーちゃん、愛されるだけじゃダメ……」

「愛し方も、覚えて……?」

という二人の誘惑により、私が掛け算の左側も挑戦する事になったのだ。やり方が下手だと身をもって触り方を教えられる。

結局二人を満足させるまで、一晩丸ごとかかったのだ。

コラボビッチ（コラボだけじゃない）

灰音姉妹との記念写真や動画はくじらサーバーにデス子に上げて共有した。もちろん肌色要素の多いやつだ。私の眼を通して脳内スマホで写真や動画を撮影できるので、ベストショット取り放題。汗噴かせた瞬間もばっちりだ。

味も良かったし、吸血鬼的にも満足のいく食事になった。女性の汁吸って生きていくか。同じ体液だし実質吸血鬼らしいだろう。

それはそれとして、くじらサーバーでおかず集めをして気付いた事がある。私ほどじゃないが皆、立ち絵とリアルがある程度似ている。一番違うのが汐井レナというロリ巨乳の3Dダンス配信者で、実際は貧乳だ。でもストリップしてる様子は色気と背徳感たっぷりだった。彼女も見た目ロリだからな。胸が無いから余計に。

あとは倉瀬アズキか。彼女は逆に、実際はメカクレロリ巨乳なのに立ち絵が貧乳だ。この二人の胸のサイズ感だけ違うのはなんなのか。実際に聞いてみた。

「おっぱいを揺らすとね、お金が入るの」

「お金」

くじらサーバーでレナに聞いてみると、その理由はシンプルだった。

「そ。ダンスするならぶるんぶるん揺れてた方が視聴者にウケるのよ。3D配信やる前から、胸がでかいつてだけでちやほやされてたしね。で、一期生は妾口調の内藤ナインと貴女のお母さんの松葉チユリ、うちの諸悪の根源、倉瀬アズキのみんな胸大きかったから私まで大きくしちゃうとバランス悪かったのよね。そしたらアズキが自分の立ち絵は胸小さくていいですよって言ってくれて交換したの」

あの頃はアズキがいいやつだと思っていたわあ……などとしみじみと語っている。

「私はね、数字が増えるのが好きなの。動画再生数、チャンネル登録者数、同時視聴者数、ハイパーチャット……自分の努力で数字が増えるのは活力になるわ。自分が頑張った証だもの。」

数字そのものも好きだけどね。幼稚園児の頃、寝かされて暗い部屋の中、じっと待つてると実家のデジタル時計が一つ数字が進むのが嬉しくて、徹夜で見てたことがあるくらいだよ」

それはまた筋金入りだ。だが、他のV t u b e rと競い合うなら彼女くらいにハングリーさが必要なのもかもしれない。特にVが流行し始めた黎明期を生き抜いてきた彼女達一期生なら猶更。

彼女の数字への渴望が実際に形になっている確かな一面もある。レナはアズキに次いで一期生二番目の登録者数を誇っているのだから。

「で、どうする？ 私ともやる？」

「ぜひお願いしたい。そうすると、どっちの家に行くかだが……」

「ラブホでも良くない？」

もつともな意見だ。だが、私には譲れない部分がある。

「配信はしたいんだ。毎日配信を心がけている」

「インターネット繋がってるラブホもあるでしょ」

詳しいな……こういうところに経験値の違いが見え隠れしてくる。

「な、なるほど。じゃあそこにしよう」

「私がノートパソコン持ってるから、メアリーには準備しておいてもらいたいものがあるのよ」

「なんだろうか」

マイクとかだろうか。

「百円玉。できるだけ多く」

「そんなもの何に使うんだ？」

「私がいさせるたびに百円頂戴。ラブホ代は私が持つから」

守銭奴！ いや違う。そうだとしたらラブホ代を払うなんて言う訳がない。

「それに何の意味が……」

「言つたでしょ？ 私、数字が好きなの。やればやるほどお金が搾り取れると思うと燃えるのよ」

プレイの一環だったか。色んな性癖があるものだ。

「用意しよう。どのくらいあればいい」

「んー、一万くらい？」

百回イカせる宣言に等しい発言に、私の心は期待と不安の荒波に飲み込まれるのだつた。

ラブホに謎の力を入れなくて不審がられたわ。そういや吸血鬼にそんな制限あったな。いつからラブホはロリを強制的に排除する仕組み出来たのかと思つた。思えばいつだったかコンビニでも同じことあつたし。レナに中から招いてもらつてなんとかなつた。

「トリックオアブラッド。トリオ・ザ・ハロウインのブラッディ・メアリーだ。ごきげんよう、家畜共。今日もゲストが来ているぞ」

「はあい、汐井レナイト達。今日もよろしくね♪ みんなのダンサー、汐井レナよ。それにしてもこんな短期間でアズキ、クライネ、ナハトム、私と連続でコラボするなんて、メアリーはコラボビッチね！」

『いや草』

『ストレートすぎる』

『ちよつと思つたけどもw』

コラボビッチどころか、普通にやることやってるしシンプルにビッチなんだが……しかしそれはレナも分かっていることだろう。

「人聞きの悪い事を言うな。それに吸血鬼の私からすれば人間なんて家畜みたいなものだ。家畜相手に性欲が湧くか？」

強がりだ。すでに私は配信で女体の良さを語っている。だが、それを聞いたレナは悪戯っぽく笑う。

「ふーん……一緒にラブホにいるのにな？」

爆弾落としてきたぞこいつ。

『たしかに配信中の音の反響が違う。普段とは別の部屋だ』

『あらあらうふふ』

『アズキちゃん様以外の女と……ビッチじゃないか』

どう取捨をつけたものか。というかアズキはどうなんだ、あいつは普通に複数の女をモノにしているのに許されてるのか？ ファンもなんとなく知ってるんだろう？

『なるほどね、第二のアズキちゃん様ってわけだ』

『双子ちゃんともやったのかな。やったよな』

『吸血鬼のお食事タイム。興味があります』

あれと同類扱いだよ最悪だ。いやまあ、性欲に流されてるのは事実なんだけど、他の一期生二期生も本当は同じようなものなのにあ。

「まあ、今日はダンスを教えてあげようと思つて五月蠅くなつてもいいところを選んだんだけど。歩き方で分かるけど、メアリーはスポーツやった事ほとんどないでしょ」

話を変えてくれた。お前ほんとやめろよなと言いたくなる。

「あ、ああ……学生の頃、体育くらいだ」

「足の裏全体で歩いてる。爪先に体重乗せて、膝で衝撃を吸収。見ててね」

そういうとレナはジャンプして……音もせずに静かに着地した。

「これが出来るようになると最低限、運動する時に便利よ。爪先と膝、腰を使った体重移動は基本中の基本だから」

「なるほど。しかしなんでこんな事を教えてくれるんだ？」

「夜の腰使いの方がよかつた？ それは配信の後でね……♪」

分かつた。こういう『匂わせ』が彼女のファンサービスなのだ。アズキが、いやアバターモエクス全体がやっているのと同じように、女の子同士の仲の良さをアピールする手段。それが過激なのだろう。

ファンは常に刺激を求めている。それに答えるのは劇薬で、一度使えばもう弱い薬は使えない。常に激しくしていくしかないのだ。それをせずついにいられるのは、常に一定のラインを保ち続けることの出来るバランス感覚の良い者だけ。

「後はこういう練習方法で……」

地面を斜め横になぞって進み、角度を変えてまた進む彼女を見て、私も真似をする。すこしやつただけじゃ効果は無いかもしれないが、こういう普段やらない事を体験しているというコンテンツになる。私はどこまで行っても配信者なのだ。電腦吸血鬼ブラッディ・メアリーはそういう設定で作られた。

「ま、この練習ダンスじゃなくてバスケだけだね」

「おい」

オチもきつちり用意してくれてた。

「と、いう事で今日はこの辺りでお開きだ。家畜諸君、良い夢を。お相手はブラッディ・メアリーと」

「汐井レナでした。この後、メアリーとベッドの中で遊びます」

それは本当の事だろう。意外と百合営業と見られて本気だとは思われないのか？

配信を切った。するとレナはベッドの上で立ち上がる。

「それじゃあ次に教えるのは……えっちな服の脱ぎ方」

そう言つて、レナは観客が私だけのストリップショーを見せてくれた。私はそれを目に焼き付け、脳内スマホにも録画した。あとでくじらサーバーにもアップしなければ。ベッドの中で抱き合つた私達はぴったりと寄り添つた。ああ、貧乳同士で抱き合うと、こんなにも顔が近い——双子姉妹のせいで敏感になつた先っぽ同士でキスをしながら、そんな事を想う。

翌日、解散して帰宅後にくじらサーバーに互いの痴態をアップしていると、アズキから通話に入つて欲しいと連絡が入つたので今回の成果である画像と動画をアップロードし終えてから通話する。

「いやあ、お盛んですね」

「嫌味が目的なら切るぞ」

「そういうわけじゃないですよ。ただ、この調子なら一期生と二期生全員とコラボも夢じゃないなと思ひまして」

ヤれる奴とヤつてるからそういう事になる。

「ですのでいつそ、メアリーさんは三期生や四期生にも手を出してみたらどうですか？」

「……それは、まだ純情な少女達を毒牙にかけろということか」

「どうでしょう。ただ……全員とコラボを目指しているともなれば、貴方を好いていな

「い方も近寄らざるを得ないんじゃないですか？」

「一体誰の事を言っているのか。はつきり言って欲しい。」

「松葉チヨリさん。お母さんとコラボしてみたいと思いませんか。そこに、性的な理由があるにしろないにしろ」

それは、魅力的だ。もしかしたらコラボをしてみたら私の印象が変わって、どちらかといえば嫌いという扱いを脱却して、私を好いてくれるかもしれない。

「まあ、男の方々とコラボするかは任せますけどね。個人的にはそこまでする必要は感じません。どうするかはメアリーさん次第と言うことで」

ダー・バーテンは一度会ったことがあるが悪い奴ではなかった。しかし、そうするとサイバともコラボしないといけない空気はある。

別にサイバが嫌というわけでもないが……気まずさは感じる。なんせトリオ・ザ・ハロウインを結成して露骨に余所者扱いした相手だ。

男とコラボする事を視聴者が望まないというのもあるだろうが、どうしたものか。

お母様を説得するなら、全員とコラボ目指してまずと言えるようにコラボするべきなのだろうか……お母様次第と言ったところか。

「悩んでいるようですね。では、男を入れるかどうかは別として目標アバターモエクス
の全員とコラボ、狙ってみますか？」

「ああ、やってみる。性的な関係になるかどうかは別だぞ」

「そこはメアリーさんの性欲の赴くままに……」

それやれって言うてるだろ。

「ただ、くじらサーバーには誘わんぞ」

「そうですね。それはやめてください。ここはあくまで私の前で鯨の真似をしてくれた面々を集めてるだけですから」

部屋に出来た染みを思い出し、私は赤面した。

番外「ミス・パンプキンのある日の配信」

「トリックオアトリック。トリオ・ザ・ハロウインのミス・パンプキンだよー。この前ねー、見ちゃった。他のモエクスの人配信で『お前頭パンプキンか？』って言ってる人。お前なー、あれよ。頭にカボチャつけてるようなやつと同じだって言ってるんだぞ？ 侮辱にもほどがあるだろ」

『いや草』

『自虐していくう』

『お前はそれでいいのか』

「だからね、私は考えたい。人に使って許されるレベルの罵倒を」

配信画面の下枠いっぱい、人に使って許されるレベルの罵倒を考えると表示される。

『自然な導入』

『今回のトークテーマか』

「関西とかではね、アホは結構手軽に使われてるって聞くんだよね。でも関東の方ではそうじゃないじゃん？ だからね、どこでも使って許されるものが欲しい」

『この配信見たリスナーがそこかしこで使う未来が見える』

『そんなのがあったら広まるだろうな』

「あー、待つて。言い方が悪かった。私の持ちネタが欲しいくらいの意味で捉えて」

画面下の文字に追記で（私の持ちネタ）と追記される。

『りよ』

『しかたないにやあ……』

『なんかこう丁寧に言えばいいんじゃない？ 頭くるくるパーさんみたいなの』

「それ多分くるくるが無駄に強いんだよな。頭パーさんかよ、くらいなら優しいかも」

『パーさん is 誰ってなるぞ言われた方』

『なんか人名見たいんだよな』

『頭ダーさんかよ』

「待て待て先輩を持ち出すな。あ、触れない方がよかったか」

『ダーさんだからなあ』

『実はまともって人だったのも今は昔』

『サイバとくだらねー配信するようになったちゃってまあ』

「あーあー、いいよもう私じゃなくて他の男がいいのね！ 嫉妬しちゃう！」

『そんな喋り方じゃないだろお前』

『ヴォエー!』

『しなを作るな気持ち悪い』

「だったら他の人じゃなくて私を見ろよなー。この美しいカボチャ、旨そうだろう?」

『いつみても馬鹿みてえ』

『お姉さんハロウインはもう終わってますよ』

『正直身体の方が美味しそ（ry）』

「旨そうって言えばさ、この前タコ焼き食べたんだよ。つまようじでぶすつと刺して。それでまあ、つまようじつてのはバランスが悪い! なにせ一本しか支えがないもんだからさ。そしたらたこ焼きの皮だけがべろつと剥がれて熱々の中身がぼろつと落ちて足元にべちやつと……悲鳴をあげたね」

『ひえっ』

『地獄じゃん』

『生地だからべとついているのが性質悪い』

「バランスが悪いと言ったらあれだな、バランスポール。知ってる? 円柱状の固めのスポンジみたいなやつで、背中に押し当てて使うんだけど、それやっていると腰とかにいらしくてさ。配信してるとどうしても座りっぱなしじゃない。買ってみたの。背中に押し当ててゴロゴロしてたんだけど、油断してたらすってんころりん。むしろ腰痛め

たわ」

『今日びすつてんころりんとか聞かんが』

『お前はおむすびか』

『カボチャだけだな』

「配信と言えばさ」

『始まったぞパンプキン名物』

『マジカルストロベリー方式トーク』

『○○と言ったら××、××と言ったら……で無限にトークするやつ』

「いいだろ好きに話させろよう。で、配信と言えばフネちゃんね。毎日ビーベックスやってるじゃん？ 負けず嫌いだよね。たぶんアズキさんに負けたのがさうとう悔しかったんだろうね。私は相手が凄すぎてまた勝負しようって気にもなれないや。やっぱりそういう向上心ってやつが強くなる秘訣なんだろうなあ。もう私はそういうのしぱらくいいかな。あ、コラボ自体はしたいね。メアリーちゃんとも一緒にね」

『たしかにまた見たい』

『メアリーちゃん上手くなってるといいね』

『お嬢は今コラボで忙しいから……』

「で、向上心と言えばさ」

『この流れで話題メアリーちゃんじゃないんかい』

『話題変幻自在すぎて草』

『そこは同期を優先してもろて』

「ああ、そっか。そうだよね！ いや話に夢中になると何も考えてないからさあ」

『雑談で無我の境地に達するな』

『雑なトークするなし』

『頭。パンプキンかよ』

「私の頭はどう見たってパンプキンだろうが！」

『草』

『残念ながら当然』

『形のいいカボチャですよね』

「で、なんだっけ。そうそうメアリーちゃんね。最近コラボめっちゃしてるね。そういうのあんまり興味ない娘だと思ってたから意外」

『面子が面子だから邪推するわ』

『双子とかレナちゃんとかだからヤってるってやつね。夢がある話だ』

『アズキちゃん様とは明らかにヤっただろうけど、他のメンバーともってのはありよりのあり』

「あー、やめやめ。そういう話は無し。って言いたいところだけど、メアリーちゃんといちやいちゃしたくはあるよね、私も。私ロリコンだから。同期二人がロリで歓喜した」

『やはりお前もアバターモエクスの一員だった』

『二人とも逃げて』

『同期二人つて露骨にハブったのがいるな……』

「言ってもキスくらい、キスくらいだから！ ガチでやり合うのは犯罪臭いというか……」

『その頭でキスするの？』

『初めてのキスはカボチャ味』

『頭のそれ外してもろて』

「あー……これは外せないからなー。膝に乗せるくらいにしとくか。幼女つて体温高いから乗せてるだけでも幸せになるよね」

『ハイ、ポリスメン？』

『なんでそんなこと知ってるの』

『やべーやつだわ』

「ち、違うよ親戚の娘だよ！ さすがにね、その辺は。ちゃんと」

『焦るとガチっぽくなるからやめろ』

『そーいやお嬢は体温低いってか冷たいらしいよね』

『その頭って結局外ささないの？ 外せないの？ 呪いの南瓜なの？』

「この頭に関してには秘密です。謎が多い女、ミス・パンプキンである」

『謎が多い（雑談で私生活ポロポロ話す）』

『謎が多い（飲酒配信で昔の職場について愚痴る）』

『謎が多い（カボチャ頭のくせにトーク内容は料理の話が多い。どっから食ってんだ）』

「やめろよう、ロジックで追い詰めてくるのはやめろよう。まあ、そんな話は置いといて」

『でた、伝家の宝刀』

『そのまま置いておかれた話は数知れず』

『置きっぱなしの話多すぎて部屋汚そう』

「私の部屋、私がどう使おうが勝手じゃろがい！ それはそうと、部屋片づけるときのコツはとにかく手を動かすことだね。効率とか考えてるより、むしろその時間で手を動かしてた方がいい」

『なるほど』

『一理ある』

『突然まともな事言わないでもろて』

「片づけに関しては一過言あるからね私は。なんせ部屋汚くする事多いからさ」
『結局汚いのか』

『解釈一致』

『それでこそパンプキン』

「私のイメージはどうなってるんだ……できるお姉さんじゃないのか……」

『は?』

『調子に乗るな』

『ことある毎に失敗エピソード語ってよく言える。その引き出しの量やばいぞ』

「ちくしよう……悔しい……結婚したい……。バブみを感じれるロリっ子と結婚して

養ってもらいたい……」

『駄目なロリコン』

『性癖駄々洩れお姉さん』

『でもその気持ち分かる……』

「ちくしよう! というかもう時間だよ! 今回もまたトークテーマ無駄になった!

これ考えるの苦勞してんのに!」

『二回目からもうネタ切れでリスナーからテーマ募集した女とは思えん浪費』

『マジカルストロベリー方式やるための最初のお題に過ぎない』

『そのスタイルで会話途切れんのはすげえと素直に思うよ』

「それじゃあみんな、よかつたら次はメアリーちゃんとの配信見てね！ よろしく、バイバイ！」

そうしてミス・パンプキンの配信は終わりを告げた。

アバターモエクス五期生ミス・パンプキン。その所属しているユニット、トリオ・ザ・ハロウィンにおいてリレー配信二番目という繋ぎのポジションを預かる彼女は今日もこうして雑談で場を繋ぐのだ。

視聴者にいじられつつも彼女はいつも喜怒哀楽をはつきりと表現し、その明るさで視聴者を引き付けている。

たまに昔の職場についてなんとなく話す彼女が平凡とは違う人生を歩んできた事は視聴者もなんとなく分かっている。それでも構わない。視聴者が見ているのはカボチャ頭の変人、ミス・パンプキン。過去の彼女ではないのだから。

ただ、彼女の素顔を知る者がいないのは事実だ……カボチャ頭だけに。

チヤンネル登録者数五万人記念凸待ち企画（前）

さて、気合を見せるところだ。お母様にアバターモエクス全員とコラボしようと思っているのだけれど、その企画を立てたらお母様は来てくれるのかと問わねばならない。そして、その全員に男二人も含めるべきか、外すべきか。

デス子のダイレクトメッセージ機能でお母様に連絡を取る。

「お母様、アバターモエクス全員とコラボするって言ったら私が嫌いでもコラボしてくれるかな？」

そう送って少し待つと、すぐにチャットの返事が来た。

「アズキから聞いたわ。そうね、トリを飾ってあげる」

それは逆に言えば、最後まで会える事は無いという事だ。残念がつっているとチャットの続きが届けられる。

「あと、男二人ともコラボなさい。それがちゃんとした全員というものよ」

そこまでアズキは話していたか。説明の手間は無いが、お母様には私から話したかったという欲もある。

「同期の男と仲悪いんでしょ。だったら、初めて母親らしい事を言うわ」

それは楽しみだ。きちんと娘と認められた気分になり、心が温かくなる。その気分のまま、チャットが届くのを待つ。

「喧嘩したなら、仲直りしなさい。以上」

それつきり、お母様からの返事は無かった。そして、彼女から送られた言葉は、どこまでも正論だった。負い目を感じているからと言って、いつまでもそのまま疎遠という訳にはいかない。我々は一応同じグループに所属している仲間なのだ。こんな状況で仲間だなんて言葉は浅いのだろうが、形式上はそうなのである。

そして、考えねばならない事は他にもある。私のチャンネル登録者数が五万人を超えた。ほとんどアズキの力な気もするが……なんにしろ、見てくれている人がそれだけ増えたのは嬉しい限りだ。そして、配信者としては記念配信をするべきなのだ。祝えるところは祝う。そういうハレの日というのは盛り上がる。そして、今回考えている内容は、凸待ち配信だ。

もちろん、ここで初めて会う人が来たからと言ってコラボに含めるつもりはない。単純に私も対人経験が増えたのでそういうものをやってもいいかなと考えたのだ。増えた経験はそれだけじゃない気もするが。

なんにしろ、アバターモエクス全体のチャット欄に、その旨を記載しておく。

そして、アバターモエクス全員とコラボするという企画は運営から許可が出た。元々

誰とコラボしちやいけないとか無かったしな。

アズキは三期生や四期生と運営の企画とかでもない限り個人的に触れ合わない線引きをしていたみたいだから、コラボ縛ってたみたいなものか。それくらいだろう。

それで、チャンネル登録者数五万人記念配信の予定日まで通常配信を行い、夜中も散歩しているとたまにリスナーだという人間に声をかけられるようになった。今私は、実際に会う事の出来る *V t u b e r* として少々話題になっている。

しかし、そうともなれば運営も黙っていない。今まで吸血鬼なんてありえないとしていた彼らも、実際の目撃証言がネットに上げられればこれはおかしい、となりえる。現実に存在しないはずの吸血鬼と話をして本当の所を確かめねばならないとその重い腰を上げたのだ。

人数も多くなって放任主義なところがあるとはいえ遅かったな。そして記念配信の後日でいいから来るように、と緩い。

よって、私の予定は十一月の二十一日にチャンネル登録者数五万人記念配信を行い、二十三日にアバターモエクスを所有している本社、アバターメイカーへ向かう事になったのだ。

そして、記念配信当日……私は眷属と一緒に電脳空間で配信時間を待ちながら、ワイングラスに輸血パックの血液を注がせていた。

そう、眷属を電腦空間に出し入れできるようになったのだ。女性の汁を啜って力を得た事が理由だろう。あの汁には血液と同じように人間の情報が含まれている。私のような電腦吸血鬼はそれを糧にする。

センベイで来ていたのだ。輸血パック描いてそれ飲めば？と。盲点だった。やってみると、まあ味が旨い。これが本当の血液の味か……としみじみしたものだ。この方法で作った血液には人間の情報が含まれていない。誰のものでもないからだ。よつて、吸血鬼としての力はそこまで大幅には回復しないが、味だけはいいというおやつみたいな感覚だ。それでも血液を飲んだという事実により解禁された能力もあるのだが——時間だ。配信を開始しよう。

「トリックオアブラッド。トリオ・ザ・ハロウインのブラッディ・メアリーだ。本日は私の記念配信に来てくれてありがとう家畜ども」

そう言うとは私はワイングラスを掲げ、口をつけた。

『お嬢五万人おめでとう』

『こんヴァンパイア』

『コラボ続きで得た偽りの数字で嬉しいか？』

「さて、今日は凸待ち配信だ。皆に私の事を祝ってもらう形になる。——む、さつそく来たな」

ポコポン、ポコポンというデス子の通話が繋がる音が響く。最初の一人は。

「こんヴァンパイア」

「おい」

この手のふざけ方をする知り合いを私は一人しか知らない。彼女の立ち絵を用意する。

「トリックオアトリック。トリオ・ザ・ハロウインのミス・パンプキンだよ。メアリーちゃん、五万人突破おめでとー」

「ああ、ありがとうパンプキン」

『パンプキン！』

『ユニットの仲間きちや』

『こんヴァンパイア絶対に流行らすな』

「でもこんヴァンパイアいいよね。私もこんばんプキンとか言ってみるかな」

『便乗しないでもろて』

『夜しか使えないけどいいんでない』

『それ言ったらこんヴァンパイアも夜だけだし』

『昼はお嬢配信しないけどな』

「まあ、挨拶くらい好きに言うがいいさ。しかしこうして二人で話すのは珍しいんじゃない

ないか?」

「確かにねえ。話するときはいつも大体三人一緒だし。そういやカボチャ好き?」
「なんなんだ突然。人間だった頃はともかく、今は食わんよ。吸血鬼だからな」

今でも食べられなくはないのだが、栄養にもなりはしないので無駄でしかない。味覚も人間の頃のそれとは別物だ。

『直前の配信で考えてきた渾身の会話デッキ、カボチャ』

『言われた方は大体はあ? ってなること請け合い』

「人間だった頃はどうかのよ」

「味は嫌いではないが……皮が固くて自分で調理するのは面倒だと思った」

「わかる。私もこれ頭のやつくり抜くのは面倒で眼と口のところは塗ってるわ。どうやって前見てるのかって? 言わせんな恥ずかしい」

『何が恥ずかしいんだこいつ』

『パンプキンにフリートークをやらせるな。終わらんぞ』

『凸待ち一人で終わる危険すらある』

視聴者が危惧した通り、彼女は喋りまくった。雑談配信で鍛えられた彼女のトークを止められるものはいないかと思われたが、デス子の通話に入ってくる効果音が話を遮った。

「パンプキン、オマエ、ふぎけんなの。次はフネの番なの。いつまで待たせるつもりなの？」

「おー、フネちゃん済まない済まない。盛り上がっちゃってねえ」

「盛り上がってたのはパンプキンだけなの。ユニットとはいえ自卒のノリではしゃぐんじやないの。あ、視聴者の皆さんトリックオアトリートなの。トリオ・ザ・ハロウインのゴースト・フネなの。今日はメアリーおめでどうの日なの。めでたいの」

『トリオ・ザ・ハロウイン揃った！』

『南無阿弥陀仏！（挨拶）』

『フネちゃんに溺れ隊ここに参上！』

この二人はボケとツツコミがはつきりしていいコンビなんだよな……などとしみじみ思ったのでそう口にする。

「フネ達はコンビじゃなくてトリオなの」

というありがたい言葉が返ってきた。それはそれとして。

「だが、パンプキンがロリコンでフネが年上好きだろう？ どうなんだ、そういう対象として相手を見れるのか？」

「駄目なの。ユニット間でそういう関係になるとメンバー間でぎくしゃくするの。でも、メアリーも一応年上みたいなんなの。ストライクゾーンにギリギリ入れてやる

の」

「私はフネちゃん好きだよ。かわいいし。メアリーちゃんもロリくて好き」

褒められてるのが、それは。というか私中心に三角関係みたいになるのはやめてほしい。でもそういう仲の良さが欲しくて彼女達もアバターモエクスに入ったんだろうしな。

「そういうメアリーはどうなの。二人のうちどっちが好きなの？」

「選んでよ！ 私とこの女どっちが好きなの!？」

パンプキン、修羅場を作るのはやめろ。

「私は吸血鬼だぞ？ 幽霊もカボチャも血が吸えない。仲間ではあるがその点ではお前達は家畜にさえ劣る」

『厳しすぎて草』

『両方ごめんなさいされてるw』

フネは可愛いし、パンプキンも身体が良い。どちらかを選ぶのは角が立つし、かといって両方と正直に言うのも憚られた。身体が良いは酷いだろ。

「はーなの。吸血鬼はむっつりだから素直になれないの」

「おい。誰がむっつりだ」

「素直になれないお年頃ってやつかー、可愛いねえ」

言いたい放題だ。まあ、実際そうなのだが。

『性癖に関してはオーブンだけだな』

『おっぱい好きだつて配信中言つてたもんな』

『なぜかたまーに意地張つてそういうの興味ないつて顔するんだよな』

コメントも彼女達の援護射撃に回る。なんとということだ。今日の主役を労わる気がさらさらないな。盛り上がつてくれるならそれでいいんだが。

「雰囲気が良くないのでそろそろ二人にはお帰りいただくか……」

「凶星を突かれたからつて強権を振るうのはよくないのー」

「ツンデレだー、ツンデレだー」

まったく腹立たしい……彼女達もVの皮を剥けばただの人間だ。その人間達にいいように言い負かされるのは吸血鬼の沽券に関わる。そうだと分かつていても、こうして二人と話していると心が安らいでしまう。

「知つた事か。帰れ。最後になにか宣伝したいことがあればそれだけ言つて帰れ」

「トリオ・ザ・ハロウィン、一番手のフネは二十時から配信してるの。良ければ見てつて欲しいの〜」

「トリオ・ザ・ハロウィン、二番手のパンプキン。二十一時から配信して二十二時からのメアリーちゃんに繋いでるよ。いつも適当な事ばかり言つてるから気軽に見に来て

ねー」

『フネちゃんにはビーベックス上手くなってるぞ。面白いから来て』

『パンプキン……お前……。いつも適当な事言ってる自覚あったのか……』

そうして通話が切れた。今日来てくれると事前に連絡をくれた人はまだ何人もいる。それでもやはりあの二人には特別なものを感じる。これが同期の絆というやつなのだろうか。

元々先輩相手だろうが人間相手だからと考えて尊敬の念などをあまり持ったりはしない私だが、とはいえあの二人を相手にするのは格別に気楽だ。

逆に言えば、これから相手する面々はそこまで楽な気分で相手できるような存在ではない。癖があるのは先程の二人もそうなのだが、今から凸に来るのはさらなる強者。しかも、まだほぼ話したことのないような人間も相手しなければならぬ。祝いに来てくれるのだからそれはいいのだが……身構えてしまう。

アバターモエクススの層の厚さを感じるというか、皆々濃い存在である。視聴者のために相手をネタにするか、ネタにされるか。下手すれば食べられるのは自分だ。吸血鬼である自分が情けない姿を晒すわけにはいかない。悠々とした態度で気高さを見せなければ。

さっきの時点でむっつり扱いだしそんなの幻想だよな。分かってる。でもとりあえ

ず強い言葉で自分を鼓舞したかったただけだ。

チャンネル登録者数五万人記念凸待ち企画（後）

「チャンネル登録者……」

「五万人……」

「おめでどう」

次に凸してきてくれたのは灰音クライネ、ナハトム姉妹だ。相変わらず耳にぞわぞわする感触を味合わせてくる囁き声で話してくる。

「ああ、ありがとう」

「メアリーちゃん、昼は活動しないの……？」

「銀髪のメアリーちゃん、かわいい……」

むむ。難しい話題を出してきた。彼女達とは朝から夜まで愛し合っていたから私が昼間活動しても問題が無いの知ってるんだよな。そしてナハトム、そりゃ銀髪状態の私がかわいいだろうよ。あれだけ好き放題できる女は他にいなかっただろうからな。

「普段は太陽が出てる間は電脳空間で寝ているよ。必要な事があれば眷属に任せる」

「電脳空間……」

「見せてもらえばよかった……」

いや、二人は入れないしな。それともあれか、私がパソコンの中に入る姿を見たかったってところか。

「それならまた来るといいさ。また直接会っちゃいけない訳じゃない。またオフロラボしよう」

好き放題こそされたが、それでも彼女達が嫌いな訳じゃない。むしろ一種の好ましささえ感じている。

「とても、いい考え……」

「また、遊びましょう……でも、それまでに」

「しつかり練習しといてね」

何を、とは言わなかったが当然分かる。私の夜のテクニクだ。彼女達にしてみれば夜のテクニクどころか一日中のテクニクかもしれないが。

「ああ。分かった。しかし二人は上手かったな。たくさん練習してたのか？」

「ナハトムといつもしてる」

「クライネと暇があればしてる」

「二人は仲良し」

双子同士でやってるのか。二人の事だから毎日やってるんだろ。そりゃ上手いわけだわ。思い出すだけで胸の先が疼く。

『何の話だと思おう？』

『大乱闘スマッシュブラス』

『そーいや双子もスウィッチ持ってたな』

『夜の大乱闘』

『そっちであつて欲しい』

感想欄も盛り上がってきた。実際、くじらサーバーの存在こそ知られてる筈は無いが、我々が行為に及んでると本気で思つてる層はどのくらいいるのだろうか。バレたら炎上か、それとも全力で喜ぶのか。二つに一つだ。

「それじゃあ私達は……」

「ボクたちは……」

「この辺でお別れ。またね」

二人は最後に改めておめでとうと言ひ残して去つていた。輸血パツクの血液の入つたワイングラスを一度傾けながら、次の凸者を待つ。すると、ポコポンポコポンという通話の繋がる情けない効果音が流れてきた。

「はあい♪ メアリー。五万人おめでとうね」

次に現れたのは汐井レナ。奇しくも双子、レナとオフロボした順番だ。

「ああ、ありがとう。そっちの調子はどうだろうか」

「悪くないわ。今MMDなんか見ながら新しいダンスを練習中。来週くらいには新しい動画を公開出来ると思う。プレミアム公開で投げ銭なんかもしやすくしちゃおうってワケ」

「レナは正直だな……」

呆れ半分に私は言ったが、これだけ正直だと見てる方も信じられるのかもしれない。「隠してる事もあるわよ。メアリーとのあの夜の事は秘密でしょ？」

お前本当何言ってるんだ。

「そこまで言って隠してると言えるのか……？」

「何の事は言っていないもの。二人でラブホお泊りデート。楽しかったわよね」

「ああ。レナの秘密のダンスは凄かった」

チキンレースだ。具体的な事は、言わない。けれど出来る限り過激な話を提供する。このギリギリのラインは非常に難しい。少なくともリアルタイムで配信してる今みたいな状態ではやりたくない。

「まあね♪ そうそう、7800円も貰って悪かったわね。ラブホ代一人分にちよつと届かないくらい貰えたから助かったわ。事実上の折半ね」

一回イカされる度に100円を支払う契約は結局、連続絶頂で無理矢理搾り取られた。眼を合わせられるタイミングで魔眼使ってなかったら多分一万円全部搾り取られ

ていた。もしくはそれ以上。

その話を出されたらもう、私の負けだ。最近負けてばっかりな気がする。強く気高く美しい吸血鬼でありたいものだ。

『7800円?』

『円光?』

『ロリが金払うのか……どっちもロリだった』

視聴者からも疑問の声が上がっている。この辺がラインの限界だろう。それを向こうもすっかり感じ取っていて、話を切り上げてきた。

「じゃ、私はこのくらいで。改めて五万人おめでとうね♪」

通話終了。次に連絡をくれたのは……ほぼ知らない相手だ。事前連絡は貰っているので、立ち絵だけはしっかり用意してあるが、何を話していいかは分からない。

「吾輩こそ、アバターモエクスの四期生、ハム☆スターである！　メアリーと言ったか。この度は五万人おめでとう！」

名前とは裏腹にリスの獣人とかいうネタキャラ。それが彼女だ。立ち絵で自分自身より高い位置にある尻尾が激しく自己主張している。

「ああ、ありがとう先輩。わざわざ来てくれるとはありがたい話だよ」

「うむ。吾輩、楽しいところには参加したいタイプ故な。よって、顔をつっ込んでみた。

……ん？ 突っ込むのは首だったか？」

『ハム助はこれだから』

『リス公には参るね。ごめんなお嬢』

『先輩とか呼ばなくていいんだぞ』

『これはもつと雑に扱っていい奴』

いや、普通にどう呼んでいいか分からんだけだ。ハムで呼び捨てか、スターと呼ぶべきか。それともまとめて呼ぶべきなのかまったくどうしていいやら。

「吸血鬼という夜の存在と、吾輩のようなスターが合わさればそれは星空輝く夜空である。……星空と夜空で被った？ まあいい、ニユアンスを掴んでくれたまへ」

やばいなこいつ。どう扱っていいか本気で分からん。

『あ、お嬢が頭押さえた』

『お嬢、真剣に考えるな。もつと雑でいいから！』

『脊髓反射で喋ってるパンプキンタイプだから』

パンプキンの方がよっぽど話通じるわ。え？ というか全員コラボ企画、これとまた一対一で会話するのか？ 辛くないかそれ。

「つぎの目標は十万人と言ったところか。それだけ行けば吾輩のような一流どころと言って良いだろう。吾輩、まだ到達しておらぬが」

『じゃあなんで吾輩みたいとか言うんだよ……』

『ていうかお前どう考えても一流にはなれねえよ……』

『五月蠅い雑壇芸人みたいなもんだろ……』

コメント欄も疲れ果てていた。そして私が喋ってないのに無限に喋ってくる。流石にトーク慣れ……してると言っているのか？ 会話のキャッチボールというよりはピッチャーとキャッチャーじゃないか。

「もういい。分かった。ありがとう道化。また連絡するから今日はこの辺でな」

強制的に通話終了。やばいタイプのやつだった……アバターモエクスの幅広さを甘く見てたかもしれない。

この疲労感を抱えたまま、あいつと対峙しなければならぬ。そう、それは。

「こんばんは、メアリーさん。チャンネル登録者数五万人おめでとうございます」

「ありがとう。お前と出会ってからの私は人生が変わったようだよ」

「それはよかったです。なにかあったら私に相談してくださいね。なんとかしますから」

倉瀬アズキ。私という吸血鬼を倒したところのある、それでいてレズに墮としてくれた。まごうことなきラスボスだ。

「それは頼もしい事だ。さっそく一つ相談したいことがある」

「なんでしようか」

「お前を倒したい。そしてそのまま吸血して眷属にしてやる」

宣戦布告を仕掛ける。これはまごうことなき私の本心だ。負けっぱなしではいられない。吸血鬼は確かに人間に滅ぼされる事もあるかもしれない。だが、基本的に吸血鬼と言うのは人間に勝って当然の存在なのだ。

彼女は一つ、軽く唸ってみせて。

「じゃあ、私の要望としては100%の貴女を倒せたらなと思っています。ゲームの中で、ですが」

とてもじゃないですが現実では勝てないです。そう言って彼女は笑う。私の100%、それはつまり。

「……人間から直接、吸血しなければならぬな」

「そういうことですね。どうです？ 吸血鬼としても悪い話ではないのでは？」

「そうだな。そうになると、誰から吸うか。吸血鬼らしくはないのかもしれないが、あまり暴れて配信が出来なくなるのは困る。私は電脳吸血鬼の配信者として設定された存在だ」

どうしようもないなら、確かに吸う。だが、それは最終手段。そのために代用品アナザーブラッドを考え出したりもしたし、女の汁や描いた輸血パックを味わって多少なり

とも力を蓄えてきた。

「じゃあ、アバターモエクスの皆さんから吸うのはどうですか？」

「なんだと？」

「あの企画があるじゃないですか。その時に、オフで会うんですよ。それで、吸血OKの許可を貰えばいいんです」

まさか、そのために全員コラボを行うように私を扇動したのか……？

「メアリーさん。デス子を確認してください。あの企画に参加する事に全員が良いと言っています。最後の一人もついに許可をくれました」

私は言われたとおりにデス子を見てみると、そこには連絡のつかなかった黒井ネココが今回の全員コラボ企画に参加したいと言っていた。都合の合う日さえあれば是非、と。

「さあ、今こそリスナーの皆さんに報告してください。アバターモエクスの全員を巻き込んだ大型企画を！」

促されるままに、私は宣言した。

「この私、メアリーが他のアバターモエクス十九人と誰一人の抜けも無くそれぞれ行うコラボ、ブラッディ・パーティーの開催をここに発表する！ 先日行った灰音クライネ、ナハトム、汐井レナとのコラボはその一環だ！」

爆速になったコメントが、サプライズで用意されたこの企画に興奮しているリスナー達の様子を端的に表していた。

ブラッディパーティー前夜祭

元々アバターメイカーはイラスト等の制作依頼を受ける会社だった。それがV t u b e r の台頭に伴い、個人で使えるキャラクターを求める人間が増えたことで、その依頼品のサンプルとして作った立ち絵を実際に動かして見せる試験的な意味合いで稼働したプロジエクトがアバターモエクスだ。

それが一期生の活躍により人気を博して二期生が募集され……と続いてきた結果が我々五期生まで繋がったのだ。

何が言いたいのかと言えば、あくまでアバターメイカーが本流、アバターモエクスは支流なのだ。親と子と言ってもいい。

そして私はアバターモエクスの事務所をすっ飛ばして、アバターメイカー本社までやってきている。それだけ私の存在が無視できなくなったのだろう。私も色々やってきたからな。忍転道のゲームでチート、魔眼による画面の前の相手に対する一時的な精神コントロール、吸血鬼の姿のままファンの前に姿を見せる……色々だ。

吸血鬼の縛りのせいで本社に入れるか地味に不安だったのだが、来るように要請されている時点で招かれているという認識になっているらしく、なんの問題も無く中に入れ

た。そこで私を待つていたのは五期生の女マネージャー、口うるさい田口だ。

「明智さん！ こつちですよこつち！ メイド服なんてこんな場に着ちやつてもー。そんなに常識が無い人だと思いませんでしたよ」

眷属の元の名前が明智だ。その名前を聞くと不快感が込み上げるので封印してきていたのだが。ちなみに下の名前はもつと嫌い。

「私は眷属です。従者に相応しい格好をしているだけです」

「眷属？ 従者？ 貴女大丈夫ですか？ ……って、こつちの小さい子が、例の。うわあ、本当にいたんだあ……銀色だけどたしかにメアリーだ」

物珍しい。という思いがありありと取れる表情で私をじろじろと見回すマネージャー。邪魔くさいことこの上ない。

そして、銀髪と銀目の吸血鬼としての力がろくに使えない状態となっている。なぜなら昼過ぎの時間に待ち合わせだったからだ。眷属を連れてきたのもそれが理由で、私の力が女汁やイラスト輸血パックなどで強化された事で、眷属の性能も上がっていた。なにかあれば私を連れて逃げるくらいは普通にできるだろう。

「今回私を呼んだのは貴様ではなからうよ。さつきと案内してもらおうか」

「うわあ、生意気な子ですねえ。ネタのためによくこんな娘見つけられましたよ明智さん」

目の前にいて未だに吸血鬼の存在を信じないのかこの女。吸血鬼らしい事をしていないとはいえ、頭固すぎないか？

「まあ、いいです。メアリーちゃんを呼んだのは確かに私ではありません。アバターメイカーの社長、百合花響様です。失礼の無いようにお願いしますよ」

百合花？ 聞いたことがあるな……？ などと思い返しながら、私達はエレベーターで最上階へと向かった。

辿り着いた最上階は開けた空間で、警備員が二人。しつかりと片付けが行き届いている。必要な物が最小限といった様子は所有者がきっちりとした人なのだろうという印象を与えるものだった。光の差しこまぬように閉め切った部屋のデスクの向こうには一人の女性が座って私達を待っていた。

「ご苦労。田口だったか。よく吸血鬼を連れてきてくれた」

「いえ、このくらいの事なんでもないです。でも社長までこの子が吸血鬼だって信じてるんですか？」

「ふふふ、彼女を見ているがいいさ。そのために部屋を吸血鬼を迎えるのに相応しいようにしている」

僅かだが、力が漲っている。今は確かに昼だが、日光の遮られた今の環境なら、多少なりとも吸血鬼らしさを取り戻せる。

「わわわ、髪が金に染まっていく……？　眼も赤く。そんなの現実的じゃない」

「今見えているものが現実だよ。さて社長さん。どうにも私に詳しいようだが、どこから聞いた？」

「麗の奴からさ。君ともデートした仲だろうか？」

「そうか、思い出した。百合花麗。それは倉瀬アズキの本名だ。」

「あれは私の姉の娘、姪というやつだね。その伝手でプロゲーマーチームから引つ張ってこれた。そしてアバターモエクスを大きくできたのもあいつの力が大きい。そして、君の事も教えてもらった。良い事尽くめさ」

「そうか。それで、私に何の用だ？」

「一応聞いておかねばならないからね。君はアバターモエクス所属として活動しているが、我々の言う事を聞くつもりがあるのか、とね」

なるほど、首輪をつけられる存在なのか確認したいという訳か。しかし、その言い方は悪手だ。

「私は配信者がやりたいだけだ。いや、やらなければならぬ。その上で協力する事はもちろんある。だが、一から十まで言う事を聞くほど従順でもない」

「そうか……：そうだろうな。怪物が存在するとして、それがなんでも言う事を聞くなどという甘い話もないだろう」

「しかし、不用心だとは思わないのかね。わざわざ自分の陣地に誘い込んでおいて、吸血鬼の弱点である日の光を妨害するとは」

倉瀬アズキは私の配信を見ていたようだった。ならば、魅了の魔眼についても知っているはずだ。今ここで強めに魅了してやればこの会社も乗っ取れる。いや、そういえば魔眼を永続させたところは見せてない。だから油断しているのか。

「信用しているのさ。ふふ、化物を信じるなど馬鹿らしいかもしれないがね。しかし麗の奴の言う事なら信じられる。君はそこまで暴力的ではない、と。」

そして、この暗所は信用して欲しいという思いの表れだよ」

「配信者仲間ならともかく、ただの人間と慣れ合うつもりも無いのだがね」

「手厳しいことだ。それでも君の上司に当たるといふのに」

私は鼻を一つ鳴らした。くだらない事だ。どこまで行こうが人間は人間、吸血鬼は吸血鬼だ。吸血鬼の上人間が立てるなど、思い上がりも甚だしい。

「吸血鬼になってから出直してこい、としか言えんな」

「まさにそれが本題だ」

「——なるほど」

合点がいった。権力者というのは往々にして求めるものがある。例のやつだ。

「私もなりたいのだよ。吸血鬼に。永遠の命が欲しい」

「俗物め」

私は苦笑する。わざわざ呼び出して、協力を求めるのは怪物を恐れていたからではなく、怪物を求めていたからだ。

「吸血鬼には分からんさ。この切実な願いはね。それに、そちらにメリットだってある」
「聞こうじゃないか」

「私は永遠の命を持って、アバターモエクスを永続させるように尽力してもいい。そちらも配信者を続けたいなら、バックアップしてくれる組織があると便利だろう？ 事実、忍転道の件ではこちらがきつちり頭を下げた。彼らの前では吸血鬼の敵という立場を取って見せ、弱点を探るという名目でもう少しやらせてくれと頼みこんだりもした。有用だっただろうか？」

事実だ。あの件でいちいち謹慎だなんて話になってはやってられない。

「それだけじゃない。これから私が力になってやれば、もつと自由に配信が出来る。そして、私が権力を増すほど、君は好きにやれるようになるんだ」

「面白い」

「君の配信を永遠にバックアップする。組織という大きな力を得るために、多少の労力を払ってもらってもいいだろう？」

「ここまで黙っていた一人の女が話に入り込んできた。」

「ち、ちよつと待つてくださいよ！ それじゃ私達はどうなるんですか！ それが本気だとしたら老不死の怪物の元で働くって言うんですか！」

マネージャーの田口だ。そういやいたな、こいつ。

「君達は何も変わらん。ただ、将来的に私が権力を握り続けるだけだ。ああ、君はアバターモエクススの担当だからな。むしろ立場はよくなるかもしれない」

「そういう問題じゃなくてですね！ 私は良識の話をしているのです！」

笑っていた。私も、百合花も笑っていた。

そして紡がれた言葉は。

「捨ててしまえ、そんなもの」

そんな社長の言葉に、彼女はへたり込む。

どうでもいい事だ。話を進めよう。

「残念ながら吸血鬼そのものにはなれない。だが、貴様を私の眷属にしてやることで老不死は可能だ」

「安心した。ここまで話しておいて無理だと言われたらどうしようかと思つたものだ」

「公表します……」

ぼつりと語る彼女は少しずつ力を取り戻していつて。

「社長が怪物になるというのなら、私はその件を世間に公表します！ 貴女達の野望は

阻止させていただきます！」

「君は本当に愚かだ……そんな事、今口にする事とじゃない。そうすればどうなるか、考えてもいなかったのかね。吸血鬼。いや我が主、マイロード。彼女も眷属に。目撃者の口を封じましょう」

「よかろう。騒ぎにならない事は私としても大切だね。やってみたい事もあつたんだ」
彼女は逃げ出した。だが、遅い。私はその背に飛び掛かると、首筋に向けて歯を立てた。

「あつ……くう……あつ、あつ……」

私が初めて私から食らった吸血は痛みを伴うものだった。だがこれは違う。快樂吸血だ。

吸われるほどに気持ち良くなる、その極限は死。そして、眷属化は死体にも行える。つまり彼女は。死ぬほどの快樂に包まれ、その生涯を終えた。

「眷属作成——」

死体に、私から溢れ出る闇が入り込みその身体がぴくりと反応し、目覚めた。

「おはようございます。マスター」

成功だ。口うるさいマネージャーは、最高の快樂と共に私の眷属へと生まれ変わった。

「素晴らしい……ふふ、マイロード。実は彼女を置いておいたのは実験体の意味もあったのですよ」

「これだから百合花の一族は嫌になる。悪知恵の働くところはアズキそっくりだ。……その頭脳、私の元でしつかり活かしてもらおうからな」

今腹が立つことがあるとしたら、人間一人を吸血しただけでは私は完全体になれなかった事だ。せいぜい80%と言ったところか。だが、そんな事は気にする事は無い。あと三人もこの場には人間が残っている。

「さあ、百合花社長。首を差し出せ。そして誓え。我らアバターモエクススの永遠の繁栄を」

「かしこまりました」

快樂を伴う吸血が再び行われる。さっきの奴もそうだが処女だ。血が美味い。

「ああっ……つよ、すぎ……」

血の一滴も残さない長い吸血により百合花の命は失われ、そして眷属という新たな存在へと変換した。

警備員二人も襲った。この場には私の行為を咎める者は存在せず、全てが従順なるものだ。

もう、誰も私を止められない。口うるさいマネージャーも、会社のトップも私の下に

ついた。

吸血鬼としての力も100%発揮できる。アズキとの決戦の準備は整った……だが、まだ吸える。

アバターモエクスの仲間は眷属にするつもりは無いが、それでも血を頂けるならそれに越したことがない。

配信者としての体裁は整えながら血を頂き、あの忌々しきアズキも倒してやろう。そしてあいつだけは眷属として従順なペットにしてやる。

そこからは私の天下だ。無限に続く配信者生活を楽しみ、裏で吸血も行う。そうだ、六期生なんかは私の趣味で決めてやってもいいかもしれない。

誰も私に逆らえぬ。圧倒的な力に溢れている。ほぼすべての吸血鬼としての力が解放された。

陽の光だけが私の天敵。それ以外のすべてをこの力で服従させる。

百合花と別れ、眷属とマネージャーを連れて悠々と会社を出た。誰も怪しむ者はいない。マネージャーとも別れ、私は再び銀色の眼と髪になり一時的な無力感を味わう事になった。落差がきついな。

次のコラボ相手は決まっている。一期生、内藤ナインだ。ただこいつもおそらくエロが上手いタイプ。これだけ大口叩いておきながら性技で負けたらどうしよう。かつこ

悪いなんてものじゃないぞ。圧倒的な力を持ってしても、いまだにそつちに自信は無かった。

薔薇よりも香しく

状況を改めて解説しよう。私を除く十九人のアバターモエクスとそれぞれコラボするという企画、通称ブラッディパーティはフネ、パンプキン、アズキ、クライネ、ナハトム、レナとはコラボした事があるので除外。今日から内藤ナインという一期生とコラボする事になり、男含めた様々な相手とコラボしたら最後はお母様。オフコラボになるかは相手による。出来たら男はオフコラボしたくないが状況による。

更にはその後、アズキにリベンジを仕掛け眷属として迎え入れてやろうという計画である。そのために力を少しでも多く蓄えるために仲間からも出来るなら吸血をさせてもらいたいのだが……

「おー、本物じゃ本物じゃ。愛いのうメアリーは」

私に抱き着くこのおっぱい女。なんかメスの臭いが凄い。フェロモンというのだろうか。吸血鬼としての力を回復させて得た強力な嗅覚はくらくらするほど、この女の強い臭いにやられている。なんかもう今日は負ける気がするわ。なにせこいつも一期生。つまりくじらサーバーの一員だ。コラボ終わったら二人でお楽しみという事になる。そこで吸血もさせてもらえればと思うのだが……

とはいえ、仲間から無理強いするつもりはない。正直に言えば、女は全員眷属にして私と一緒に永遠に配信者をやってもらいたい……だと言うのに、相手に許可を取らねばならないと考えてしまうあたり、私は甘いのだろう。吸血鬼はもつと傍若無人でいいと思うのだが。どうせ眷属にすれば嫌われようが関係ないと言うのに。人間だった頃の倫理観がまだ少しは残っているという事なのだろうか。邪魔な事だ。

しかし、それももうすぐなんとかなる予感がしている。私の吸血鬼度合が更なる吸血で100%を超えた時こそ、完璧な吸血鬼になれる気がする。その時は誰にも負けない存在になるはずだ。

だから今は一時的に負けよう。孤栗玖子……内藤ナインの本名。この女の柔らかかな胸に顔を埋め、圧倒的なフェロモンに溺れるのを楽しむ。やっぱりでっかいおっぱいは最高だな。

「で、今回は雑談でいいんだな？」

ムラムラする気分を抑えながら、玖子と今回の配信の打ち合わせをする。彼女の膝の上に乗せられて、後頭部でおっぱいの感触を味わいながら。

「そうじゃのう、妾ゲームが上手いわけどもないからそれでよいぞ」

返事をしながら彼女は私の身体を弄る。それは徐々に敏感なところに近づいていき

……

「おい、真面目な話をしてる時に——むぐつ」

注意しようとした私に被せられた、フェロモンをたっぷり感じるこの布切れの正体は。

「知っておるよ。くじらサーバーの連中もみーんな、妾の香りが好きなんじゃよなあ。妾のブラ、匂いが染みついておるじやろ？」

抵抗する気を失った私のブラを剥ぎ取ると、彼女は十本の指で私を食った。取られたブラは彼女の手でしつかりと匂いを嗅がれ、まるで下着の交換会だ。さすがの私も羞恥を感じざるを得ない。

一方的な性的な悪戯をひとしきり楽しまれた後、彼女は私の唾液がついたブラをそのまま身につけ、私も彼女がしゃぶったブラを身につけさせられた。

「ふう……いやあ、よかったよかった。それで何の話だったかの？」

まあ、あれだ。ムラムラはしてたから。ちょうどよかった。そう思っておこう。ブラめっちゃ濡らされたけど。

「今日の配信内容についてだ……雑談でいいのは分かったがトーク内容はどうする……？」

息も絶え絶えに、私は返事を返す。

「この企画、ブラツディパーティについて聞きたいこともあったからのう。それと吸血

鬼に聞いてみたいことあたりから話を進めればよいのではないかの」

初めからそういう話がしたかったよ。一期生でまともなのはお母様だけか……？

そんな疑問を抱きつつ、配信予定時間が来る。配信開始だ。

「ごきげんよう、家畜共。トリオ・ザ・ハロウインのメアリーだ。ようこそ、ブラッディパーティーへ。今日のゲストはこちらだ」

「こんばんはじゃ、人間諸君。皆の姉、内藤ナインじゃぞ」

ナインの挨拶に違和感を覚えるところだが、これはそういう設定だ。正体を隠した九尾の狐らしい。だから名前が九を意味するナインなのだとか。姉っていうのは勝手に付け足したそうさ。

『こんヴァンパイア』

『こんヴァンパイア絶対に流行らすな』

『もう流行ってる』

『ナイン様ー!』

『ぼんこつ様ー!』

誰だぼんこつって言ったやつ。くじらサーバー内でならともかく、視聴者の前で醜態を晒したことは無いはずだが。

そう訝しんでいると、ナインが補足してくれた。

「ぼんこつは妾宛てじゃなあ。いつの間にかそう呼ばれるようになっておつて、難儀しておるわ」

「ん？ 何かそう呼ばれるようになった理由があるのか？」

「ゲームが下手でのう……コントローラーを見ている間に画面が進んでしまつて上手くやれんかった」

おばあちゃんレベル……いや、下手とは言つていたがそのレベルか。喋り方も合わせれば本当おばあちゃんじゃないか。よくそう呼ばれないものだ。

「まあまあ、それはよいじやろ。今日聞きたいことがあるのは妾の方じや。このブラッディパーティというやつは全員オフロボ前提なのかの？」

「可能な限り、と言つたところか。強制はしない。物理的に距離が遠いという場合もあるしな」

嘘を混ぜた。アバターモエクスは全員都内住みだ。もしくは都内に引越してきた者だけが合格となっている。

『サイバともオフロボするの？』

『男と二人きりでオフロボはちよつと引くわ』

そんなコメントで溢れかえっている。多分、視聴者の一番聞きたかつたことだろう。

「男連中はオンラインでいいと思ってる。だが、絶対ではない。私はアズキと戦うために吸血を行いたいと思ってる。他の女のモエクスメンバーでその協力者が少なければ、彼らに協力を願う場合もあるかもしれない」

『ナイン姉協力お願いします！』

『お姉ちゃん！』

『皆の姉なんだからお嬢の姉のはず。妹の頼みぞ？』

「まったく、都合のいい奴らじゃのう。こういう時ばかり姉、姉と……さて、メアリー。吸血はなにかこちらにリスクはあるのかの？」

「ここは正直に行こう。仲間には誠実に行きたい。」

「とはいえ、そう考えられるのも今の内だけかもしれない。もしかしたら、彼女への吸血が私のトリガーを引くきっかけになって、情け容赦のない邪悪な吸血鬼に変化するかもしれない。」

「最悪、死ぬ」

『ひえっ』

『駄目ですよ』

『サイバー、出番』

「そりゃあ、血が少なくなりすぎたら失血死だ。それが人間の常識。だが、吸血鬼は一

味違う。

「しかし、そうなった場合でも私の眷属として永遠を生きられる。私の命令には絶対服従になるが、それ以外は平和なものだよ」

「ふむ？ その割には、この家で見かけたお主が眷属にしているメイド服の娘は妙に喋らんぬ。眷属は全てあなつてしまうのではないか？」

「厳しい指摘だ。しかし思い返せばあれにも理由があった。

「私の無意識が関係している。あいつには喋って欲しくないと私が心の底では思っているからだろう」

「無意識？ 無意識下の命令も聞かねばならぬのか」

「そうなるな。私が命令するまでもなく思い通りになる人形であるというのは事実だ」

「ふむ……では、なぜあのメイド服の娘は喋らせたくない？」

理由は単純。

「あれは人間だった時代の私だ。あれが喋ると嫌でも昔を思い出す」

「人間だった頃の自分を眷属にしておるのか！ そんな事まで出来るのか!?!」

「ああ。あれは……つまらない人間だった」

普段、威厳を保つためにあえて低くしているのとは違う。心からの低音が絞り出されたが、リスナーは眷属になるべきかならないべきかという雑談に興じていて気付いてい

ない。

『言つてもお嬢なら無茶な命令しないでしょ』

『でも無意識では分からん事もあるだろ』

『気に入らなければなんか黙りっぱなしにさせられるんだろ辛いって』

吸血鬼はいい。力がある。なんなら今自分で決めたルールを破って横に座る女の血を力尽くで吸つてやることだつてできる。それは強者だからだ。自分で考え、自分で決める。選択する自由がある。

正義の味方でもなんでもない、吸血鬼という存在であるが故に。

だから私は今、とても楽しいのだ。たまに、いや、結構やり込められる事こそあれど、本気で嫌なら首の一つでも折つてやればいい。

それをしないのは、あくまで女同士の戯れに過ぎないから。子供の遊びで本気で怒り出したりするほど幼くは無いのだ。しかし、気に入らなければ折檻できる立場である。

それが、堪らなく愛おしい。

私は強い。それがアイデンティティだとするならば、私を倒すような存在は許されない。

倉瀬アズキが私に女同士の良さを教えてくれたことには感謝している。だが、私を負かした事は許される事ではないのだ。必ず、全力の吸血鬼となり彼奴を圧倒しなければ

ならない。

そして、その舞台も用意してある。私と奴に相応しい舞台を。

「ふーむ。吸血し過ぎなかつた場合、眷属にはならんのか?」

「やろうと思えば出来る。私の匙加減一つと言ったところだよ」

「献血のつもりでやろうとは思えんなあ……」

ふむ、どうにも旗色が良くないか。

「ナイン、お前は美しい」

「な、なんじやいきなり」

「その美しさを永遠に保つつもりはないか?　そして私と共に永遠に配信者となるの

だ。それは、きつと楽しいぞ」

百合花社長もそうだが、自分の外見に自信のあるような奴にはこういうのが効くようだ。つまり今まで会ってきたアバターモエクススの連中には効く殺し文句だ。しかしな
んであいつら配信者やってるんだらうな。アイドルとかやったらいいのに。

いや、もしかしたらまだ会ったことの無いメンバーにいるかもしれない。アイドル崩れの配信者。

「……一晩、考えさせてくれるか?」

よし、いい方向に持っていった。あとは夜、ベッドの中で甘く囁いてやればいいのだ。

「構わんさ。私には時間がたっぷりある。人間と違って、ね」

本当はアズキと戦う前に血液補給したいんだが、それを言うのみな。最終的にモエクススの女全員を眷属に出来れば良い。

「そうか、では配信もこのあたりにしよう。それでは家畜の諸君、ごきげんよう。良い夢を」

『お嬢おやすみ』

『ナイン様大丈夫かね』

『ブラッディパーティ怖杉内』

配信を切った瞬間の事だった。ナインはおもむろにパンツを脱ぎだすと、私の頭に被せてきた。濃厚なフェロモンが脳の奥まで染みついていくような感覚だ。

「考えたのじゃがな。お主が無意識化でさえ、妾が妾らしくあつて欲しいと願うようになれば、支配されることなく永遠の命を得られるのではないかと思うのじゃよ」

つまり、これはあれだ。

「一晩、しつかり考えさせてもらおうぞ」

また勝てなかった。

お別れは突然に――永遠なれヴァンパイア――

結局ナインの血を吸う事は出来た。おもちゃで処女を破った場合、処女判定でいいらしい。男と絡むのが駄目なようだ。

その後も自分を俺様と呼ぶ尊大な美少女、千鶴木ユズリハから血を吸い。

日真コノエは明るく元気なゲームマー少女で動機的に当てるのを得意としているのを野球ゲームで知った。吸血には消極的だったので見送った。他の人達次第でOKするかもという内容だった。

ここから三期生。刃ココロは忍者で、ござる口調の少女。紅白ミイコは生真面目で、自分の立ち絵が常に刀を構えている事を視聴者にいじられる。霧野アルケはアルケミス、錬金術師……というなのカプ厨。この辺は初心だったのでセクハラでムードを高めて吸血した。

ダー・バーテンは一度後回し。男二人はそんな扱いだ。

四期生一人目はメイドドッグ。名前の通り、メイドで犬耳。リスナーをご主人様と呼ぶ。麻雀、カードゲームなどを一度に複数プレイして尚且つ勝率がいいというマルチタスクだった。脱衣麻雀で勝負して勝ったので吸血。

黒井ネココ、こいつは苦勞した。というのも滅茶苦茶忙しいらしく、コラボの時間を作るのに大変だったようだ。あまりに珍しい猫耳少女なため、梓が始まるとおかえりで埋まるとか。順番としては他の面子終わってネココ、バーテン、サイバ、お母様である。眷属になれば働く必要が無いと分かったら喜んで吸血させてくれた。この時初めてアバターモエクススのメンバーを眷属化し、眷属にする時アバターの見た目に外見を作り変えた。猫耳少女の完成だ。

角田ウサミ。一角の角をウサミミを身に付けたアニソン大好き少女。高音がめっちゃくちや出せる。一生歌ってられるよと言ったら喜んで眷属化。

意外だったのはハム☆スター。五万人記念に来た時のあの姿とは打って変わって、リアルで会うと丁寧でどこか怯えてる様子のまさに小動物。どうにもネット弁慶だったらしい。

ダー・バーテンとの再会はオンラインで。それでも荒れたのだが……彼は少しずつまた受け入れて貰うからと前向きな姿勢だった。

サイバ、彼は私の下僕となる事を条件に眷属化。ネット回線を通じて直接会いに行つた。身体を作り変えて銀髪褐色巨乳眼鏡の女に変えた。立ち絵も眷属一号が書いた狼女に変更だ。まだ動かせはしなかったのだから p n g だが。いずれは百合花社長を通じてあれを公式に動かせるようにしてもらおう。ただ女になった。それだけで彼に對

する評価はぐるりと変わった。ゲーム下手なものも頑張っていると評価されるようになる世の中の視線というものの単純さを味わった。

そして、お母様だ。彼女は全員とコラボした私の努力を認め、抱きしめてくれた。一応、自分で描いただけあって私の見た目は好みだったらしい。吸血もさせてくれて——これにより、私の吸血鬼力が限界まで高まり、常時大人化できるようになったのだ。

アズキとのリベンジマッチ。舞台は……アズキの得意なビーベックスレジエンス。その個人サーバーに、あくまで個人サーバーだけという条件でゲーム内に入る許可を会社から出してもらった。

そこでの戦いは、結末のところだけ話すと建物内に立てこもる私の前に堂々と姿を現すアズキ、銃を放つがすべてオート霧化で無効にする。大人状態はダメージ無効という訳だ。

しかしそこはアズキ、無策ではなかった。建物上部に投げものを投げつけ、建物を破壊した。一部露出する建造物から太陽光が降り注ぐ。弱体化する私。

しかし、待機させておいた蝙蝠の集団に指示を出し、建物から溢れ出る光を塞ぐ。復活した私はもうアズキに次の手を打たせない。拳一撃で沈めて終わりだ。

ダー・バーテンを除くすべてのアバターモエクスは吸血、眷属化、見た目の立ち絵風変更まで済ませ我々は永遠に続く配信者となった。

くじらサーバーは私が支配者となり、三期生、四期生も入れてやることにした。なぜなら眷属相手にそういう事するからだ。眷属同士でやる事も許可しているのでアズキがハッスルしている。

なにせ、忘れているかもしれないが私は電脳空間に屋敷を持っている。そこで全員が暮らしているからだ。

そのうち、人間だったダー・バーテンは人間であることを誇ったまま死んでいった。それは眷属となった者達に差し出させたもの、死ぬ自由。

それまでに六期生や七期生、八期生とどんどん増えていくアバターモエクス。これらもすべて眷属へと変えてやり、アバターモエクスの天下は私が取っていた。

一からゲームを作る事にも成功した。誰もが憧れるVRMMOだ。私はこれを公開し、一般人共と一緒にプレイをしながら配信していった。

そして私の力で永遠の命を得られることを知ると、著名人が私に接触してくるようになる。気を良くした私は自分を楽しませてくれた者には褒美として永遠の命をやろうと宣言し、必死な彼らを笑ったものだ。

今、私の生はこんなにも楽しい。そして、これからも。

ライバルなんて対等なものとはゲーム内で作ればいい。圧倒的な現実における力。ついで私を倒せるだけの存在が二度と現れる事も無く、私は配信者として毎日を謳歌して

いる。